



山賊は悪党で

88

町と町を結ぶ街道には様々な種類がある。平原を真っ直ぐ通る街道もあれば、曲がりくねった丘陵地を駆け抜ける街道。その中には勿論、山道だって存在する。山間にある大きな炭鉱の町を繋ぐ山道に、山脈を抜けるための山道と、色々だ。

「よう、ちょっと止まってくれ。死にたくなかったらな」

「た、助けてください、命だけは！」

そうした街道は、町々を治める領主である貴族や国を治める王が管理しているもので、町から近ければ騎士団や衛兵が巡回し、警備をしている。

商人は町に金と物をもたらし、国や領主に利益を与える。その商人は街道を歩いて町を往来する大事なお客様だった。そんな商人達を護るために、領主や国も手を回している。

それでも、長い長い街道全てを護りきれぬわけでもなければ、町によっては街道に手を回せるほどの兵員すらままならない。そういう事態に陥っている領主の方が圧倒的に多い。

「聞き分けの良い奴は大好きだぜ？ まあ、安心しろよ殺しはしない」

「わ、判った！ なんでも、言う事を聞く」

「素直で宜しい」

だからこそ、賊徒と呼ばれる無法者がのさばり、いくら国や領主が討伐隊を出して討伐しようと、消える事は無く、居るところには居て、居ないところには居なかった。

「商人様よ。貴方様は、何処まで行くのでしょうかね？」

「二、ニールの町だ！ あそこは温泉の町で、しかも温泉から品質の良い塩が取れるから、旅行ついでに、商いでも」

その言葉は、目の前で陽気に笑みを浮かべて、商人の肩に手を乗せてくる一人の男に向けられていた。商人は肩に乗せられた手の感触に血の気が引いていく。商人は鹿のなめした皮の衣服を纏い、その上から麻のローブを纏っていた。それなのに、ゴツゴツとした手の感触が伝わってくる。握り握る指先に至るまで堅く、まるで自分の身に付けているなめし皮か、それ以上の物に万力で肩を押さえ付けられているように感じられたほどだ。

そんな商人の事など、知りもしない素振りで右の口端を釣り上げている賊の男は一言告げた。

「なあに。いっちょ俺達がお前さんの道中を護衛してあげようかと思ってね」

突飛も無い言葉に、商人は暫く啞然として、賊の男が見せる妙に清々しさを覚えるほどの笑みを眺める事になった。

「俺らは五人でお前さんを護衛する。無事町近くまでついたら報酬を払えば問題は何かないぜ？

勿論、払らわねえと死ぬしかないがな」

「わ、判った！ 護衛を頼むよ！」

山賊という賊徒がこの世界には存在している。彼らは山を根城に山道や山沿いの街道を歩く旅人や商人を襲い、物資や金銭を強奪する。時に、身代金目的に人を攫う事もあり、人も容赦無く殺す。そんな存在として民衆から認知されていた。

怯える商人に手綱を持たせながら、山賊は豪快に商人へ話題を振り、言い放つ。

「いやぁ、お前さんは運がいいぜ？ ここらは大熊が出るって噂が絶えないからな！」

その商人は顔を引き攣らせつつも、一先ず話を合わせて行く。

「よ、良い所だと聞いていたのですが……」

「良い所さ！ だからこそ、獣も集まるってもんだ。そうだろ？ 餌が無いと人も獣も生きていけないからな！」

怖がりつつも、商人はその言葉に納得してしまう。言っている事は至極、真っ当だった事にも驚きつつも、商人はゆったりと馬車を操っていく。

「さっきから煩いが、後ろは家畜か？」

「は、はい。すみません……」

商人の馬車は二台連結の大きな馬車で、前に商人と横に居る男。屋根に一人。そして残りの二人は後ろの馬車の屋根で寝転がっていた。

商人は横目に山賊の頭(かしら)だと思われる男を見やる。山賊の頭と思わしき男は、無精ひげを生やし、髪の毛は濃い栗毛だったがどちらかと言えば茶よりも黒と言った方がしっくり来る色合い。前髪以外に伸びている髪を後ろで束ねている。瞳は茶で、商人の目には如何にも山賊だという風体そのものに見えていた。

「まっ、気にしなさんな!! お前さんの責任じゃねえからよ！」

思えば不思議な山賊だと、商人は心底思っていた。賊と言うと、大抵商人を見つけて護衛が居ないなら、すぐに襲い掛かって金品を奪っていく。酷い連中だと矢で人を殺し終えてから、奪っていく。それが普通で、この世界に住む人々からの印象だった。

聖都教という宗教があるのだが、その宗教は人こそ最も優れた種族だという教えを持っている。だが、その聖都教であったとしても、賊は悪として断罪の対象となっている。それほど、悪行が酷かったのだ。

それなのに、商人が護衛を雇わずに馬車を使っていたのは、この街道に賊徒が出る心配が無いと、今では遠く後ろにある町で知ったからだった。

商人はだからこそニールの町を目指した。商い目的ではなく観光に近い。町の商人や衛兵が近頃、大規模な討伐を行ったので賊の心配は要らない。そう言われたので意気揚々とニールの町へ向かっていたはずだった。

木箱のような馬車を引き摺るように駆ける二頭の馬が鬱蒼(うっそう)と茂る森の隙間を縫う街道にあった。

「頭ぁ！」

後ろから唐突に叫ばれた声に、思わず商人は身を竦ませるが、頭と呼ばれて反応したのは、やはり横で座っていた男だった。

「どうした。ユーリ！」

「右手の山がおかしいぜ！ これは来るぞ！」

そのやり取りを終えると、頭と呼ばれた男は商人に顔を向ける。

「な、何でしょうか？ 何が来るのですか？」

「今に判る」

まるでその言葉が合図だったかのように、右手の森から黒い塊が街道に躍り出る。商人が思わず、顔を引き攣らせる。黒い塊が何なのかを知ったからだった。

そこに佇むは一頭の大きな熊だった。四肢を大地に打ち付けたかのように動かず、唸り声を上げている大熊。

「良し。おい、良く聞け。俺が合図したら構わず鞭を振れ。良いな」

頭が小さく商人に呟いた。その顔は生き生きと笑みで溢れている。その姿に、商人は落ち着きを取り戻した。どうやら、この事態でも動じない山賊の頭に、今では頼もしさを抱いていた。

「わ、判った」

その言葉に、頭は頷くと懐からゆっくりと丸い物体を取り出す。その瞬間、商人は顔を顰(しか)める。糞尿に近いが、どうにも嗅いだ事が無い強烈な刺激臭が漂ってきたからだ。

頭はそれを見るわけでもなく、大熊の目の前に投げた。大熊はそれに反応して、少し後ろに下がるが、臭いを嗅いだのか、突然もがき苦しみだした。

「今だ、走れ！」

頭の言葉に反応して、商人は思い切り、手綱を振るい馬を走らせた。運良く大熊は、森の方でもがき苦しんでいたのが邪魔にはならなかったが、怒り狂ったかのように馬車を追いかけて始める。

「追いかけて来るぞ！」

「飛ばせ、飛ばせ！」

商人は一心不乱に鞭を振り続けた。すると、見る見るうちに、大熊を引き離し、終いには大熊も追うのを止めて森へ帰っていった。

「もう、追って来ないぞ!!」

それを見た後、先ほどユーリと言われた赤毛で妙に他の山賊より小奇麗な身なりの短髪男が前に向けて叫んだ。それを聞いて、頭が

「もう、大丈夫だ。馬を休ませろ」と、商人に告げると、商人も大きなため息を吐き出して、速度を落とした。

「た、助かりました」

「良いつて事よ」

商人の言葉に、頭が白い歯を見せて笑みを浮かべた。商人は馬を休ませるために、少しだけ休憩し、餌をやりたいと頭に言うと、頭も「かまわねえよ」と了承した。

後ろに連結させた馬車には家畜として豚が四頭乗せられており、そこには藁も一緒に保管され

ていた。商人はそれを掴むと馬に持っていき、食べさせる。

「しかし、本当に良い所だな。ここは」

「え、ええ本当に」

いつのまにか、商人はある程度ではあるが、山賊を信用していた。風体は山賊そのもので、言動も品がない事に変わりはないが、何処か気になってしまう。商人は不思議そうに頭を眺めつつも馬に餌をやっていた。

「頭……不味い！」

その時、後ろの馬車に寝転んでいた一人の男がそう叫んだ。その途端、山賊の表情が一変する。その早変わりにも、商人もそそくさと馬車へ乗り込む。

「ダン。何があった」

頭は先ほど声を荒げた男——ダンに言葉を向けた。

「囲まれた。恐らく、豚の臭いに誘われた。数は多いぞ。人間が居るのに、襲う気配がある」

ダンは静かだが、鋭い口調でそう喋っていった。商人には何の事かは判らなかったが、頭や他の山賊が真剣な表情を浮かべていることから、ただ事ではないと察する事は出来た。

ダンと呼ばれた男は、フードをすっぽりを被っているのだから、影の具合から顔をあまり見る事が出来ないが、商人はダンの僅かに見える肌が色白で、鋭い口調から白蛇みたいだと思っていた。だが、そんな事を考えているとそのダンの青い瞳と目が合わさってしまう。慌てて視線を逸らした商人だったが、その視線を森に移すとそこには何かが居た。

「ヒィ!!」

思わず、叫び声を挙げてしまった商人に頭は血相を変えた。

「馬鹿!! 大声を挙げるな」

幾つもの黒い影が馬車を取り込むように現れる。突き出た口の白い牙に黒い体毛。垂れる尻尾に鋭角に尖った二つの耳。

「やっぱり、狼か!!」

馬車を囲んでいたのは十頭以上にも上る狼の群れであった。狼は唸り声を挙げ、様子を伺っていた。

「な、なんで狼が……」

商人は怯えながらもそう呟いた。

大陸全土で布教している一大宗教である聖都教の伝承に商人が怯える原因が記されている。五百年前、人と悪魔の聖戦が起こった。悪魔は人の姿をしていたが、獣に化ける力と悪魔の力を持って人を滅ぼす戦争を仕掛けた。聖戦の中で、最も多く悪魔が化けたとされるのが狼で、その伝承から狼は悪魔の化けた姿として忌み嫌われ、討伐の対象になっていた。

「豚は諦めろよ」

頭は静かに、商人へと告げる。商人も、ゆっくりと頷いて了承した。家畜と自分の命では考えるまでもない。即答だった。

ユーリとダンは即座に馬車の中に入る。すると、狼達は馬車に襲い掛かるが、頭と先頭の馬車に乗っていた山賊が馬車の前に踊り出て、馬を護る。

「ヴォルフ！ 遅れるんじゃねえぞ！」

「師匠に向かってどの口でほざいてる!!」

頭と共に、狼から馬を護るために囷役になったヴォルフという男が大声を挙げた。布で覆い隠しているが、明るい茶毛が首筋や耳元から見える。髭は耳元まで威風堂々と伸びて、茶に濁る瞳。視線は瞼によって鋭く細い。

そして、もう一人が商人の横に来て、短弓を操り、狼の目に矢を当てて一頭仕留める。

「頭、あまり動き過ぎないで下さいよ！ 当てるかもしれません！」

「お前の腕には、期待してるぜ？ ポー！」

「まったく……無茶を押し付けるのが好きですね」

愚痴を零しつつも、矢を射るポーと言われた青年。中性的な顔立ちで声は男とも女とも聞こえるほどの繊細さを持ち、赤茶の髪の毛を後ろで縛っている。

その隙に、ユーリとダンが豚を外に出そうとする。豚も狼を察知して、外に出るのを拒んでいたが、ユーリとダンが即座にブタの頸部にナイフを突き立てて行く。

「ぎゃああ!! 血が顔に！」

「さっさとやれ！」

ユーリが暴れ、ダンが怒鳴り声を挙げながら作業し、ようやく二人して一頭目を外に放り出す事に成功する。

途端に後ろの馬車に襲い掛かっていた狼が豚に群がり始める。続いて二頭目を放り出すと横や、前側にいた狼も後ろへ行ってしまう。

「走れ!!」

頭はそう叫び、怯える商人の変わりに護衛していたポーが手綱を振るった。勢い良く走り出す馬車に、頭とヴォルフが飛び乗る。数頭の狼は追いかけたが、三頭目を落とすともう追ってくる事は無かった。

「た、助かった……」

手綱を握っていたポーが、そう言葉を漏らした。山賊も、商人も心からそっくりそのまま思っていたようで、安堵のため息を漏らし、笑顔を見せ合っていた。

「ここまで来れば、もう大丈夫だろう」

頭は前を向きながら、商人に向かって言い放った。商人も視線を前に向けるとどうやら、森が終わり、平原が広がるように遠くには木々の無い緑の丘が見えてくる。

緊張の糸が切れたかのように、膝まで上半身を折り畳み、顔を手で覆う商人だったが、暫くすると気分を落ち着かせて声を出す。

「助かりました」

頭は笑いながら、商人の背中を叩き、笑いながら言葉を続けた。

「いや、良いて事よ。それに俺らは山賊だぜ？ 金はしっかり貰うからな」

その言葉に、顔を挙げた商人は力無く笑みを浮かべてみせると、馬車の中へ入り、小さな袋を一つ持ち出して、頭の目の前に突き出した。

「ええ、どうぞ。これを」

おもむろに頭はそれを受け取り、中身を拝見すると、銀貨——それも、銀貨の中でも最高級の
レンズ銀貨が五枚入っていた。

「おいおい。色つけすぎじゃねえか？」

思わず、頭は驚いてそんな言葉を商人に投げ掛けてしまう。頭が驚いたのはレンズ銀貨一枚で
パンを二百キログラムも買えるほどの価値がある事を知っているからだった。

「何、このくらいは商いですぐに取り戻せます。ですが、あなた方に救っていただいたお命代と
しては安いと思えるほどです」

驚く頭を、商人は可笑しいと思いつつ、そう言葉を頭と山賊に向けて喋った。確かに、商品と
なる豚は減ってしまったが、商人は生きているので、また商売も出来る。それに恐らく、まだ金
は持っているので、ニールの町で塩や他の品も買えるはずだ。

「そうか。なら遠慮なく貰っていくぜ」

頭はそれを理解して、素直に受け取った。

「あ、あの。有難うございました。ですが、何故このような事を……これだけ善意で行動出来る
なら、仕事に就く事も」

商人が最もな言葉を並べ立てるので、頭は豪快にそれを笑い飛ばした。後ろの山賊も笑みを浮
かべている。その姿に、可笑しいと思えるだけの理由がきちんと持てている。そう勝手に解釈し
た商人に向けて頭は喋り出す。

「俺らは山賊。強請り集りに人殺しまで、何でもありの連中だ」

その言葉は確かに、世界の認識で何一つ間違っただけではなかった。商人も先ほどまでは同じ印象
で接していた事に変わりはない。

「だがよ。悪党には悪党の矜持ってものがあると思わないか？」

紡ぎ出されたその言葉に、口を開いて「は、はぁ？」と空返事をしてしまった商人だったが、
頭は構わず笑い声を挙げた。

「と、とにかく。有難うございました。ご縁があれば、またよろしくお願ひしたいものです」

本心半分、世辞半分。それでも、商人もこの時だけは良い笑顔を浮かべて見せた。それを見て
満足そうながらも首を横に振る頭。

「無い事を祈るぜ。今度は、俺達みたいな悪党じゃないかもしれない」

「はい。気をつけます」

尤もだ。と思い、商人もそう受け答えると馬車を動かそうと手綱を握る。山賊達は皆、馬車か
ら降りていた。

「あっ！ 一つ。お名前は？」

言い忘れてたというよりは、言う必要すらなかったのだが、商人はどうしてかそう呼び止めて
、自分の名前を名乗ってしまった。

「私は、ザックスです！」

意外そうな顔をしつつも、山賊の頭ははっきりとした声でザックスに自分の名前を伝える。

「ん？ 俺か、俺の名前はヴァルト。ただのヴァルトだ」

ニールの町は温泉が湧き出る町として、温泉を目的に来る人の往来がそれなりにある。

温泉は塩分を多く含み非常にしょっぱく、その温泉から塩を生産する事が出来るので山塩として売り出し密かな特産となっており、酔狂ながらその山塩と呼ばれる生産量が少ない珍しい塩があると聞いて訪れる商人も混じっている。

丘陵地に突然、森が消える土地にニールの町は佇み、その横にはなだらかな川が流れている。その川と寄り添うように、街道が町と町を繋いでいた。

その日、ニールの町にはある噂が広まっていた。他の町から来たという商人の話なのだが、その話の半分は信用して、半分は誰からも信用されなかった。前者は、狼の群れに襲われた事で、これを聞いた商人は早々に領主へ報告し、狼用の罟と狩人の組合(ギルド)に駆除の依頼を要請している。

後者は、山賊が商人を護ってくれたという事だ。この話を聞いた人々は皆、「面白い話だ」。と言って笑っていくか、怪訝な顔を浮かべるだけだったが、それも仕方が無いと、話した本人は思っている。

ザックスは喧騒に紛れるかのように、温泉の湯に浸かり——熱い。と感じつつ、すぐに身体の芯まで暖かくなっていく感覚に恍惚とした表情を浮かべて、目を閉じる。

山賊という賊徒の認識は本当に、人として底辺に位置し誰もが山賊の噂話を信じない。

ザックスは思う。きっと笑った人も、怪訝な顔をした人も、あれは当事者で無かった場合の自分自身の姿で顔だと。

だから、ザックスは特に信じてもらおうとはしていなかった。けれども、話したくて仕方が無かった。そう思えるほど奇妙で印象深い出会いだったと振り返る。

思わず、その事をニールの町を治める領主との面会で話し込んでしまったが、領主は意外にも面白い話だと笑い飛ばし、会って見たいと言った事を思い出して顔を綻ばせた。

酔狂な人は何処にでも居るものだ。

「良い湯だ……疲れが、取れる」

気の抜けた男の声が湯気と共に、空へ消えていった。

山賊には住まう家が無い。正確に言えば、定住する場所を持たない。そのため、山の中に、いくつものねぐらを持ち、そういったねぐらを転々としながら生活していく。

「まさか、レンス銀貨を五枚も寄こすとは流石に驚いたぜ？」

ヴァルトの声が、そんなねぐらの一つから聞こえてくる。

ヴァルトの後ろには小さい穴が口を開けている。洞窟のようだったが、ヴァルトを含めた山賊一同はその洞窟の前で焚き火をしていた。その洞窟の左右には大きな岩が寝転がっており、どこか釜戸の中に居るように思わせる。

「あの商人。どこぞの豪商だったのか」

ヴォルフは、そんな声に意外そうな表情を浮かべて、焚き火の上に乗せられている鍋をかき回している。鍋の外回りは真っ黒に染められている事から、相当に使い込まれた一品のようだった。中身は、薄い茶に染まり、野菜やら何かの肉が適当な大きさに切られ、煮込まれていた。

「かもしれないな」

ヴァルトにとって、商人が金持ちかそうでないかは関係ないようであった。レンス銀貨という銀貨の中で一番価値がある物を五枚くれた。それだけで後の事を考える必要は無いと、思っているようだった。

「お前らしい。とにかく、暫くは食うに困らないな」

いい加減な返答に、ヴォルフは苦笑いを浮かべながら、木の入れ物にスープを流しこむ。

ヴォルフにとって、ヴァルトは昔から何も変わっていなかった。幼い頃、自分に縋り付いて来た時から虚勢と凶体だけは大きくなったが、まだまだ子供のような男だと思っている。

他の四人と一頭も鍋から同じようにスープを盛り付けると、途端に鍋は空になっていく。それを特に気にする風でもなく、一同は食べ始めた。

日はまだ、天辺にあるので、昼だった。

一頭は妙に手際が良いが、手に合うように作られた専用のスプーンを使っていた。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

「どうした。ポー」

ヴァルトにポーと呼ばれた青年が、抗議の声を挙げる。その表情は真剣だ。

「ここに住んで半月になりますけど、もう毒が無くなりそうで、罌も新しいのに買い換えるべきですよ」

ポーは狼に襲われた事から、もっと毒と罌をねぐらの周りに仕掛けるべきだと意見する。狼は馬鹿ではないので、毒を嗅ぎ分ける事も出来れば、鉄の臭いも嗅ぎ分ける事が出来る。それを知って、ポーは判りやすいように毒肉や罌を仕掛けて、ねぐらには近づけさせないようにしていた。獣も何度も経験していくと学び、次第にねぐらには近づかなくなるという具合だった。

「大丈夫だって、ポー。俺らに恐れをなして狼なんて来ないよ」

「ユーリ！ 軽口を叩かないでくれよ」

そんな、ポーの意見に、ユーリがスープを早々に平らげて、適当な言葉を喋り散らし、ポーの顰蹙(ひんしゆく)を買った。だが、ユーリは気にしていないし、他の三人も特に、怒ったりはしない。これが日常なのだ。

「落ち着けてポー。どうだ？ ダン、ここら辺の狼が襲ってくる可能性。正直言えば、餓えた狼ってえのも珍しいが」

ヴァルトが食べながらも会話を拾ったのは、確かに狼が襲ってきたという事実に基づいての事だった。ヴァルト自身、何度と無く狼と戦ってきたが、人が多く乗る馬車を襲うのは珍しいと感じたからだった。

話題を振られたダンには、フードを被ったまま食事をしていたが、具を飲み込むとヴァルトの方を向いて静かに口を開ける。

「恐らく無い。商人が領主に伝えるはずだ」

低いながらも籠らず綺麗に聞こえてくる声に、焚き火に燃やされる木々の騒音にかき消される事は無かった。

「だ、そうだ。取り合えず俺らの食糧が最優先！」

「わ、判りました。ダンさんがいうなら従いますよ」

ダンの言葉に、ヴァルトとポーは素直に従ったが、ポーの一言にヴァルトは噛み付いた。

「おい。頭は俺だぞ」

「ヴォルフの方がよっぽど頭っぽいけどね」

「ユーリ!!」

ユーリがぼつりとそんな言葉を吐き出すとヴァルトは大声を挙げる。けれどもユーリは悪びれる様子も無く、肩を竦めた後に負けじと大声を挙げた。

「何でも無いですよ！」

その姿に、ヴァルトはため息を一つ漏らすと、横に座っていた一頭の大熊を見据える。視線の先には、黒い体毛に覆われた立派な熊が、足をだらしなく延ばしながら岩を背もたれに座っていた。

「ったく。ディック、大丈夫か」

ヴァルトはその大熊にディックと言って呼びかける。すると、ディックと言われた大熊がヴァルトの方へ顔を向ける。

「うん。大丈夫。もう慣れたよ」

それは、どこからどう見ても熊だったが人の言葉を喋ったのであった。

どうやって発音しているのかは判らないが、とにかく口は器用に動いているので、その口から言葉は確かに漏れている。

ディックの言葉に、笑みを零すヴァルトからはディックを労わっている事が伺える。

「そうか。嫌だったら構わず言えよ。また適当に投げる奴を作るからよ」

「うん」

ディックは嬉しそうに返事をした。その声は人の子供そのもので、男の子だった。

ディックは世にも珍しい獣人(じゅうじん)という種族で、大熊の子供だった。

獣人とは、人に化け、人の言葉を理解し話せる獣の総称で、かつては人と同じように集落を持って森や山などに住まい、人とは違う社会を小さくも作っていたと言う。

「ディックには相変わらず、優しいね」

ユーリがそんな事を呟いた。

「十一年か」

その呟きにダンがポツリと言うと、隣に座っていたポーが感慨深そうにディックを眺めて口を開けた。

「もう、そんなになるんですか」

不機嫌そうな表情のユーリと何処か嬉しそうな熊のディックが対照的だった。

「取り合えず、町に繰り出すか。ヴァルト、振り分けはどうするんだ」

その光景にヴォルフは楽しそうに笑顔を浮かべていたが、今後について話し合う事にした。

「ダンとディックは居残り。ユーリとポーは食糧類。銀貨は二枚だ」

ヴァルトは、逡巡せずに指示を飛ばす。これに、素直に一同が従うのだから、ヴァルトはやはり山賊の中では優秀なのだろう。

「はい。換金所はありませんけど、大丈夫ですかね？」

ポーがそう告げると、ヴァルトは悪そうな笑みを浮かべてユーリを一瞥する。

「そこはユーリの口で頼むぜ」

その言葉に、仰々しく立ち上がり優雅な一礼を見せ付けるユーリは、自信に溢れた言葉を口から漏らす。

「任せなさい。この話術士ユーリ見事、不審がられずに銀貨を使い果たしてみせよう」

その言葉と姿勢に違和感が無い。なめし皮の衣服ではなく、刺繍を加えた絹の服を着込めば、何処かの貴族に見えそうでもあった。だが、その姿を当のヴァルトはあまり関心が無いようで「使い切るなよ。備蓄としておくんだからな」というだけだった。

これには、少々肩透かしを食らったユーリだったが、ふて腐れたように口を尖らせ「はいはい」と返事をした。

「さて、ヴォルフは俺と道具の買出し」

「矢に刀剣類か」

ヴォルフは小さく「ふむ」と言いながら、今不足している物を考えているようだった。矢はポーが一番消費する。本当ならば、適当な石と木で作れば良いが、ポーだけは弓の扱いが一番巧く、戦力として貴重でどうにか良質な矢を使わせたいという思いだった。

「流石に買い替えないとな。いざって時になまくらだと殺しきれなくなっちゃう」

刀剣に関しては皆が使い、使い込むので手入れをしても、刃が早く痩せてしまい、使えなくなってしまうのだ。

山賊は言われたとおりに行動するため、立ち上がる。ダンとディックは居残りだったが、立ち上がる所からして何やらする事でもあるようだ。

一度、全員の顔を見回した後、ヴァルトは最後の指示を飛ばす。

「取り合えず、一番大きな酒屋で合流だな！」

「飲んで良いの!?!」

その言葉に、思わずユーリの機嫌が直り、そう聞き返してくる。その表情に苦笑いを浮かべるもヴァルトは大きく頷いた。

「たまには良いさ」

「やったぜ、ヴァルトの頭は大好きだ！」

「だから、きちんと抜かりなく行動な」

「応!!」

そう言って、町へ向かうユーリ達の背中を見つめながら、ダンとディックに声をかける。彼らは居残りなので、酒屋には行けない。ディックはそもそも熊なので無理だ。

「すまん、ダン。ディック」

それでも、ヴァルトはやさしく声をかけた。

「待ってる。でも肉食べたい」

表情の起伏がまったく見られないディックだが、声が少々寂しそうではあった。だが、ヴァルトはその言葉に、おいおいと言った感じに表情を崩す。

「ディック。お前は狩りを学べ。その立派な身体は何の為にある」

「罨なら使えるよ」

ディックは、熊でありながら獣の狩り方を知らない。いや、知っているが、その狩りは人のそれとまったく同じだった。

「無駄だ」

ダンが小さく零す。ヴァルトが言った事はもう何度めかの言葉だったのだろう。

「……俺もダンも人様の狩りは教えられたが、野生の狩りは専門外だからな」

そう言って、顔を顰(しか)めるも表情を改めて、町へと向かう。

「それじゃ、言って来るぜ」

ニールの町には、三つの酒屋があって人々に旨い酒と、酔っていれば味などどうでも良くなる料理を提供しているが、酒屋の規模からして「バッカスの欠伸」というなんとも変な名前の店が酒屋として一番大きく、酒屋を表す樽の看板にはその名が律儀に刻まれていた。

どうやら、主人の名前がバッカスで仕事中にも欠伸を良くするので、途中から看板に刻んだという話を、店内で騒ぐ野郎が叫んでいたのを、ヴァルトは小耳に挟んでいた。どうでも良かったが、少なくとも目の前で馬鹿騒ぎをしているユーリよりは有益な話だと思っていた。

「うめえ、やっぱ酒はビールに限るぜ!!」

「出会った当初は葡萄酒以外は飲まないなんて言ってた餓鬼が」

ヴァルトが面倒くさそうにそう呟く。

以前は酒に弱い癖に、酒が好きなユーリを諷める事もしていたヴァルトだったが、注意すると余計に煩くなり、他の客に迷惑が掛かる上に、ヴァルト達の顔すら覚えられてしまう危険があったので、今はほどほどにしている。

「慣れって言うものは、こうも簡単に人を変えるとはね。怖いものだ」

その様子に、ヴォルフも苦笑いを浮かべるしか出来ない。

彼も、ビールを木のコップで呷っているが、ユーリとは煩さと態度が雲泥の差であった。

ポーに至っては、完全に居ないものと。いや、他人の振りをしているようにも見えるほど気にすらしていない。

「ヴァルトさん。聞きました？」

そんなポーがヴァルトに話題を振る。

突然の話題だったが、ヴァルトからすれば、ユーリの姿を見ているより時間の有効活用になるだろうと思って顔を寄せる。

「なんだポー？ ダンがそろそろ性欲を持って余して襲い掛かってきそうな目でも向けていたのか？」

「なんですか、それ。そもそも『聞きましたか？』って言っているのに……とにかく、このニールの町に温泉があるでしょ？」

ヴァルトの軽口に露骨なほど顔を歪めながらも話を続けていくポーであったが、ヴァルトは温泉と聞くと大声を挙げた。

「あるな。今日は入りに行くか！」

「流石お頭、良い事言うぜ!!」

食い付くユーリに、口元を少し痙攣させるとポーは怒り付ける。

「ヴァルトさん！ ユーリ！」

その声に、ユーリはともかくとして、ヴァルトは顔を引き締めた。ヴォルフはもう、ユーリの回収に動き、羽交い絞めにし始める。

「真剣な話か」

「どうやら、この町の領主様も来るみたいですよ。教会へ行ってからのようですけど」

その話を聞くとヴァルトは即断する。

「そうか。なら、早々に出るぞ」

「俺達の聞いた噂と違ったな」

その言葉に、ユーリを拘束しながらもヴォルフが声を漏らした。ヴァルトも同意するように頷くと席を立つ。

「ヴォルフ爺放してくれ。俺は、俺はまだ飲めるんだ!!」

騒ぐユーリを諭すようにヴォルフは耳元で言葉を並べる。

「ユーリ。顔が割れていなくとも、噂は既に広がっている。領主が町の奥にある城から出向けば、噂が耳に入るかもしれない」

狼に襲われた商人を山賊が助けた。そんな噂が流れているが問題なのは信じる信じないではない。

「そういう事だ。ここの領主様がいくら情に篤いといっても賊を野放しにするかは判らないぞ。顔を覚えられるのも不味いしな」

討伐隊を編成されては困るという話一点だけが問題だった。

「判ったよ」

ユーリも酔ってはいたが、事情は飲み込めたようだった。大人しくなったのでヴォルフも拘束を解く。そして、四人は早々に店を後にする。

「それにしても、温泉に領主が来るってのもな」

ヴァルトは急ぎ足で移動しながらも意外そうに漏らす。

「有名らしいですよ。ニールの温泉って、塩っぽくて身体が温まりやすく病に効くとか」

「なんか、俺もそんな話聞いたことあるような無いような」

ボーの言葉に、顔の赤いユーリも言葉を続けた。飲み始めて間もなかったためか、足取りは案外としっかりしている。それでも酒臭いのに変わりはない。

二人の話に、対して興味も持たなかったため、適当に

「へえ。まあ、俺らには関係ないさ」と相槌を打った。

ヴァルト達山賊は、馬車の停留所を目指すために、町を歩く。気の抜けたような空気が通りを吹き抜け、土を巻き上げ飛ばす。

木造の家々が立ち並び、石造りの店が顔を覗かせ、硝子窓の無い締め切られた雨戸から蝋燭の光と人々の喧騒が漏れ聞こえる。その中を、ヴァルト達と同じように酒に酔って歩く者もいれば、足早にどこかを目指す者が通りを歩いていく。

「ヴァルトさん？」

その時、夕暮れに染まる町中で唐突にヴァルトは声をかけられる。ヴァルト達は即座に振り返って身構えると、そこには商人のザックスが固まりながら右腕を挙げていた。どうやら、四人の行動に驚いたようだった。

「よう。お前さんか。随分な事をしてくれるじゃねえか」

ヴァルトは悪い顔をしながら、ザックスの横まで移動すると肩に腕を回す。

「ちょっと裏まで行こうかね」

「え、ちょっと待ってください！」

強引に手ごろな路地裏に連れて行かれると四人に囲まれ、怯え始めるザックス。その姿に真剣な表情を浮かべるヴァルトは声をかける。

「お前さんだろう？ 俺らの事を話したのは。いけないねえ、俺達は賊よ？ いつ領主様が俺達を殺しに来るかわかったもんじゃないぞ」

そう低い唸り声を上げながら、ザックスを睨みつける。ザックスからすれば、声をかけた事を後悔していてもおかしくはない。

「す、すみません……け、けれども。釈明の機会を！」

思えばヴァルト達は口止めを強制していないので、喋る事に問題は無いはずとザックスは思っていたが、相手はやはり山賊で自分達の常識が通用しないと思ひ知る。

本当のところは、ヴァルト達も領主が町にこんなにも早く降りて来なければ特に気にもしなかったはずだ。

そんな思いを巡らせていたヴァルトではあったが、ザックスの思わぬ申し入れに話だけは聞く気になったのか

「何だ」と言った。

「私は、領主様に直接お会いしました。なので、判ります。あの方は、私の話を信じてくださいました。領主様は本気で私のような商人を助けてもらえるならば正式に雇っても良いと……!!」

口早に述べられた言葉に、驚く四人だったがヴァルトは小さくため息を漏らす。

「お前さんが良い奴だってえ事は判るさ。だがよ。俺らは悪党よ。そう簡単に信用できる話じゃねえって事だ」

「すみません……」

ザックスはそう言って、謝るだけだった。ヴァルトから見れば一回り年上のザックスであったが、今だけは気弱な少年のように怯えている事が良く判る。それでも、情けをかけるつもりはない。かといって別段殺して、余計討伐されるような危険を負う必要もないと判っている。

「なあ、お前さんの知っている限りの情報を教えてくれよ。馬車の停留所までで良い」

その言葉に、顔を挙げてザックスは大きく頷いた。

「し、信用は回復させて貰える様に頑張りますよ。まずは領主様からで良いですか？」

大きく喉を鳴らした後に、ザックスは先ほどのように怯える事は無く、緊張感を漂わせながらもそう喋った。その姿に、ヴァルトは口端を釣り上げて笑って見せた。

「商人だねえ、お前さんも。俺が金持ちになったら鼻屑にしてやるぜ？」

「商人は損得に敏感ではありますが、情にも篤くなければなりません。人脈は財産ですから」

「言うぜ。山賊の人脈なんてどうすんだ？」

その言葉に、さらに笑みを深くさせる。既に、他の三人は囲みを解き、ユーリは少し気持ち悪そうに路地の奥でしゃがみ込み、ポーが面倒そうながらも背中を擦っている。

ヴァルフはというと、面白そうに商人と山賊の会話を聞いている。さて、商人はどんな言葉を言い出すかな。といった様に期待に胸膨らませているようだった。

その周囲の変化を気にする様子もなく、ザックスは負けじと笑みを浮かべながら

「例えるなら、別の商人を襲わせ、私に独占させる。そしてその利益を流す。どうでしょうかね？」

と言い放った。これには、ヴァルトとヴォルフも傑作とばかりに笑い声を挙げた。

「……悪いねえ。お前さんも」

不敵に笑い合う商人と山賊は何とも奇妙な絵になっていた。

「商人は善悪で商売していません。結局は損得ですよ」

日は陰りニールの町に闇が舞い降りる。夜の出入りを監視する事と犯罪防止による行為で、城門にかがり火を立て、その横に衛兵が立っている。

他の町により近ければ夜でも出入りはあり、衛兵も忙しかったかもしれないが、ここはニールの町で夜の警備と言えれば眠気との戦いだった。

今日もそうなるはずだったが、ニールの町内から疾走する四頭の馬に引かれた馬車が城門から外に飛び出していった。次第に、町中が喧騒に包まれ、衛兵が口頭で事態を説明し、やがて領主城にまで波及していく。

教会に向かった領主の娘二人が誘拐され、領主様の容体が急変して指揮を取れない。代わりに指揮を執り始めたのが教会を管理するカスパル司教で、騎士団長で二十年間、領主に仕えてきたダニエルも已む無く、その指示に従うという。

町は俄かに活気とは違った喧騒に溢れていく。

森林の中を通る街道は、月明りだけではとても視界を保つ事は出来ないほどに暗い印象を持たせ、その街道を通る人々を恐怖に駆り立てていく。森林とは女神様のように、慈悲深く恵みを与えてくれるが、悪魔のように残酷な末路を目の前に突き立てる。ロバ車の手綱を握りながらヴォルフは、そんな感傷にも似た事を考えていた。

ロバ車を行きとは違う場所に隠すと、四人は分担して物資を運ぶ。ロバは荷車に乗せて、その周囲には獣が嫌う特製の薬を適当に配置し、毒肉を置く。

「ダン！ 俺だ、ユーリ様だ！」

真っ暗闇の中でユーリの大声が響き渡る。ダンはというと、とっくに気付いていたようで、特に反応はしなかった。

「だから、お前はなんでそんなに尊大なのよ」

代わりにヴァルトが面倒くさそうに呟き、物資を両肩に乗せて歩いてくる。今日のねぐらは朝と同じ場所だったが物資は分割して別の所に置くようだった。

「よし、取り合えずディック。食糧は洞窟の倉庫へ運んでくれ。終わったら飯にしよう」

「うん」

ディックは元気良く返事をし、軽々と持ち上げて分割した物資を運んでいく。それを見ながらもヴァルトは指示を飛ばした。

「ボーとユーリは周囲散策。俺らが食い終わるまできちんと見張れよ」

「はい」

「判ってるよ」

二人は素直に返事をして周囲の闇に溶けていく。どうやら、分担して食事を取るようにして、不測の事態に備えているようだった。

「ダン」

「出来ている」

ダンがヴァルトの問い掛けに即答する。すると、ヴァルトも、よしと頷いた。ダンは町に行かない間、この近くを散策し、獣道の把握や罠の配置などを一手に引き受けていた。

「いつもすまん。たまには町に行っても良いんだぞ？」

「気にするな」

その言葉に、ダンは素っ気無くそう答えるもヴァルトは特に気にせず

「おう」とだけ言って笑った。

どうやら、ダンはあまり喋らない性格のようで、ヴァルトとも長い付き合いに見えた。

一先ず、焚き火を三人で囲みながら腰を落ち着けると、ヴァルトはまずダンに短剣と投げナイフを渡す。続いてヴォルフには短刀を渡した。残りは矢であったので、判る場所に落ち着けた。

「噂はそれなりだったな」

ヴァルトがまず口を開いた。ダンは耳を貸しつつも枝を火にくべる。ヴォルフもそれに頷いた

。

ザックスに出会って話を聞いた事が収穫だったようだ。

続いてヴォルフは口を開ける。

「俺達への悪い噂は無い。まだ半月というのもあるが、上々だろう」

その言葉に、今度はヴァルトが頷いたが

「気になる物はあったがな」と付け足す。

「そうだな……良い町だけに、領主が少々保守的というか。もう少し、活発に商いを推奨して温泉や山塩を売れば今以上に発展しそうではあるらしいな」

ザックスが不機嫌にそう言っていた。ここの領主は現状維持に重きを置きすぎている。ただでさえ他の町から遠いのに、このままではいずれ廃れ忘れ去られてしまうとさえ言っていたのをヴァルトは思い出していた。

「商人にしか判らないもんがやっぱあるんだねえ」

大半はザックスの思った商人としての話でしかなく、ヴァルトやヴォルフからすれば、ここは良い町だと素直に思っていた。

「ダン。ここらは獣が多そうか？」

一先ず、ヴァルトはその話を後にして、ダンに報告を促す。ダンに求めていたのは周囲の調査で、元々こうした探索や調査を器用にこなして行くので、半ばダンが専門家のようになっている。

ディックを抜かした山賊達は、こぞって絶対元暗殺者だと決め付けているし、ダンも特に否定はしてなかった。

「多い。町から離れた街道は危険。遭遇する」

ダンの低いながらも通る声がゆっくりと吐き出された。腕組みをしながら、ヴァルトは唸った

。

「そうだな……思い切り、獣道切ってるからなこの街道」

山賊は山を縄張りにするので、獣道や獣の習性を知らず知らずに覚えていく。または覚えさせられる。そのため、ヴァルト達はニールの町に続く街道で、特に今居る森林には、獣道が多いこ

とを確認していた。

「猪と鹿。大型多い」

「だからか」

ダンの言葉に、ヴァルトは一人納得していた。その姿を横目にヴォルフは話を続ける。

「ならば、もう少し滞在しても良さそうだな」

どうやら、ヴォルフは元々そう考えていたのかもしれない。それほど、用意されている言葉に感じられていたヴァルトであったが、思い当たる節を知っているようにも見える。

「ここほど環境が良いのも珍しい。森林が無駄に伐採されていないし、川もあれば平地で農耕もある程度出来る。放牧に向いているが、手付かずの場所もな」

ヴォルフの言った事は、的を射ている事を二人は承知している。ダンとはとにかく、周辺を歩き回った身からして良く判っている様子だった。

ニールの町では伝統を重んじ、代々使われていた土地を何度も使用している。その関係からか、町の人口もずっと横ばいだという事をザックスは別の商人から聞いたと言っていた事をヴォルフは覚えていた。

大規模な開拓が進めば、かなり発展するも、それをあえてしない事で緩やかな発展をしていく町。徐々に農耕地を広げ、観光客と商人を呼び込む。その統治政策からヴォルフは領主を頭の堅い善人では無く、流れを読めない善人。と勝手に想像していた。

そんな想像を他所に話は進んでいく。

「獣が多いから、半端な賊はここらを縄張りに出来ないってわけか。これで、他の町から遠いのも利点だな」

ヴァルトは山賊の目線から、この地に滞在する利点を述べていった。この話には二人も同意するようで口を挟まず、ヴォルフが

「期間は？」というだけだった。

「そうだな……もう一月かな。いっそ、領主に存在認めてもらえれば楽なんだけど。必要悪で」

ヴァルトはザックスの言っていた事を思い出してそう口走る。その言葉に、ダンは訝しがるように顔を少し挙げて、ヴォルフは苦笑いを浮かべた。確かに、あの話は魅力的だったと思っただけに、そんな生易しい領主では満足に町を管理できないだろうとも考えていた。

「そこまで寛容なら今頃、誰かに領主の座を取って代わられているな」

「違いない」

ヴァルトも冗談で言ったのでその言葉に、笑い声を挙げて答えた。

「教会は？」とダンが言った。

「そうだった。それも珍しい事になっている」

訝しい顔に表情を変えながらヴァルトが答えた。

「ニールの町には司教が居る。ここら一帯が教区らしい」

ヴォルフの言葉に、ダンが顎に右手を添える。

「悩むのは尤もだ。だが、司教が居てもそれほど、教会の勢いが強いってえわけでもない」

「妙なところだな」

「領主がしっかり手綱を握っているのか。聖都教らしからぬ者が司教なのか」とヴォルフは言

った。

「ザックスから言わせれば、何処も同じだそうだがな。やっぱり仲はよろしくないようで」

ヴァルトは苦笑いを顔に貼り付ける。宗教を信じない山賊からすれば、教会も同業者に近いものだと思っていた。

「しかし、本当宗教は金になりそうだよな」とヴァルトは心底感心したように腕を組んだ。

「俺達も興すか？ ディック辺りを神にして」

ダンが自嘲気味にそう言った。

「よせよ。どうせ、邪教扱いで皆殺しの対象になるだけだ」

「ともかく、注意する必要があるな。ディックの事がある」

ヴォルフが話を戻し、ヴァルトとダンは頷いた。

「何かあれば逃げるだけ。いつものことだ」

「ヴァルト。緊急。だけど隠れてる」

その言葉に三人は火を消しながら腰を浮かし、身を屈ませた。途端に世界は闇に支配される。三人はまだ目が慣れていないが、話を進めていく。ヴァルトはポーのために矢を握った。

「ディック、どっちだ」

ヴァルトは小さく呟いた。するとディックが動く。その気配に三人はディックの方向を察知して身体を向けると、やはりそちらから声が聞こえてくる。

「ポーの方。町側の街道沿い」

「行くぞ」

おぼろげながら姿も見え始める辺り、夜目に慣れている。颯爽とまでは行かないが、それでも速い速度で闇夜を駆け抜ける。

暫くするとポーの後ろ姿が確認できた。遠目に街道が見える。その視線の先にはランプであろう明りが揺らめいて、馬車が止まっていた。

「ポー」

ヴァルトが小さく、囁きながら視線を向けると、その先の街道から声が響いてくる。

「馬車が襲われています」

ポーの言った通り、馬車が何者かに襲われているのが窺い知れた。

「——同業者か？」

咄嗟に、ヴァルトがそう呟く。この街道にはヴァルト以外に山賊は居なかったが、絶対ではないし、今日ここに来た賊かもしれない。同業者といっても盗賊という事も考えられる。

だが、ヴォルフとダンはその言葉を否定した。

「いや、あの身のこなしは違うな」

「鍛錬を受けた者」

ほぼ同時に囁かれた言葉にヴァルトは不敵に笑ってみせる。

「流石、ヴォルフにダン。頼りになるぜ」

「どうですか。頭」

ポーが、静かに指示を待つ。どうやら、馬車側も武装しており、数も負けてはいない。遠目だがヴァルトは目算で、大体合計で十五人は居るだろうと予測した。そして、馬車はどうにも金の臭いがする出で立ちだった。

「高級馬車か」

「遅れた……」

ヴァルトの呟きに被せるように、ユーリが後ろから声を出して寄って来る。その姿を確認する事も無く、ヴァルトは言葉を続ける。

「ユーリ。まだ出番は終わってないぜ。見ろ。高い馬車か？」

そう言って、ユーリに馬車を見せる。ユーリはその馬車を見て、即座に笑みを浮かべてみせるが、戦いが起こっている事に少々顔が引き攣っていた。

「……高いね。乗ってる奴は相当、金持ってるぜ。箱型の四頭馬車は、貴族様御用達。それか要

人を乗せているもんだぜ？ それに、連結馬車だったのかもしれない」

その言葉を聞いてヴァルトは逡巡するが

「厄介ごとになるかもしれないが——」と吐き出した。

「膨大な臨時収入が転がり込むかも」

ユーリはヴァルトの横顔を眺める。

「頭。行きますか」とポーが確認を取る。

ダンとヴォルフは既に準備が出来ているようだった。ディックは言わずもがな。戦う道具を必要としない。

「……行くか。ヴォルフはユーリとポーを頼む。逆に回りこめ。ディックとダンは俺と囷になって視線を誘導させる」

「応」

その声で、即座に散開する一同。ヴォルフを先頭に馬車の馬側から、反対の林で斜面になっている川側に移動していく。

残った三人は前に出る。かなり、馬車と戦闘が見えてきたが相手は今だ気付いていない。さらに近寄ると遂には、ヴァルト達にも影が出来始める。

木々に身を寄せながらもヴァルトは真剣な面持ちで、ダンに声をかけた。ヴォルフのほうは準備が整っている。確認はしていないが、そうだという思いをヴァルト達三人は持っていた。

「口火はダン。任せるぜ」

ダンは買ったばかりでまだ血に濡れた事もない真新しい投げナイフを取り出すと、臆する事無く投擲した。すると剣を抜いて、馬車の護衛を斬り殺していた襲撃者の背中に吸い込まれた。

本当ならば、出来る限り暗殺したかったはずだが、運悪く襲撃者の一人が投げナイフが投擲された所を見ていたようで

「伏兵だ！」等と叫んでしまい、注意が周囲にも向けられてしまう事態に陥った。

ヴァルトは思わず舌打ちをしたが、もう止まる事はせずに躍り出て大声で叫ぶ。

「ここは、俺達の縄張りだぜ!! 好き勝手暴れないでくれるかい！」

途端、近くに居た襲撃者に接近して短剣を突き刺す。だが、短剣を差し込んだその感触に、ヴァルトは眉を顰(ひそ)める。決して、人を殺したからではない。

「鎖帷子か！」

そう叫んだ。

襲撃者は鎖帷子を纏っていたようで、勢い良く突き刺したのが功を奏し、貫通して殺せたが肝を冷やす。もし、これが突きではなく斬りつけだったらヴァルトは反撃にあって、下手をしたら死んでいたかもしれない。

命拾いしたヴァルトがふと視線を前を向ければ、ダンが二人を相手取り互角の斬りあい演じ、その横からディックが突進してその二人へ襲い掛かるという凄惨な光景が広がっていた。

熊の出現に襲撃者も怯んだのか後ずさりを始めると

「……退くぞ!!」と襲撃者を統率していた者が叫んだようで、襲撃は止み退いて行った。

ヴァルトの元に、ダンとディックが寄って来るも怪我は互いにしていない確認だけすると馬車

を取り囲む。

ヴォルフの方も無事のようにヴァルトが視線を馬に向けるとヴォルフ達が、馬車を逃がさないようにしているのを見つける事が出来た。

生き残りは護衛というよりは賊に見える風体に違和感を覚える男達が五人。今だに殺気立っているが、ヴァルトは声をかける。

「やれやれ。おい——大丈夫かい」

「てめえら。何者だ」と男の一人が言った。

護衛の男達は警戒心を解かない。今にも襲い掛かってくる空気を纏っていた。

「高級そうな馬車に似合わねえな？」とヴァルトは不敵に笑みを作り出し、構える。

その瞬間、生き残っていた五人が馬車を動かそうし、ヴァルトに一人が斬りかかって来た。

「同業者だ！ 丁重に扱えよ!!」

ヴァルトはそう叫び、再び殺し合いの熱気が馬車を包み込む。

切り結ぶヴァルトと同業者だったが、ダンに背中から刺されて地に伏せた。

「助かるぜ！」

ヴォルフ達は、馬を確保していたが、護衛の男達が襲ってきた事で馬をあえて解放して足を無くし、逃走手段を限定させる。

その山賊達に、護衛の四人が一斉に襲い掛かるも、ヴォルフとポーは機敏に動く。息の合った動きで、ヴォルフが前に出てポーが後ろから弓を構えた。

「ポー！」

「はい！」

ポーが素早く一人を射掛け射殺すると、ヴォルフが斬り掛かってくる男の喉元を掻き切った。

「こっち来るな!!」

ユーリも襲い掛かってきた男と切り結ぶが蹴り付けて転ばせる。

その瞬間、男とユーリの視線がぶつかる。男の顔は恐怖や焦りに引き攣り、とても醜い顔に豹変していたが、対するユーリも必死の形相で目は見開き、肩で息をしている。

ユーリはその顔と怯える目に妙な親近感を覚えてしまう。途端に男は隙ありとばかりに逃げ出したが、ユーリは追いかけていなかった。

足が打ち付けられた杭のようにまっすぐ大地に刺さっているかのように、動かなかった。

「ユーリ!!」とポーは叫び矢を放った。

ポーの矢に射抜かれて斜面を転がり落ちていく男の背中を、ユーリはただ見つめているだけだった。

ポーが息を切らして、ユーリの傍までやってくる。

戦闘は終わりを迎えていた。

「ユーリ。大丈夫？」

「慣れたよ……殺せなかったけどね」

弱々しい声に、ポーはやさしく後ろからユーリの肩に手を置いた。ヴォルフはその姿を見て、小さくため息を吐き出すと、ポーに問い掛けた。

「そいつは」

「僕が殺しておきましたから安心してください」

「ボー。ごめん、また迷惑かけた」

ユーリの言葉に、ボーは肩を竦めて笑ってみせると

「また？ いつもの事じゃないですか。それに、僕の方が二歳も年上で、賊歴八年も長いから当然です」

と言って、二度ユーリの肩を叩いた。

その光景に、安心したように顔を緩ませるヴォルフはその二人を引き連れて、ヴァルトが居る客室の方へ向かう。

「しかし、このまま放置もダメだろうな」

ヴァルトが頭を搔いてそう呟いた。

「馬」

ディックが一言、ヴァルトに言うとヴァルトは残っている一頭の馬を一瞥してから

「残った奴は良いぞ」と言った。

「有難う!!」

ディックは手を叩き、声を挙げて喜びを表現した。早速、ディックが馬に向かうと馬が怯え始め、鳴き声を挙げる。その鳴き声が悲痛な叫びに聞こえてしまい思わず、ヴァルトが釘を刺す。

「後で食べよ！ 後、きちんと殺してからな」

その言葉に、ヴォルフは苦笑いを浮かべつつも腕を組んだ。

「しかし、何の馬車でしょうかね？」

そういつて、手綱を握る台座で死んでいた豚のような男を思い出し顔を顰めるボー。

「高級なのは、そうなんですけど奴隷馬車な気がしますけど」

その言葉に続いてヴォルフが言葉を続ける。

「同業者が奴隷商人に依頼される事もあるからな」

「中身どうするよ」とヴァルトが呟いた。

「助けておいて今更だな」

ヴォルフは苦笑いを浮かべた。

「奴隷商人が襲われていたとはね」

ヴァルトがそうやって嫌そうな表情を浮かべた。既に、山賊達はこの馬車を奴隷商人の物としていた。

「ここいらで戦争なんてなかったのに、ニールから誰か攫ってきたか？」

ヴォルフも同意するかのよう言葉に吐き出す。

奴隷商人は戦争や争い事が起こると何処からともなく現れて戦争孤児や女を攫っていく。勿論、町などに居る浮浪者なども攫って不当労働をさせたり、町人や市民を誘拐するという事も平気で言い、金にし私腹を肥やし、時に権力者に擦り寄る。実に関わりあいたくない連中だとヴァルトは思っていた。

とにかく、中身を拝見するために、扉へ手をかけるヴァルトは、他の山賊に注意を促す。

「よし、開けるぞ。警戒してくれ」

そうして勢い良く開け放つ。中は如何にも貴族が乗りそうな馬車だと言う事が一目に判る。赤く染色された皮の背もたれに羽毛であろう弾力のある椅子。天井には小さくランプがぶら下がり、室内を照らし、眠っている二人の少女の影を作り成していた。

本当なら、この後ろにも荷台があったはずだ。現に、後ろには不自然な鉄の突起物がある。これは恐らく後続の荷台を連結させるための器具だったのだろう。

その予想していなかった光景に、ヴァルトは言葉に詰まった。奴隷商人だと予想はしていたが、この客室はどう見ても奴隷商人本人が使うような高級さだった。

「……女の子。ですよね」

ボーがユーリと顔を覗かせて呟いた。ヴァルトが盛大なため息を漏らし、ユーリの目が輝いた。

「これは、良い!!」

「落ち着け」

ヴァルトがユーリの頭を小突くと、ヴォルフを呼びこむ。ボーは室内に入り、顔を覗きこみ始めた。

「ドレス着て、枷だぜ？」

眠っている少女は丈が長くゆったりと身体を包み込むようなローブを纏いその上から上着を着込んでいる。二人はそれぞれ赤と青地に染め上げられた衣類に身を包み、身体の前部分だけは白地のままで、ベルトは腰上に巻かれ、小さく赤の上着を着ている少女には赤の宝石が輝き、青の上着を着ている少女には青の宝石が散りばめられている。

その姿にヴォルフは素っ気無く

「厄介ごと確定」と答えた。

着ている衣服が明らかに貴族が好む服装だった。ゆったりと身体の形が出ない——特に下半身を曖昧に見せる長い裾。襟には毛皮を用い、滑らかな服装は麻などの堅い繊維ではなく、絹といったようなきめ細かい糸を使った高級品だろうとヴァルトは思っていた。

「どうするよ、ヴォルフ」

「おい。頭が言う事か」

思わぬ一言にヴォルフがすかさず叱咤する。

「双子ですよね。これって」

ボーは顔を見つめながら、そう呟いた。それに反応してヴァルトが中へ入るとまじまじと二人を見る。

「そうだな。似ているといえば似ている」

「そっくりじゃないですか！」

ヴァルトの言葉に、思わずボーが驚きの声を挙げた。

「ヴァルトとダンは人の顔を覚えるのが得意だけど、そのせいじゃない？」

ユーリが未だ、興奮冷めやらぬ様子で言い、少女の足から頭までを舐めるように眺めていた。ヴォルフが思わず頭を叩いて、辞めろ。と言うほどに、雄臭かったようである。

「っと、そうじゃなかった。双子姫ですよ！」

その光景に呆れ顔をしていたボーが客室の奥から大声を挙げ、ヴァルトが煩いと呟いた。

「何それ」

ユーリがその言葉を拾い、ヴォルフが

「見たままだな」と呟いた。

「いや、見たままですけど。僕が名づけたわけじゃないです。町の人が言ってたんですよ」

ボーが心外そうに言葉を続けるが、ヴァルトは

「待て、言うな。もう読めた」と言って、その言葉を断ち切る。

ユーリも理解すると、ヴォルフの顔を覗きこんだ。

「どうするよ……討伐されるんじゃないか？」

ユーリの言葉に、ヴォルフも悩んでいるように首を傾げる。ヴァルトは、頭を掻き毟ると

「逃げるか」と言った。

「ちょ、ちょっと喋らせて下さいよ」

ボーが説明を求めるが、ヴァルトが面倒くさそうに喋る。

「領主の娘なんだろ？」

「……はい」

「よし、撤収。逃げる準備するぞ」

ボーの肯定に、ヴァルトが一声挙げて行動を促す。

「了解」

ダンが小さく呟くと死体を馬車に乗せ始める。どうやら、馬車に乗せて証拠を消すようである。

「お姫様は連れて行くよ。目が覚めて事情説明して、お城に帰ってもらう」

ヴァルトはそう言いながらも面倒そうに、双子姫を抱え挙げて外に出る。ヴォルフは死体を馬車に運びながら

「討伐隊編成しないで。ということだな」と言い放つ。

「うむ」

ダンも千切れた腕を投げ入れながら頷いた。黙々と作業を続けている四人だったがヴァルトが少女を抱えたまま、大声を張り上げた。

「ディック!! ここで喰い始めるな! これじゃ、普通に大熊が馬車襲って人肉とか食い荒らしたみたいになるだろ!」

血に染まり、目を光らせながら馬の肉を食らうディックが馬車の前で座っていた。思わず、ヴァルトが叫んだのも頷けるほどに凄惨な現場だった。近くには人の死体もあるので、ヴァルトの言う通りに誤解されても何もおかしくはない。

「ごめんなさい」

悲しそうにそう謝りつつ起き上がると、残った馬の死体を川の斜面へと放り投げ出す。

「馬車は取り合えず、川の方へ転がすか」

その光景を見る事もせずに、死体を乗せ終えたヴォルフは言い放ち、辺りを見回す。

「よし。ボーとユーリは証拠をなるべく消すように。他は馬車動かす。坂だから簡単に動いてくれるだろう。ディック、来てくれ」

ヴァルトはディックを叱った後、そそくさとねぐらに双子姫を運んでいったので現場の指揮はヴォルフが取る。

「確か、妹は喋れなかったんだよな」

作業を続ける中で、ユーリが呟いた。

「そうですね」とポーが相槌を打った。

「気になります？」

「そりゃ、可愛いからね」とユーリがおどけて言った。

「似た者同士？」

ポーは柔らかい微笑を作りながらそう切り出して

「うるせえい」とユーリは気恥ずかしそうに呟いた。

ポーはそれ以上、追求はしなかった。

ダンもそのやり取りを見る事はしなかったが、耳でしっかりと聞いていた。もちろんヴォルフも聞き耳を立てていた。

誰にも、言えないようなものが誰にでもある。ただ、ユーリが気恥ずかしく笑ったその横顔に、ポーはユーリが人を殺せない理由を垣間見た気がした。

「これくらいか、良いか。動かすぞ」

ヴォルフがそう呟き、即座に指示を飛ばす。

「坂まで持っていくのが辛いかな」とダンがぼつりと呟き、ヴォルフがため息を吐き出して

「ダン、言うな」と漏らした。

馬車の車輪は壊れているので、そう簡単に動いてくれそうも無かった。

聖都教という宗教が存在する。

多神信仰で世界最大宗教として大陸全土に教会があり、多くの聖職者と膨大な信者を抱えている。

名前の由来は神々や天使が住まう理想郷を聖都とし、そこに住まう事を名誉だとされ、神々が自らを模倣して作られた人こそ、この大地を支配する権利を持った尤も優秀な種族であり、作っていただいた神に感謝し、勤勉かつ優秀な種族である誇りを持って日々を謳歌する。さすれば、必ずや神々は人の行いを知り、神々の住まう聖都へ死後、誘ってくださるだろう。というものだった。

「司教様。私はどうすれば良いのでしょうか」と男は言った。

夜も更けてきているというのに、教会の聖堂には今だ、人が疎らながらも祈りに集中していた。

人々は常に悩み、苦しむ。その悩みを神の使いであると位置づけられた聖都教の司祭や司教らは教会を作り、迷い悩む人々の話を聞いていくのである。

「人という事に誇りを持ちなさい。貴方は神を模した人です。貴方の弱気な姿は神が弱気な姿を見せているも同義。さあ、貴方は笑い、前を向いて進むのです。そうすれば、必ず神は応え、聖都へ住まう事もできましょう」

ニールの町にも教会は存在し、町の一角と領主城の中に聖堂が作られている。町の教会を統括するのは司教という位を持つ聖職者で、司教は教区と呼ばれる範囲を監督する立場と権限を持たされている。

ニールの町は特異なもので、教区に町と呼べるのは一つだけ。残りは小さな農村だけだった。そのため、農村には無人の教会しか無く、礼拝や神事などにはこのニールの町に来る必要があった。

ニールの町周辺を教区とし、監督するのは一人の司教。今、迷える男性を導いた小太りな男。聖職者の証である、聖服と呼ばれる黒い生地 of 服で、腰には紫色の布が巻かれている。黒い瞳に短く揃えられた白髪。何よりも突き出たお腹が特徴的な男だった。

「カスパル司教様」

「ふむ。何用かな？」

聖堂で助司祭が声をかけて来るとカスパルは朗らかに答える。

すると、助司祭は身を少し寄せて

「火急のようで、酷く焦っているようです」と呟いた。

その言葉に、カスパルの表情が多少歪むがすぐに先ほどのような優しさに満ちた表情を浮かべると少し大きな声で、あたかも仕事が出来たように喋る。

「判りました。私の部屋で会いましょう。すぐにお通しを」

そうすると、聖堂を後にしながら、聖堂の奥にある教会関係者が住まう居館へ向かう。暗い石造りの廊下には蝋燭が壁に取り付けられ怪しくも優しい暖かさを周囲に与えている。

「まさか。いや、ありえない」

その道中、カスパルは小声で呟き続ける。先ほどの表情は何処へ行ったのか。顔は強張り、瞳が大きく開かれている。

「私は神に仕える人なのだから、間違いなど起こるはずもない」

ブツブツと呟き続けながらも、自室へ戻ると既にその室内には人影が一つ。

「このような、時間に何用か」

不安そうな声を隠す事もせずに、カスパルはその人影に問い掛ける。すると、人影は扉に立っているカスパルの方向へ向き直るとゆっくりと膝を折って平伏し

「計画は失敗に終わりました」とだけ静かに男の声で告げた。

その言葉に、暫く呆けていたカスパルだったが、改めて膝を折っている男に

「何を言っている？」と聞き返す。

すると、男も詳細を話し始める。

「双子姫を乗せた馬車が襲われた模様です」

その言葉を聞くと途端に、カスパルの顔から血の気が引いて行く。思わず、後ずさり扉に背中を押し付けた。

「し、しくじった……？」

その姿に対して反応せず、男は小さく頷き淡々と言葉を続けていく。

「はい。どうやら、山賊に襲われた様子で、生き延びてきた者も、先ほど」

「そ、そうか……ふむ。ま、まあ計画とは万事順調に行かぬものよ」

上ずった声が気丈さを装い、カスパルから零れ落ちていくがどうにも滑稽すぎる光景だった。

男は黙ってその言葉を聞き終えると

「司教様。これは、山賊の討伐隊を編成しましょう」とだけ進言した。

すると、カスパルも名案とばかりに立ち直り出し、表情も生気が戻っていく。

「……お、おお。そうだな。表向きな賊退治ならば、お前達も怪しまれずに動けるといもの」

「はい」

その小さな肯定で、カスパルは聖堂で見せたような司教ではなく、ギラギラと何かを付け狙っている獣を思わせる空気を持ち始め、口端を釣り上げて笑って見せた。

「仕方が無い。誘拐された事を公表し、私が臨時に指揮統制を取ろう。領主は生憎と床に伏せているのだからな」

「では、そちらの方はお願い致します」

「うむ。すぐに教会で行おうか」

すぐに行動しようとするカスパルであったが

「いえ、領主城が良いかと」と男に進言されて動き出した身体を止める。

理由を聞こうかと視線を男に向けるとまるでそれに合わせたかのように、男は喋り出す。

「領主様を見舞った折、頼まれたとすればより民も信じましょう」

「おお、それは名案だな。そうしよう」

その言葉に、納得すると二度大きく頷いて、万遍の笑みを浮かべた。先ほど、急いで行動しようとしていたが、「見舞うならば朝一番が良いな」と呟くと自室にある椅子に腰を落ち着けた。

「ならば、演説後、すぐに動けるようにしておくのだ！」

「御意」

男は、小さくそう告げると静かに退室する。廊下には相変わらず蠟燭が揺れているが、カスパルが来た聖堂方向には向かわずに居館の奥へと向かい、外へと出て行く。

外は既に暗闇に支配されており、何処からか食欲をそそる香りが流れてくる。男はそれを敏感に感じつつも納屋近くに縄で繋いでおいた馬まで寄ると

「ふん。豚が」と呟き、縄を外すと馬に跨る。

馬首を裏口に向けると、男は暗闇に向けて喋り出した。

「お前達、失敗した場合は粛清が我が団の掟だ。だが、特例を出す」

「はっ」

暗闇からは男の声で反応があった。隠れているのだろうが、闇に紛れているので姿を確認する事は出来ない。

「直ぐに、討伐隊を編成する。二十名全員を動かすぞ。計画に修正はあったが変更はない、衛兵も総動員だ。行け!!」

語尾は強く荒々しいが、その言葉に闇に紛れていた者達が動き出し、月明かりにその影を映し出していた。皆、黒に似た生地のコートを纏っていたが、小さく金属のこすれあう音が響いていた。

その影達を一瞥する事も無く、町へ繰り出す。男は町の奥を目指しながら

「神は司教よりもこの俺を選んだようだな」と口にしていた。

*

「外の様子は……？」

ヴァルトが、ユーリに問い掛ける。一先ず、山賊はねぐらを移動して、別の地点にあるねぐらで火を起し、双子姫を草のベッドに寝かせていた。

「ディックが見張ってる。なまじ人じゃないから大丈夫だ」

ユーリがそう呟く。

「ボー。お姫様は？」

ヴァルトはその報告に頷きながらボーに安否の確認を聞いた。ボーは難しい顔をしつつも喋りだす。

「薬とか飲まされていたら、ちょっと判りませんが、命に別状はないですよ」

ボーは医師ではないので、詳しい事は判らないが、目立つ症状も無い事からそう結論付けていた。

「十分だ。ボー、ユーリも休んでおけ」

「はい」

ボーが短く答えるも、ユーリは眠り姫となっている双子を見て、ご執心だと判る粘っこいため息を漏らし

「はあ……可愛いな」と呟いた。

その言葉に、ヴァルトは露骨に嫌な顔をすると

「おい、手を出すなよ」とだけ忠告する。

しかし、ユーリの言葉は続いていく。

「いや、でも可愛いよ。俺、初めてだよ。こんなにも息子が——」

ユーリの言葉にヴァルトはため息を吐き出した。元々、ディックを抜かせば一番若いのがユーリで女に興味がある年頃ではあるが、手を出されると困るので

「ダン。許可する。縛れ」とダンに指示を飛ばした。

「ちょ、ちょっと辞めて!!」

ダンは無言で立ち上がるとユーリに迫るが、ユーリも逃げようとする。しかし、簡単に捕まると腕を後ろに持っていかれ地に伏せられ、そのまま腕を縛られる。そして、終いにはぐるぐると身体を縄で縛られ芋虫になっていた。

ダンは芋虫にしたユーリを担ぐとベッドで寝る双子姫から離れ、遠くでまた火を起こし始めた。すると、ポーもそれに続いてダンの元へ行くと刀剣の手入れを始めていた。

その光景を眺めつつも、目の前にある火に視線を戻し、ヴァルトは苦笑いを浮かべて

「手を出されれば切り札も意味を成さないっての」とだけ漏らした。

その言葉に、ヴォルフも同じように笑うと

「まあ、そう怒るな。アイツはまだ十六だ。若いだよ」と付け加えた。

「俺だってまだ二十九だぜ？」

「そうだったな」

それきり、二人の会話は途切れる。双子姫は相変わらず、寝たままだった。月が綺麗に見えるものの、木々に覆われた森の中で腰を降ろすヴァルト達には月明りは一向に差し込まず、火の光だけが暖かく周りを照らしている。

火を囲み、向かい合う形の二人。彼らは長い間こうして来ていた。

「.....もう二十三年か。早いものだな」

ヴォルフがそんな言葉を漏らす。手で火にくべる枝を弄びながらも、視線はずっと火の揺らめきを見続けている。

「止せよ。昔の話は」

「何、俺ももう歳だからな」

歳という言葉に、ヴァルトは鼻で笑うと

「引退ってか。笑える冗談だ」とだけ言って見せた。

だが、ヴォルフは軽口を返さずに火に枝をくべた。その行動にヴァルトはヴォルフを見つめるために視線を挙げた。すると、ヴォルフはゆっくりと言葉を吐き出した。

「十二年前から始まったんだ。感慨深くもなる」

その言葉に、ヴァルトは一瞬言葉に詰まるも右口の端を小さく挙げて笑ってみせる。

「名案だったろ？ まさか悪党が護衛させろなんて言う訳ないっていう新鮮さ」

「今でも初仕事を覚えている。結局、強奪しただけだった」

十二年前、初めて商人に護衛を要求した。道中は平和そのもので、何一つ問題は起こらなかったが、逆にそれが問題だった。

「あのクソ野郎が金支払うのを拒むからよ」

商人は金を払う事を拒んだ。襲い掛かる事もできない賊は怖くないとでも思ったのだろうか。それとも、四人同行していた商人が居たから二人相手なら倒せるとでも思ったのか。どうであれ、反抗した商人に、ヴァルトとヴォルフは容赦しなかった。

「俺達もまだ慣れていなかったからな。奪って、殺して。それだけをしてきたんだ」

ヴォルフは自分で吐き出した言葉の後に笑みを浮かべた。力の無いその笑みは自嘲に見える。その言葉に、ヴァルトは自分の言葉で付け足していく。

「だが、俺には必要な事だった。何一つ無駄だと思った事はねえし。後悔もしてない」

ヴァルトの思いに

「それで良いんだよ」と、ヴォルフは呟いた。

その言葉。今、火を囲んで向かい合っているヴォルフの丸くなった姿にヴァルトは一抹の不安を抱え込んだ。

あの時も、ヴォルフはそう言って、力無く笑みを浮かべていた。きっと山賊という悪党家業に嫌気が差していた。だから、ヴォルフもヴァルトが言った商人を護衛しようなどという酔狂な提案を呑んだ。

ヴァルトは幼い頃からずっとそう思ってきたが、歳を重ねるごとにその思いは違和感に変わっていった。

「よしてくれ。どうした？」

それを必死に否定したいかのように、軽い口調で問い掛ける。

「腰を落ち着けようと思った事はあるさ」

対して、ヴォルフは妙に真剣な顔つきになってそう答えた。ヴァルトはその思いを長年持ち続けていた事を知っていたので、今までは特に興味を持たなかった。

「へえ」

今日だけは違う。どこか真剣さが感じられた言葉だった。だからこそ、ヴァルトはあえて適当に相槌を打ってしまった。

「それが、ここだったって事か？」

「良い場所じゃないか」

「毫碌(もうろく)したな。俺達は山賊。いつ、討伐隊を編成されて、その場で殺される。もしくは処刑場で首が飛ぶか、汚物を撒き散らして宙ぶらりんだぜ？」

山賊だけでなく、徒党を組み犯罪を行う者達の多くは捕まった場合は見せしめのために処刑される。ギルドに依頼が舞い込むほどの懸賞金を賭けられた賊徒も現れ、彼らは人から追われる生活を強いられる。生死を問わず。依頼の絶対条件は本人確認できる証拠ないし頭を持ち帰る事。

そのような世界に身を置くようになったヴァルトには、ヴォルフの言葉が妙に堪えてしまっていた。。

「悪党には悪党の矜持がある。ならば、その矜持のままに動く。アンタが教えてくれた事じゃないか」

初めて出会った時——ヴァルトはヴォルフを英雄だと見間違えた。絶望の淵でただ死を迎える

だけの存在に堕ちた自分を救い出してくれた。それがたとえ、ヴォルフ自身の贖罪だとしても、ヴァルトにはどうでも良かった。ただ、命を救ってくれた恩人に変わりは無い。

「アンタが、そう言ってくれたから。賊にも、悪にも種類があるんだって思えたんだぞ」

そして、ヴォルフが元賊だと知り、愕然としながらもヴァルトはヴォルフに縋るしか道は無く、共に行動して行き、人にも種類が居るという事を知って行った。

「アンタのお陰で、俺は過去を乗り越えられたんだ」

だからこそ、ヴァルトは思い知った。悪党は悪党でしかない。なら、悪党の中で自分が行う悪行に矜持を持つと決めた。それこそ、自分が踏み込んだ道に対する礼儀であり、ヴォルフへの恩返しになるとも考えていた。だが、ヴォルフの言葉にヴァルトの思いは揺らぐ。

ヴォルフは、自分の事を本当は、賊なんかにしたくなかったと思い知らされた。そのことが無性に心に突き刺さって――

「そんな、アンタが悲しい事、言うなよ」

だが、ヴァルトの搾り出した言葉にヴォルフは力無く笑みを浮かべて一言だけ漏らす。

「乗り越えたのか？」

「ああ!？」

その言葉に、思わずヴァルトは声を荒げた。まるで見透かされているようなヴォルフの視線とヴァルトの揺らぐ視線がぶつかり合った。

焚き火は変わらず揺らめき続け、木々の枝を燃やし尽くす勢いで音を挙げる。その焚き火を会して向かい合う二人の山賊の胸中はどのようなものなのだろうか。方や哀れみすら滲ませる瞳に、方や激情を必死に押さえつける子供のような弱々しく揺れる瞳。

だが、その睨み合いは第三者の介入によって中断される事となる。

「きゃああ!!」

目を覚ました、双子姫の一人が悲鳴を挙げる。すると、もう一人も起きて辺りを見回す。後者は落ち着いている。というよりも、感情の籠っていない表情と視線をヴァルト達に向けるだけで、後は先に起きたお姫様に抱擁されているだけであった。

その悲鳴に、興を殺がれたというよりか、救われたのかもしれない。ヴァルトは視線を外して、双子姫を見つめると

「——起きたか」と小さく漏らした。

ヴォルフも、先ほどの会話などなかったかのように、新たな枝を焚き火にくべながらも、双子姫を一瞥する。

その風体に怯えつつも、先に起きたお姫様——青いドレスを着込む少女は気丈にも、柳眉を逆立ててながら

「こ、ここは何処ですか。貴方達は——」と口を開いた。

その表情と態度にヴァルトもヴォルフも感心する。二人とも、見てくれに関しては怖い印象を持たせるものだとは認識しているので、少女が怖がるのも無理は無いと感じていたが、まさか目覚めてからこんなにも早く自分達から情報を聞き出そうと考えるとは思わなかった。

ヴァルトはこの時、貴族の子供でもぬくぬくと親の権力という箱庭で育っていないのかもしれないと感じていた。とにかく、そんな考えを面に出さずに会話を始める。

「ここは、俺達山賊のねぐら」

ひとまず、聞かれた事に素直な返答する。すると、少女は口を噤む。どうやら、予想以上に怖がっていたようだったが、ヴァルトは返ってその反応にほっと胸を撫で下ろしてしまった。ともかく、ヴァルトは話を進めるために会話を試みる。

「安心しな。何もしない。だが、聞きたい事がある」

「わ、私達をどうする気ですか。い、妹に手出しはさせません！」

互いに抱きしめあいながらも青いドレスを着込む少女が震える声でヴァルトにそう言い放つ。

「気丈なこった。だが、落ち着けよ。俺らはこれ以上、お嬢ちゃんに近づかない」

ヴァルトはその様子を見ると、腰を浮かせる事もせず、胡坐を掻いたままの状態で言葉を続けた。その様子に、少女は戸惑いと恐怖に顔を顰めながらも

「な、何を」とだけ呟いた。

対して、ヴァルトは身に付けていた短剣を抜き去ると、少女の足元に投げつけると地面に勢い良く突き刺さった。少女はその光景と行動に悲鳴を小さく挙げるも、ヴァルトはそれ以上、何かをしようとはしなかった。

「護身用でも自殺用でも良いから持ってな。で、聞いてくれるかい？」

ヴァルトは焚き火を見つめながらそう少女に向けて喋る。少女は少々呆けているが、投げつけられ、刺さっている短剣を見つめた。果たして、賊の言っている事は本当なのだろうかと考えているはずだが、短剣に手を付けようとはしなかった。その様子に、ヴォルフは静かに言葉を続けて行く。

「それによって、二人の命も、俺達の命も救われるかもしれない。安心してほしい。お前さんがたを殺すのは俺達自身の首を絞めかねないからな」

そう言って、ヴォルフは少女を見つめると柔和な笑みを浮かべてみせる。年上の笑顔には何か、若者を落ち着ける効果がある。ヴァルトは漠然としながらもそんな事を思ったのは、少女達が確かに落ち着きを取り戻しているからだだった。

「……わ、判りました」

少女は息を飲み込むと手を繋ぎ合って、ヴァルト達を正面に見据えるように身体を向けるとそう呟いた。その行動に、ヴァルトは視線を向けて話し始める。

「まずは自己紹介と行こうか。俺はヴァルト。こっちがヴォルフだ。山賊をやってる」

ヴァルトの紹介にヴォルフは軽く会釈して見せ、少女もそれに軽く応え

「私は、ヘレナ。ヘレナ・グーテンベルク。ニールの町を治めるグーテンベルク家の長女です。こちらはクレア……クレアは喋れないのです」と自己紹介を返した。

「そうか。判った」

予感当たる。面倒な事になりそうだとヴァルトは思っていた。何せ、ニールの町を治める領主が病に伏せている状況で、双子姫と呼ばれる息女が誘拐されている。そして、誘拐した馬車を第三の勢力とでも言うべき襲撃者によって襲われていたところを、第四の勢力となる自分達が参戦してしまったようなものだった。

とにかく、憂鬱を吹き飛ばすようにヴァルトは話を続ける

「まず、アンタはどうして奴隷商人なんかに捕まってたんだ？」

「ど、奴隷商人に捕まっていたのですか……」

「つまり、判らぬ内にて事か？」

「は、はい……司教様に、教会へ来るように言われて向かいました。そしたら教会に入る前に——」

双子姫——ヘレナが喋っていくが、どうやら本当に何も知らされず誘拐されたようだと言っている。ヴァルトもヴォルフも感じている。ヘレナは、とにかく感情が面に出やすい印象を持たせて、考えている時は考えている顔をするし、驚く時は本当に驚かせ甲斐があるようにはっきりと顔に出ているからだ。ヴァルトは素直な子供で助かったと胸を撫で下ろしたい気分だった。

変に利己的な子供はヴァルトにとって苦手だった。出会った当初のユーリのような餓鬼は勘弁したい。と密かに思っている。

「そうか、他には何か覚えている事ある？」

「いえ……」

そう言って、視線を焚き火に向けて伏せる。手は相変わらず喋れないクレアと固く結ばれているようにも思われた。

「じゃあ、まず俺達からの提案だ。領主様にお前さん達を返す。だが、俺達は山賊だ金が欲しい」

本当ならば、ヴァルトの言う通りに行動できれば良かったとヴォルフはしみじみと感じていた。今では、無理な話となってしまっているし、ヴァルトもそれを理解し双子姫に知ってもらおう

と喋り続ける。

「だが、奴隷商人は既に、別の賊に襲われていたってえ事でそれも難しくなった」

「え、な、何故ですか」

当然のように、ヘレナが疑問と驚きを乗せて問い掛ける。脳裏に、やはり賊徒の言う事だから信用できない。自分達は売られてしまうかもしれないという考えが過ぎるも、ヴァルトは平静かつ、ヘレナの考えている事を見透かしているように

「奴隷商人を襲った襲撃者は一体誰だ？ それが判らないとアンタらは無駄死にするかもしれねえぞ？」と逆に問い掛けた。

その言葉に、思わず息を呑んだのはヘレナだった。ヴァルト達山賊の話を全面的に信じるとしても、どうして馬車が襲われていたかという事は確かに説明がつかなかった。それこそ、山賊達の自作自演としか思えない。

「ど、どうして」

それでも、ヘレナは声を挙げ、ヘレナは気づいてしまう。襲われた原因よりも攫われた原因の方がよっぽど簡単に察しがついてしまったのだ。

「領主が君らを殺そうとしたのか。はたまた誰かが君らを殺そうとしたのか」

ヴォルフの呟きにヘレナは眉間に皺を寄せて怒気を滲ませた。

「お父様がそんな事をするはずがありません!!」

その大声に、ヴォルフとヴァルトは肩を竦めて見せる。誰だって、親を悪く言われれば心象は宜しくは無い。だが、ヴォルフからすれば赤の他人であるヘレナの親など知りもしなければ、可能性の一つを並べただけだった。それに、山賊はこういった話には慣れている。子の知らぬ所で親は悪行を行うのは日常的だ。最たるものは浮気や盗み、強請り。善良だと思っていた民衆も、蓋を開ければ肥溜めの山賊様と同じような事を平気で出来る連中ばかりだという事を知らないのだ。だからこそ、子供は無垢で純粋だといわれているとヴォルフは思っている。だからこそ、ヘレナの怒気は彼ら山賊には何の効果も無い。ヘレナの喜怒哀楽全てに無反応で居られるのだ。それでも、話を続けなければならない。ヴァルトは口を開く。

「だったら、可能性は絞られるだろ？ ニールの町で領主様の娘が死ぬと利益を得るのは誰ですかって話よ？」

その言葉に、今度はヘレナが萎縮してしまう。

「領主を疎んでいる者。お前さん方を妬んでいる者。邪魔だと思っている者。尤も、権力と金を持っている奴らの犯行になるな」

ヴォルフがまるで追い討ちをかけるかのように、言葉を続けヘレナは小さくも

「……そんな」と呟く事しか出来なかった。

察してはいたが、他人からそのことを突きつけられると苦しかった。ヘレナにとって父は偉大な人で顔も知らない王よりもよっぽど偉いと思っているほどに尊敬していた。その父を疎んでいる者が、父とヘレナ自身が何よりも愛するニールの町に居るという事実を認めたくは無かった。

。ヴァルトとヴォルフもその気持ちを汲み取る事は出来る。子供は皆、大人の汚い所を知らない。その毛ほども小さい先っぽでも知ってしまえば世界は一変してしまうのだ。

それでも、言葉を辞める気も、慰める気にもヴァルトとヴォルフはなる事は無い。

「可能性の問題さ。だが、俺らも命が掛かってるんだ。そう簡単に切り札を送り返せない」

「俺達は奴隷商人と襲撃者を撃退した。これは、両者から睨まれる事になるだろう？」

完全な部外者だったヴァルト達だったが、ヘレナとクレアという双子姫を保護してしまったからには渦中にいきなり飛び込んだも同然の状況。奴隷商人と連絡が取れなくなった誘拐の黒幕は行動を起こし、襲撃者はヴァルト達を即座に探し出す事になる。

どちらかの勢力に接触できれば事態を好転させる事は可能だとヴォルフは思っているが、ヴァルトの性格からして悪手を用いることはありえないと悟っている。

ヴァルトには殺す技術や奪う手段を教え込んだが、何よりも叩き込んだのがヴォルフ自身の精神論だったからだ。ふと、その事を思い出すとヴォルフの表情が感傷に浸っているようにも見え始めた。だが、ヴァルトもヘレナもそんな表情には気付きはしなかった。

「つまり、誰かが行動を起こすのさ。領主様か誰かがな」

「その時、交渉に必要なのは、君らって事になる」

山賊二人の言葉に、ヘレナは思い知らされた。

「私達の命を引き換えに、貴方達は逃げるつもりなのですね！」

目の前にいる男達はやはり山賊だと。やはり、悪党だと思い知らされた。

「ああ、そうさ」

ヴァルトは笑みを浮かべながらそう答えると、ヘレナの顔が真っ赤に染まる。

「この、人でなし！ なら、どうして助けたりしたのですか!!」

いっそ、奴隷商人捕まったままでよかった。と思っついで言葉に出してしまったが、すぐに、ヘレナは後悔する。捕まっていたのなら奴隷として男達の慰めものになっていたかもしれない。それを考えると悪党でも今のところ何もしてこない山賊に助けられた事は僥倖だったはずなのだ。それでも、一度出てしまった言葉を取り消す事は出来ないし、訂正するのも億劫であった。

「金になりそうだったと判断しからだ。他意はねえよ」

そんなヘレナの苦悩など気にもせず、淡々とヴァルトはそう告げる。すると、ヘレナも悩んだのが馬鹿らしくなった。悪党に変わりはないのだから、僥倖でも何でもなかった。ただ、これから起こる惨状を迎える期日が無駄に延びただけだと思い知らされた気分になって、唇を噛み締める。

「まあ、明日の朝に町へ行く。その時、情報を集めてそれから決める」

ヴァルトはそう言って、頭を搔いた。横目でヘレナとクレアを見つめると、ヘレナは泣きそうな感情を必死に押さえつけるように唇を噛み締め、クレアは喋れない代わりに、ヘレナにぎゅっと抱きついてこちらを見つめていた。

クレアと視線がぶつかり合って、思わずヴァルトは視線を外してしまう。吸い込まれてしまいそうな濃い青がそこにあった。一度だけ見た海のような何処か底知れぬものを見せられたような錯覚に陥るヴァルトは、「ああ——」と小さく声を出してため息を吐き出すと

「助かるかもしれねえな。祈っていてくれよ」とだけ呟いた。

その言葉に、驚いたのは双子姫ではなく、ヴォルフだった。だが、その驚きも直ぐに消える。

「ヒィ!!」

ヘレナの悲鳴と共に、ヴァルトの頭に重い何かが乗せられる。その光景にヴォルフは声を出して笑った。

「ん？」

ヴァルトは後ろを向くと

「ダメ」とディックが右手をヴァルトの頭に乘せてそう言った。

あまりに突然の出現と行動。何より、不可解な言葉にヴァルトは意味が判らないとディックを見つめる。するとディックはヴァルトの頭を優しく叩いた。

「おいおい。ディックどうした？」

ディックの行動に、ヴァルトが問い掛けると

「イジメちゃ、ダメ」とディックは怒った声を挙げる。それは、まるで子供を優しく叱り付ける親のように見えていたヴォルフは益々声を挙げて笑った後に

「お前の負けだヴァルト!! お嬢ちゃん達、安心しろ、助けてやる。ただ危ない橋を渡ると言うから覚悟だけはしてくれ」と未だに怯えているヘレナに向けて喋る。

「それと、この熊はディック。珍しいだろ」

ヴァルトは、頭を掻きながらもディックを紹介する。ヘレナは悪魔を見るように怯えきっているが、クレアはどういうわけか興味を示すかのように、ディックへと近寄ろうと身体を動かすもヘレナに抱きかかえられてしまっていた。

「初めまして、ディックです。獣人の熊です。判る？ 獣人って」

そんな二人にディックは丁寧に自己紹介をして双子姫の近くに寄ると腰を落ち着いた。ディックなりに危害を加えるつもりはないという行動だったのだろうが、ヘレナは声無き声を挙げた。それでも、ディックはゆっくりと右手を突き出した。軽く後ろに下がるヘレナだったが、クレアが抱擁から抜け出るとおもむろにディックの目の前にちょこんと座った。

「クレア！」

慌てて、ヘレナがクレアの肩に手を掛けるも、クレアは差し出された手を触った。最初は白く堅い爪を撫で、それから毛を手の全体に触り、最後に肉球に触れた。慎重さも無い大胆な触れ合い方に、ヘレナは戦々恐々だったがディックは何もせず、ヴァルトとヴォルフも興味深そうに二人の声無き交流を眺めていた。

「堅いでしょ。僕の毛」

掌を上に向けた状態で触れ続けるディックは優しくそう呟き、クレアも小さくも頷いて見せた。これにはヘレナも驚いてしまった。

それでも、クレアの横まで前に出ると恐る恐るながらクレアと同じようにディックの手に触れる。一瞬触れて慌てて手を離し、また触って——何度も繰り返してようやく慣れていく。ヘレナもディックに敵意が無い事をようやく落ち着いて受け止めたようだった。理解していたのはクレアが触れてすぐだったが、どうにも身体が言う事を利かなかったのである。

暫し、二人と一頭は無言で手を触り、肉球を押したりしていたが

「でも、暖かい……知っています。獣人」とヘレナは小さく呟いた。

それを見て、ヴァルトは苦笑いを浮かべながらも

「危険は無いから安心しな。ディックは十一歳だからな。まあ、歳近いだろうし話し相手になってやってや」と喋って焚き火から腰を浮かせる。

ヴォルフも同じように笑みを浮かべながらもヴァルトに続いて立ち上がる。

「まったく……ウチの息子は最近、反抗期か？」

「大人の階段昇ってるんだよ」

「熊が人の階段昇ってどうするんだよ……せめて、人に変身できるようにしないと」嫌なそうながらも嬉しそうな、なんともどっちつかずの表情に顔を歪ませながらヴァルトは答えた。

「ヘレナとクレア。ゆっくり休め。それとドレスを切れ。ディック。ホレ、鋏(さ)はみ)」

ヴァルトはそう言って、鋏をディックに渡すとヘレナが

「あ、あの……」と困惑しながらも声を出した。

「何かあったとき、走りやすいだろ？」

ヴァルトにとってはドレスで居られるのは非常に困っていたので、この機に切らせる気が初めからあったようだ。

ディックが、それを聞き終わると双子姫に手渡そうとすると、クレアが当たり前のように手にとって、ドレスを引き裂き始める。

「ク、クレア」

その行動に、ヘレナが思わず声を挙げてしまうが、ヴァルトはその光景に笑い声を挙げて

「クレア嬢ちゃんは中々に行動力があるな。顔は人形みたいに無表情なのに」と呟いた。

だが、その言葉にクレアではなく、ヘレナが過剰に反応して鋭い視線をヴァルトに突き刺す。ヴォルフはヴァルトの肩に手を置いて「何やってるんだ」とばかりに呆れた顔をする、ヴァルトも失言だったと思い知り

「……ああ、悪かった。悪口じゃなかったんだ。綺麗って意味でね？」と弁明する。

ヘレナは不満そうではあったが、一先ずクレアのドレスを切る手伝いを始めた。

「お前も、娘には弱いんだな」

ヴォルフのニヤ付いた声に

「うるせえよ!!」とヴァルトは大声を挙げた。

ヴァルトは口を尖らせる。

「とにかく、腹とか減ったらディックに言え、図体に似合わず食べ物に関しては紳士的だからな」と言い放つ。

その言葉に、ヘレナとクレアはディックを見つめる。

「食べ物がないと生きていけない。だから、大切なの」

すると、ディックは至極真つ当な事を喋るので、ヘレナが面食らってしまったが、その言葉に、思わず笑みを零した。その顔に、ヴァルトとヴォルフはようやく安堵のため息を吐き出し、背中を向ける。

「ディック。今日はここでお相手よろしくね。それと、嬢ちゃん」

言い忘れていたかのように、ヴァルトは頭を掻きながら振り返ってヘレナとクレアを見据える

。

「逃げたいなら構わない。だが、夜は動くなよ。ここら辺は、ディックの匂いと毒肉や罌なんか

で獣を無理やり近づけないようにしているからな」

その言葉に、ヘレナの顔が強張るも、ヴァルトは一言添えてダンの元へ歩いていく。

「安易に動くと死ぬぜ？」

「ディックの事、残ってんだろ」

ユーリやポーがいる焚き火に移動する途中で、ヴァルトは静かにヴォルフへと呟いた。

「——仲間の事を思ってか？」とヴォルフは言った。

その顔は嘲笑に近い笑みが張り付いていた。

「なんだよ」

ヴォルフの思わせぶりな言葉に訝しげに横を歩くヴォルフを見つめる。

「一度、じっくり考えてみる」

「いつだって考えているぜ？」

ヴォルフはじっと前を見据えていた。焚き火の周りにはダンとポー、そしてユーリが居る。

「お前の事も考えてやれ」

ヴァルトのため息が一つ。

「爺臭い説教だな」

「年上の有り難い説法さ。心に刻んで置けよ」

そうやって、ヴォルフはヴァルトの背中に手を回して軽く平手で打った。

「くそっ……!! ディックめ……」

ユーリが忌々しいとばかりに談笑を始めたヘレナとディックを見つめて呟いた。相変わらず芋虫状態のままであったが、その光景と言動にヴァルトは心底呆れながら

「ユーリはまだやってるのか」と呟いた。

「どうでした？」

ポーが取り合えず、新しく作った焚き火に枝をくべながら二人に問い掛ける。その視線はやはり双子姫の方に向けられていた。だが、ヴァルトかヴォルフが喋り出す前に、ユーリが大声を挙げる。

「ヴァルト、なんであんなケダモノをお姫様に!!」

「今から纏めるさ……ったく、俺はお前のそういうところだけは本当に尊敬するぜ」

ヴァルトはため息を吐き出し、ポーの問い掛けに答えて、ユーリの言動に苦笑いを浮かべる。すると、焚き火の周りにダンが居ない事に気付くがヴォルフが代わりに声を出した。

「ダンは見回りか？」

「はい。芋虫を僕に押し付けて行きました」

「ご苦労さん」

ポーの言葉に、ヴォルフはそう告げると腰を落ち着けた。すると、ダンが居ない状態ではあったが、ヴァルトが話を進めるべく言葉を吐き出し始める。

「さて、今後について一応決まった」

「二人の娘はニールの町を治めるグーテンベルク家って貴族の娘だ」

「やっぱりな!! 良い匂いしたもんな! なんと香しく繊細な女の子なんだ……やっば、ポーが

男だって事が良く判ったぜ。嗚呼、思い出すだけでゾクゾクと何かが全身を駆け巡る！」

そう言って、興奮したかのようにもぞもぞと蠢くユーリにヴァルトは無言で布と縄をボーに渡す。

「これ、啞えさせておいて」

「はい」

ヴァルトの言葉に、短くボーが答えると暴れるユーリの上に乗ると布を口に押し込み、顎から頭頂部に掛けて縄でぐるぐる巻きにしようとする。ユーリは暴れて抵抗するが、ヴォルフが顔を押しえつくと後は、ただただ巻かれていくだけだった。

その光景を見るわけでもなく、ヴァルトは話を続けていく。

「朝一番に情報を集めに町へ向かう。昼前に戻って報告会って具合だ。それぞれの判断で今回は動いてくれ。役割は与えるがな」

「危険の分散。加えて講じてを増やす事も出来るという事か」

ヴォルフが再度腰を落ち着けながら口を開いていた。

「おう。町で集まるのは得策じゃない。だが、情報は町にしかない」

ヴォルフの言う通り、集団で行動するには危険が高まっている状況だった。そして何よりも情報が不足しているのではここは単独行動をする事にしたのである。単独行動する事によって、一網打尽を防ぐ意味があった。

「内容は領主が捜索隊を編成しているかの確認ですか？」

ボーも元の位置に座ってヴァルトに問い掛ける。

「それもあるが、第一に言うと奴隷商人は何故、姫二人を攫ったのか。そして、その馬車を襲ったのは誰なのか」

「なるほど。攫えば利益が転がり込んでくる。そして、その相手を襲った相手もまた然り」

ボーは顎に手を置いて考えに耽り出す。ニールの町に居る権力者を今ある情報の中から導き出しているのだろう。そして、ユーリは判らないがここにいる全員が最も怪しいと思っている権力者が一人だけ居た。

「目下、最有力は教会。何せ、誘拐されたのが教会前だっていうからな」

「あからさまですね」

「あえて、と言う所か」

ヴァルトの言葉に、ボーとヴォルフも納得したように言葉を漏らす。

「俺はそうだろうと思ってる。元々、聖都教自体が裏で何してるか判ったもんじゃねえからな」
嫌そうに、顔を顰めながらヴァルトはそう吐き出した。

山賊という職業柄どうにも宗教とは浅からぬ繋がりが出てきている。表では、善良な市民に道徳を説き、賊は悪党だから殺しても良いと言う。しかし、裏では汚い事に賊を用いて実行させているという実態を知っているのだ。

ヴァルトからすれば、教会や権力者のように二つの顔を持つ善人が一番嫌いだった。汚い事を知らせずに何かを行う事を悪いとは思わないが、汚い事を行わせておいて、簡単に切り捨てる扱いに虫唾が走る思いをしている。

「権力に溺れるっていうのは在り来たりすぎますけど、同じ道を辿る人が多いですからね」

ポーはそう言って、眉間に皺を寄せる。ポーは元々浮浪者だったので、教会から慈悲という名目から矯正院に入れられていた時期があるので、教会には思い入れもあった。

ヴァルトはポーの方を一瞥して——私の居たところは、奴隷商人の見世物市みたいなところでしたからね——と言っていた事を思い出していた。

もしかすると、ニールの町も同じような状態なのかもしれない。ヴァルトは密かに激情を胸の内に押さえ込むと話題を変える。

「それと、襲撃者は恐らく賊じゃない。ダンが言っていただろう」

その言葉に、一同がダンの言葉を思い出していた。

「鍛錬された動き。でしたね。という事は、傭兵関連の組合(ギルド)関係者？」

ポーが目星を口にすると、ヴァルトは

「町に組合はあったが、中身は調べてないから、ポー頼む」と指示を飛ばす。

「判りました。狩人という事で見えますね」

ポーも了承するとヴァルトは頷いて、今度は芋虫のユーリを見て言葉を続ける。

「ユーリは馬車の出所を探る。停留所から売り場までな。後は適当に情報かき集めてくれ。教会付近だ」

その言葉に、ユーリは這いながら、ヴァルトのほうに頭を向けると頷いた。ヴォルフはそのユーリを見て、縄を解き始める。

「頭は？」とユーリを解きながらヴォルフは言った。

すると、ヴァルトは暫く思案してから

「俺は、ちょっくらまたザックス探すわ。なんだかんだで良い情報屋になっているからな」と答えた。

「人脈は財産とか言っていましたけど、あの情報量の多さは凄いですよね」

ポーが感心しつつもそう述べる。ヴァルトもその言葉には全面的に賛成だった。とにかく、商人としての能力は知らないが人の噂を集める事だけは、そこらの賊よりよっぽどマシ。ヴァルトは、ザックスが情報屋を営めば儲かりそうだと思っていた。

その会話に自由の身となったユーリが参加する。

「ニールの町に着てから俺らと大差ないのにな。やっぱ豪商だぜ？」

「もう少し、せびれば良かったかあ」

「今更だ。それより、俺はどうする？」

ヴァルトが自由になったユーリの言葉に、軽く残念そうな声を出すので、ヴォルフが苦笑いを浮かべてそう問い掛ける。

「ヴォルフは居残り頼む。ダンはいつも通り周辺を見て回ってもらう。ダンは察しが良いから、問題ないな」

ヴァルトは気を取り直すとヴォルフに指示を飛ばした。ダンについてはえらく信頼しているようである。

だが、ポーも

「さしずめ、遊撃ですか。頼もしいですね」と言って頷いた。

「俺は、アイツを元暗殺者だと思ってる」

ユーリがえらく真剣に、一同を見回してから呟くと、ヴァルト達も真剣な表情で思案顔になる。どうやら、皆思っていた事のようにだったが、ボーがその中で喋り出す。

「強ち間違っていないと思いますよ……優しいんですけど、何処か近づきたい雰囲気ありますもんね。時折、こちらを睨みつけていますし。僕は嫌われているのでしょうか？」

ユーリのため息が零れ、ヴァルトとヴォルフが苦笑いを浮かべるという奇妙な光景にボーが首を傾げる。すると、ヴァルトが

「逆だよ。大切に思われているから視界に入れておきたいって奴よ」とボーに言った。

ボーは「なるほど」と小さく呟いてみせるも、ヴォルフは呆れてしまった。

「ヴァルト……流石にダンの気持ちも考えやれ。そんな他人から言う問題じゃないだろう」

「そうだったっけ？ まあ、今の忘れてくれよ」

慌てて、ヴァルトはそう言うも対するボーはきょとんとした顔をしながら

「え、でも。弟みたいに思われるって、なんか嬉しいです。僕、家族とか知らないし」と言い放つ。

ヴォルフが難しい顔つきになって唸り、ヴァルトが笑い声を挙げる。そんな光景にますます意味が判らなくなっていくボーにユーリが傍へよって肩を叩いた。

「これで、良い。二人にとって、このすれ違いが何より幸運なんだよ。きっと」

その姿に、ヴォルフはヴァルトに小さく呟くと

「かもしれないな」ヴァルトもそんな言葉を漏らした。

「何ですか？」

ヴァルト達のおかしな行動に不審がるボーだが、ヴァルトが言い繕うように言葉を並べ始める。

「ん、ああ。ダンが兄ならヴォルフは本当に爺だなって話だよ」

「そうですね、僕にとっては、ヴォルフはお爺ちゃんて歳の行ったお父さんです！」

その言葉にボーも納得したように元気良く答え、ヴァルトとユーリが笑い出し、ヴォルフが肩を落として

「落ち込むわ……」と呟いた。

方や、双子のお姫様が一頭の熊と談笑し、方やむさ苦しい男どもが火を囲み笑い転げる。

なんとも奇妙な光景が深い深い森の中で見られるも、夜は変わらずに更けていく。

山賊のねぐらに二人の少女が肩を寄せ合って、獣の臭いが漂う布に包まりながら眠っている。既に日が高く昇っているものの、彼女達が目を覚まさないのは、夜のうちにディックがぐっすり眠れるようにと木の枝を集めて簡単な草木の壁を作ってあげていたからだった。その壁によって日の光は僅かな森の中でより一層僅かな木漏れ日となって降り注いでいる。

風が優しく戦(そよ)ぐと草木の壁がざわざわと音を奏で、その隙間からヘレナの瞼を光が照らす。夢うつつだったヘレナはその光によって急速に覚醒していくが、危機感を持って目覚めたわけではなかった。

「んっ……」

少々、獣臭いと訝しがりながらもいつものような日常が今日も始まったと言わんばかりに目を擦り、上半身を起こすと伸びをする。少女の行動は、歳相応ではあったがやはり貴族の息女を思わせる空気を身に付けているような優雅さを漂わせる。

だが、ここでヘレナは自分が非日常に置かれている事に気付き始める。ここは、何処だろう。そう逡巡し、妹のクレアを探すと姿が見えない。これに、慌てて

「クレア！」と叫んで探し始めようと身体を起こす。

しかし、草木の壁が唐突に揺らめくかと思えばそこから熊の顔が現れたのだ。これには、ヘレナも大声を挙げざるを得ない。

「きゃあ!!」

叫び声を挙げて座り込んでしまったヘレナに熊のディックは表情の変わらぬ顔で口を動かした。

「おはよう」

あどけない声と挨拶に、ヘレナは昨日の出来事を走馬灯のように思い出していく。

山賊のねぐらで目覚めて事情を説明されて、獣人のディックに驚き、そのディックと夜はお話をして、ディックが喜々とした声で縄の縛り方を教えると言うので付き合っ、気付けば朝になっていた。

体験した事が多すぎて、未だにヘレナは整理整頓が出来ていなかったが、とにかく目の前に居る熊が山賊の仲間だ名前がディックだという事に気付いた。

「あ、ご、ごめんなさい」とヘレナは謝罪を述べる。

「気にしない」

ディックは特に気にする事もせずに、草木の壁を取り払う。ヘレナは眩しさに目を細めるが目の前にクレアが座っている事に気付くと安堵のため息を漏らしそばへ寄り、焚き火の方へ身体を向けてクレアの隣に座った。

クレアを見ると、ヘレナは平静を取り戻し、クレアの順応に舌を巻いてしまう。昨日の夜に出会った山賊の一味であり、御伽噺でしか知らない獣人と仲良くなっているという事実。今も、クレアは自ら枝を持ち火にくべているし、ディックは何食わぬ様子で真っ黒コゲになっている鍋で何かを煮詰めている。

ヘレナにはどうにも、二人がもっと前から知り合いだったのかもしれないと思えてならなかつ

たが、そんな事はないと人知れず否定するが、妙に自信がなかった。

疲れているのかもしれない。奴隷商人に襲われて、山賊に助けられ、獣人に会う。一夜にしてとんでもない出来事を体験しているのだから疲れても無理はない。ヘレナはそう自分に言い聞かせて、気を取り直す事にする。

「ディック……さん」

手始め、と言っはなんだがディックに改めて問い掛けてみる。昨夜は色々と山賊や町での生活についてのやり取りを交わしそれなりに親しくなったと思っていたが、ここは謙虚に接してみると、どうやらディックはその呼び方が気に入らないようだった。

「呼び捨てでいい」

不機嫌そうな声に、狼狽するヘレナであったが、クレアがそっとヘレナの左腕を掴む。その瞳には、久しぶりに見る妹の感情が見て取れたように感じられた。

「昨日も言ったけど僕は十一歳だし。ヘレナとクレアのほうがお姉ちゃん」

その言葉に、呆けてしまったが「はい」と返事するヘレナにディックは少し満足そうに頷いたように見えた。

ディックは鍋からスープを木のお皿に入れるとヘレナに手渡しするように近寄って顔の前に持って行く。

「これを、私に？」

ヘレナにはあまり見た事無い色をしたスープだったので少し、驚いているようにも感じられる。

「美味しいよ。ヴォルフが作ってくれるスープ。貴族にも美味しいって言わせた」

「あ、ありがとう」

ヘレナはスープを受け取り、クレアも受け取るのを待ってから木のスプーンを握った。無骨で適当に作られたスプーンでヘレナには握りにくかったが贅沢を言える立場ではないし、食べれるだけでもとても助かっていた。双子姫は昨夜から何も食べていないので当然かもしれない。

意を決して、初めてのスープをすくうヘレナであったが、クレアが何の戸惑いも見せずに口を運ぶのには少々慌ててしまう。それでも、クレアは二口、三口と食が進むのを見て微笑む余裕を見せた。

「良く噛んで食べないとダメじゃない」

優しく言い聞かせるヘレナに、クレアも言う事を聞いてしっかりと噛み締めながらスープの具を食していく。

「——美味しい」

一口、ヘレナは食してみると驚いた。何より、自然に美味しいという言葉が口から零れるほどに美味しかったのだ。

「魚の汁とか、色々なのを混ぜて作った秘伝のスープだって」

ディックが適当に解説を入れながら、自分も専用のスプーンで食べ始める。ヘレナとクレアは暫くその奇妙な光景に衝撃を受けたが

「とても、美味しいですよ」とヘレナは改めて言い直した。

「良かった」

ディックも嬉しそうな声を挙げて食が進む。ヘレナとクレアはスープをお代わりするくらいに食すとスプーンを木のお皿に置いた。ディックは今だ、残っている鍋のスープを食べているので、二人はその姿を見つめる。

ヘレナは辺りを見回すと、山賊が他に居ない事を今になってようやく気付く。

「皆さんは？」

「情報を集めに行った。お姉ちゃん達が騒動になってるのかとか、色々」

その言葉に、ヘレナは視線を焚き火に落とした。クレアはまたヘレナにくっ付き始める。そのクレアの頭をヘレナはそっと撫でる姿は子をあやす母親のようでもあった。

ヘレナの心の奥には正直な戸惑いが生まれている。果たして本当に、山賊を信用しても良いのかという疑心と、山賊は本当に自分達の事も考えて動いていてくれているかもしれないという希望。何よりも、ヘレナは自分達が実際に誘拐されたという事実を未だ信じられないという思いがあった。その事実を信じてしまえば、父を恨む者がニールの町に居るという事を自分の中で証明してしまう事に繋がる。

そう考えるとヘレナは憂鬱な気持ちになってしまっていた。それでも、ディックは決して悪い人——獣——ではないと思いたいヘレナは

「そうですか……ありがとうございます」と感謝の言葉をディックに述べた。

だが、ヘレナの感謝にディックは不機嫌な声を出して問い掛ける。

「何で、そんな事言うの？」

ヘレナはその問い掛けに違和感を感じながらも

「助けていただいて」と付け加えた。

「僕じゃないよ。助けるって決めたのは、お頭のヴァルトだもん」

その言葉に、ヘレナは面を食らってしまう。ディックは、感謝する相手を間違えているとヘレナに言っているのだ。

「お礼はヴァルトに言って」

ディックの言葉に、衝撃を受けたヘレナは暫く口を開けなかった。自分はまだ山賊達を疑っているのに、目の前に居る獣人はそんな事を気にする素振りも見せない。そして、感謝は山賊のお頭に言って欲しい。今まで、そう言った人をヘレナは知らない。感謝を述べれば皆、嬉しそうな顔をした。感謝の言葉を言えば、誰でも幸せな顔になると思っていた。けれども、目の前の獣人は違った。感謝をするべき相手が違うと諭した。

その時、クレアがお皿を持ってディックへ近寄るとディックの前にお皿を突き出した。その突飛な行動にヘレナは黙って見つめていた。ヘレナにはクレアがディックにありがとうと言いたい事が良く判った。

だから、ヘレナもお皿を持ってディックの前に向かう。ディックはクレアからお皿を手渡されても無言であったが、何を言えば良いか判らなかった。続いてヘレナまで同じ行動を取るのだから、ディックは訝しがっている。

「——はい。それと、スープを用意してくれてありがとう。ディック」

だが、ヘレナの言葉と手渡されるお皿によって、ディックは一連の出来事全てを悟る事が出

来た。ディックは二人交互に顔を見つめるように自分の顔を動かすと

「うん」と、嬉しそうで元気な声を挙げて答えた。

その言葉が妙にヘレナとクレアには嬉しくて、ヘレナは笑い声を小さく漏らし、クレアは安らいだように笑みを浮かべた。

ヘレナにはクレアが笑った事だけでも十分に驚く事だったが、今だけはクレアも笑うのは当然。という妙な自信の元で、特に気にはしなかった。クレアも人なのだから、当然笑える。だから、クレアが笑うのは当たり前的事だとヘレナは思っていた。

「ディック、貴方は、本当に獣人なのですか？」

食事を終えた三人は昨夜よりもずっと親しくなって接しられていた。クレアはディックの膝の上に乗って、身体を背もたれにしているしヘレナもその横でディックの高い顔を見上げている。

「うん。凄く珍しくて、僕以外に会った事は無いよ」

「獣人は人に化ける事も出来ると聞きましたので、もしかしたら人に化けて暮らしているのかもしれないね」

ヘレナは聖都教を知っている。好きではないが知っている。だからこそ、獣人がかつて人から迫害を受け、虐殺の限りを尽くされた事も知っていた。多くの人々が御伽噺だと思っている事でも、目の前に獣人が居て会話をしているヘレナには過去の凄惨な出来事がどんな理由であろうと事実である事は理解できていた。だからこそ、ディックが他の獣人と出会える事を祈りたいと願えた。

「そうかも。そうだと、良いな」

ヘレナの言葉に、ディックは嬉しそうにそう答えた。ヘレナはその反応に自然と笑みを浮かべる事が出来ていた。

どうにも、十一歳というのは本当かもしれない。ふと、ヘレナはそう思い、弟が居たら——なんて飛躍した考えにまで至っていた。

ヘレアとクレアは、もう獣の臭いになれてしまっているようで、クレアは昼寝が出来そうなほど眠そうになって、ヘレナは近くで座っていても全然平気のようだった。

「ディックも、化ける事は出来るのですか？」

「僕は出来ると思う。けどまだ出来ないんだ。教えてくれる人が居なかったから」

ディックは親の顔も知らず、何処で生まれたかの判らず、ある森の中へ捨てられた。何故、捨てられたのか理由は判らない。けれども、他の獣に食べられるか衰弱死して土となるかの二択しかなかったはずだったが、新しい選択肢が突然現れる。それがヴァルトでヴォルフだった。

ディックには僅かながらヴァルトと出会った記憶が残っている——それが十一年前だった。だからディックは十一歳だと言い張る。

「ごめんさない」

「慣れてる」

謝る事しか出来なかった。何より、「慣れている」。その一言がヘレナの心を締め付けた。馴れ馴れしくしていたのはディックではなく自分自身だった。ヘレナはそんな自己嫌悪に陥る。

そんなヘレナの頭にディックの大きくて硬くともちょっとだけ柔らかい手が乗せられる。

「ボーも、ユーリも最初は、驚いた。だけど、次の日には普通だった。だから、お姉ちゃん達も

大丈夫」

何もかもが恥ずかしかった。ヘレナは今、自然と溢れてきた涙を流している事を恥ずかしいと思っているわけではない。自分の行いと浅はかな思い全てが恥ずかしかった。山賊として生きている獣人が背負う色々な事を受け止めて挙げられる気になっていたのだと、ヘレナは気付かされたのだ。

「——そうですね。ディックはとても優しい子だというのがよく判ります」

涙を拭ってそう呟いた。ディックは山賊だけど、とても心優しい獣人だと言う事をきちんと伝えたいという願いだけでそう言葉を漏らした。

ディックはその言葉に「ありがとう」と言ってヘレナの頭から手をどかした。

「クレアは、喋れないのにどうやって気持ちを伝えるの？」とディックは言った。

ヘレナは少々の間を置いてから口を開く。

「この子は、そういうのが苦手です」

ヘレナには、クレアが何故言葉を喋れなくなったを詳しく知らない。ただ、引き金になった出来事だけは知っていた。

ヘレナも悲しみに打ちのめされた出来事。

「勿体無い。可愛いのにね」とディックは深く聞かなかった。

「でも、ディックとは仲良くなれそうです」

そう言ってヘレナはディックの顔を見上げて笑みを零す。クレアは小さく寝息を立て始めた。

「そう？」

「ええ」

「お姉ちゃんは、獣人怖くない？」

ディックの不思議そうな声に、昨日までのヘレナ自身を思い浮かべる。

「最初はとても、怖かったですよ」

暗闇に溶け込むようにそこに居たのは一頭の熊。誰だって初対面でそのような出会い方をすれば怖がるのも無理もない。

「でも、こうして会話が出来てディックを知る事が出来たので、今はあまり怖くありません」

だからこそ、その後——今、この時まで触れ合えたからこそ、その言葉を素直に言う事が出来たヘレナだった。

「聖都教を信仰してないの？」

聖都教では獣人を悪魔としているので、民衆の多くは恐怖の対象だった。獣ですら狼などを悪魔として、異形が化けているものとして見ている節がある。だからこそ、ディックにはここまで会話できた事に多少の戸惑いを覚えてそう問い掛けた。

他の山賊はかなり早くに慣れた人が多かったが、ヘレナとクレアは彼らよりもずっと早かったとディックは思っていた。

「正直言うと、あまり……父も母も、熱心な信仰者ではなかったのです」

ヘレナそう言って少し顔を俯けた。言いにくい事があるようだったが、ディックは深く問い掛ける事もしなかった。ただ鼻が機敏に動かし

「ふうん……あつ、帰って来た」とヘレナに告げた。

「えっ？」

「ヴァルトとヴォルフ……ポー」とディックは頭を挙げながら言った。

「判るのですか？」

「匂い」

「匂いで……」とヘレナは感心したように呟く。

思えば、獣人も獣だった事をヘレナは改めて実感させられていた。ディックは鼻を動かしているの、本当に匂いで判断している事が窺い知れた。

「獣の鼻は人の何倍も良いんだって。だから、風下にいるのが嫌だ」

「どうしてですか？」

ヘレナの問い掛けにディックは少し言い難そうに爪で頬のあたりを掻いた。

「嫌な匂いがするから。時折、ここが大きくなるから嫌なんだ。病気かもしれない」

そう言って、ディックがクレアの邪魔にならない左腕で自分の下腹部を触る仕草を見せるとヘレナがその匂いが何なのか察すると、思わず顔を赤らめる。

「ヴァルト」とディックは言った。

戻ってきたというヴァルトを見つけるためにヘレナは慌てて視線を右往左往させると、本当に、ヴァルト達を見つける事が出来た。

「よう、ディック帰ったぞ。ってえ、何やってるんだ？」

ヴァルトは手を挙げながら近寄ってくるとヘレナの顔が赤い事に気付く。するとディックが「おかえり。僕、病気かもしれない」と呟く。

その言葉に、心配そうにヴァルトが近づいてディックの様子を伺い始める。ヴォルフとボーも同じように近寄って中腰になるとクレアがディックを背もたれに眠っている姿に微笑を浮かべてしまう。

ヴァルトはとにかくディックに何処が具体的に悪いかを聞き始めると

「ここ」とディックは下腹部を左手で指し示す。

「ほう、これはこれは」

ヴォルフが興味深そうに呟けば

「ちょ、ちょっと！」とボーが驚きの声を挙げる。

その声に、クレアが目を覚まし目を擦ると慌ててヘレナがディックの膝上から降ろして、後ろを向いてクレアを抱きしめた。未だに顔が赤い。

「.....しまった。ディックにはそういうの教えてなかったな！」

ヴァルトは暫く呆けていたが、そう叫んだ。思えば、ディックを育て始めてから男としての教育を何一つしていなかったのだった。その言葉に、ヴォルフも苦笑いを浮かべて口を開いた。

「まあ、教えようとしても教えられんからな。こういうのは実技あつての代物だ」

「雌熊捕獲しろってか？ 無茶言うな」

ヴォルフの軽口にヴァルトは呆れながらもそう言い放つ。

「と、取り合えず、ディック。これは病気じゃないから安心して。むしろ正常.....？」

ボーが取り合えず、病気ではないとディックに説明するとディックは安心したように「良かった」と呟いた。

だが、ヴァルトは良からぬ事を考えたのか

「おい、まさか.....」と真顔でヘレナを見つめる。

その視線に気付いて慌ててヘレナは声を荒げる。

「だ、あ、大丈夫です!!」

「そうか、危うく傷物にされちゃったかと心配したぜ」

ヴァルトは安堵のため息を吐き出し、他の二人は苦笑いを浮かべるしかない。

「意外に、優しいんですね。頭って」

一先ず、落ち着くとポーはそう呟いてヴァルトの意外な一面を見られたと言わんばかりに朗らかな表情を浮かべている。

「ん？ ポー。ヴァルトは人質としての価値で言っただけだぞ」

対してヴォルフは何をそんな顔をしているんだとばかりにそう言葉を並べた。そして、ヴァルトも

「傷物で帰してみろよ……俺ら、逃げるしかないぜ？」と呟いて肩を落とす。

その言葉に、呆れながらもポーは「なるほど」と納得してしまった。

「確かに、血眼になって探しそうですよね。可愛い娘さんですし」

「噂によれば、本当溺愛してたらしいじゃねえか」

ヴァルトが面倒そうに頭を掻き耑った。溺愛していた双子姫を誘拐されて平静で居られるはずも無い。なのに、町では領主は病に伏せているだけという噂に司教が領主城にて集会を開くという事で持ち切りだった。それが面倒な原因だったので、余計にヴァルトの気は重い

「討伐隊は必至だな」

ヴォルフはそう言って動き出す。ヴァルトがザックスから聞いた情報によれば司教が集会を催すという事と、昨夜一台の馬車がニールの町を飛び出し、衛兵や騎士が走り回っているという事だった。

そのポーは心配そうに顔を顰(ひそ)めて

「ですよね……っと。ダンさんとユーリはまだですか」と呟いた。

「ダンは、心配無いさ」

ヴォルフはそう付けたし

「ユーリは既に捕まっていないか不安すぎるぞ」とヴァルトが軽口を叩いた。

案外真剣に捕まっていないかを心配しているようにも見えて、ポーは嫌な不安を感じざるを得なかった。そんな不安を抱くポーを余所目にヴァルトもヴォルフと同じく行動を始める。

「とにかく、撤収準備だ」

「はい」

その言葉に、ポーも気持ちを切り替えて作業を進める。と言っても、物資をある程度口バ車に乗せるだけである。

「ディックは、食糧を運んでくれ馬を買って来た。食うなよ」

ヴァルトは今回、足が速い必要があると感じたのか馬を買ってきていた。それを既に口バ車の方へ運んであるので後はディックに持てるだけの物資を持たせて先行させることにしたのである。

「判った」

「あの！」

素早く動いていく山賊にヘレナは声を挙げた。

ヘレナとクリアをヴァルトは一瞥する事もせずに身体を動かし喋る。

「話は後だぜ。嬢ちゃん達。町に騎士が居なかった。司教が集会を開いていた。逃げる理由には十分さ」

そう言って、ヴァルトは手を差し出しヘレナは戸惑う。本当に、この男達を信じて良いのかと今、改めて逡巡してしまう。だが、クレアは手を取らずに立ち上がった。

その光景に、ヴァルトは口端を釣り上げて笑みを浮かべると手を引っ込めた。ヘレナもクレアと同様に立ち上がると山賊と行動を共にすると決意する。

今、町に戻った所でいずれまた脅威に晒される。それに、父の事を考えると不用意に帰るよりは情報をしっかりと把握して事に及んだ方が良いと思い至ったのだ。そうすれば、父の命を救う事も出来るかもしれない。ヘレナとて、今回の騒動を起こした何者かが父をそのままにしておくはずはないと思っている。だからこそ、自分自身に価値が生まれるだろうと悟った。

ヴァルトも決意を察したのかもう何も言わず身近にある道具を身体に装着する。町に持っていけなかった長めの刀から布を抱えると馬車の方へ歩き出す。

その時だった。ディックの鼻が動かし後ろを振り向いて叫ぶ。

「ヴァルト！」

その叫び声を聞いてからの山賊の行動は速かった。

誰もがディックの鼻を信頼しているからこそ、その慌てた声の意味を即座に理解していた。

「ちい、来ちまったか！ ディックはそのまま逃げろ！ お前の鼻なら俺らを見つけられるだろ!!」

ヴァルトは直ぐに指示を飛ばすとディックはその言葉に従って先行して森に消え、ポーは弓を握り、ヴォルフはクレアを抱えた。

「きゃあ!!」

ヴァルトもヘレナを抱えると走り出す。突然の事で敵わないながらも抵抗するヘレナを気にかけるながらも走り続ける。

「わりいな！ おて手繋いで逃避行なんて生ぬるい事できねえからよ！」

その言葉に、ヘレナは理解した。ディックが叫んだという事は何かしらが近づいてきていたという事で、逃げているのだからそれは敵と思われる人々の臭いを嗅ぎ付けたという事になる。

「ポー先行して道案内しろ！」

「はい！」

ポーは元気良い返事を返す。

「ヴォルフ後ろ頼むぜ」

「任せろ」

ヴォルフはヴァルトの背中を護るように追走する。

遠くで犬の吼える声が響くと森は一気に煩くなっていく。ヴァルトは吼える声に舌打ちを我慢しながら走る。

双子姫の臭いを追ってここを探し当てたのだろう。ヴァルトはそれを考えて、ディックや獣の臭いを双子姫に身に付けさせたりしていたのだが、上手くいかなかった。

「居たぞ！」

「終え終え！」

やがて、討伐隊であろう男達の叫び声が挙がる。

「不味いな。犬連れの衛兵に騎馬の騎士だ。分が悪いぞ」

ヴォルフが焦りながらも喋り、後ろを振り向きながらも走る。視線の先から犬が走ってくるのが見えた。

「道理で見つかるのが早いわけだな！」

「ダメだ。犬に回り込まれた!!」

ボーの叫び声にヴァルトは右に方向を変えて尚も走り続ける。

「くっそ、数が多いってか！」

「ディック居た方が良かったんじゃないか？」

確かにヴォルフの言う事は一理あるが、ヴァルトはそれを否定する。

「何言ってやがる。アイツの正体バレたら俺らは食っていけねえよ！」

ディックが獣人だと知られば、即座に聖都教を通じて全国に手配書が配られる事になる。悪魔を使役する極悪なる山賊一味。そうなれば、流浪の旅が単なる逃避行になってしまう。商人襲って生活費を稼ぐのも難しいだろう。

そんな考えをしていたが、ヴァルトの回りに犬が群がり吠え立てる。ボーが犬を矢で射抜くと包囲に穴が開いてそこからまた抜け出す。それでも、犬の足止めによって討伐隊は徐々に包囲を完成させていくと、ヴァルトは逃げ切る事は不可能だと悟った。

「潮時か……ボー、寄れ」

「はい」

その言葉に、ボーも素直に従う。願うならば、ダンやユーリが無事でいてくれる事だけを祈るばかりだった。

ヴァルトはヘレナを降ろすと羽交い絞めにして短剣を彼女の喉元へ向ける。ヘレナは突然の行動に息を詰まらせるも、決してきつく拘束しているわけではなかったので抵抗すれば逃げ出せようでもあったが、不用意に動く事はしなかった。

ヴォルフもクレアを同じように人質としているが、クレアはいつものように感情を面に出さず従順であった。ボーは二人に挟まれるような形になって成り行きを黙って見つめている。

「それ以上近づくと、二人の嬢ちゃんの命はないぜ？」

ヴァルトは近づいてくる討伐隊の面々に向けて凄むように低い声を捻り出す。その言葉と光景に討伐隊も包囲こそすれど不用意に動くは出来ずに立ち止まる。すると、一団から一人の男が姿を見せた。

「ヘレナ様、クレア様！ ご無事ですか！」

その男は、鎖帷子の甲冑を纏い大声を挙げていた。ヘレナはその男に見覚えがあった。長年仕えてきた騎士団長として町と領主城を護ってきた男。

「ダニエル!! 待って、この人たちは私を助けてくれたの!!」

ヘレナはダニエルに向かって大声で叫んだ。その言葉に、ダニエルは眉間に皺を寄せて、逡巡するものの

「……包囲しろ！」とだけ指示を飛ばす。

ヴァルトとしては、即座に射掛けられないだけ事態は最悪ではないと思っていた。双子姫ごと殺しに来たわけではない事から、ヴァルトは少なくとも事態を知らない人々であると考えた。な

らば、交渉の余地は十分に残されている。

「ダニエル！」

だが、ヘレナはそんなヴァルトの思惑を知らずに声を枯らす勢いで騎士団長の名を呼んだ。思わず、視線をヘレナに向けそうになるヴァルトであったがそこは堪えてみせる。

「ご安心を、用心の為に行ったまでの事です」

ダニエルは、鎮痛な面持ちながらもそうヘレナに告げるように口を開いた。その言葉に、ヴォルフとボーは確信する。これはヴァルトもきっと思っているだろうが、交渉の余地は十分にあると。

それでも、山賊が不利なのは変わらない。人質としての価値があるので不用意に双子姫を殺す事出来ないし、ヴァルトはするつもりも無いが、それでもダニエルという男次第でここで死ぬか後で死ぬか。そして僅かな光として生き延びられるかに絞られる事となる。

「訳を聞かせてくれ!! 山賊よ」

だが、ヴァルトの予想に反してダニエルは厚意的だった。その事は僥倖で、ボーは僅かな安堵を滲ませるが、ヴァルトとヴォルフは気を許すつもりはない。この手は、賊徒に良く使われる——安心して人質を手放すと殺しに掛かる。

話の流れがあまりにも滑らかに進むので二人はそのことを考慮に入れた。元々、人質を放すつもりはないのだが、ニールの町で仕入れた情報から、双子姫も殺して全てを隠蔽する輩の可能性を浮かび上がらせていたヴァルトは、気を抜けるはずも無かった。

「……判ったよ。だが、こっちも用心のためだぜ？」

それでも、話を進める。ヘレナとクレアに刃を向けたままの話し合いを要求するヴァルトに「致し方あるまい……」とダニエルは渋々ながら了承した。

その言葉を聞いて、ヴァルトはゆっくりと語り始めた。

「俺達は、昨日の夜。そうだな、月が出てすぐだった。街道で馬車が賊に襲われていたのを助けた」

ヴァルトの嘘を付く事もせずに、淡々とダニエルに向けて言葉を並べて立てて行くかのように丁寧かつゆったりと喋っていく。

「襲撃者は誰かわからねえ。だが、馬車に乗っていたのは奴隷商人だった。で、荷物はこのお二人さんだったってわけよ」

「……信じると？」

ダニエルはそう聞き返した。

「そうしてもらわねえと、この状況はかわらねえぜ？」

ヴァルトは不敵に笑う。その顔を見てダニエルの眉間に皺が刻まれていく。

「ダニエル！ 本当なのよ、信じて」

そのやり取りに、ヘレナが声を出す。思わぬ援護に討伐隊の面々が多少動揺したように、いの顔を見合わせるも、ダニエルはヴァルトから視線を外す事はしない。互いに鋭い得物を突き立てあっているほど剣呑な雰囲気は辺りに充満していく。

「……さあ、どうする？ ここで俺らを殺すか？ 姫も一緒に死ぬぜ」

誰もが凄むように視線を鋭くさせた。

「それにだ」

ヴォルフが声を挙げるとヴァルトは押し黙る。

「俺達の仲間が何かよからぬ事をするかもしれないな。ここに居ない俺達の仲間が」

「なんだと……」

その言葉に、ダニエルは明らかに動揺する。それを見て、ヴォルフは追い討ちを掛けるかのように言葉を続けた。

「何人居たかな……二十人だったかな？ 二十五人だったかな？」

それに便乗してヴァルトも笑みを浮かべて喋り出す。

「おいおい。良いのか？ こんな事をしている内に、町はどうなっているかな？」

ダニエルは苦々しいとばかりに顔を歪ませる。

「アンタら、騎士だろ？ なら、姫さん攫った奴らの目星くらい付くだろう？ 領主が居なくなって、得する奴は誰だよ」

ヴァルトは可能性を投じる。領主城と町を護る立場の騎士や衛兵は罪人を探し、拘束するという責務が付き纏う。今回の一件でもそれは変わらない。犯人は誰だ、何故攫った。その可能性の中に潜む一つをダニエルに向かって投げつけた。

ダニエルの顔は感情を飲み込んでいく。激情に焦げるような空気が一気に冷めて行くような錯覚に陥るほどダニエルの表情は消えていった。

風が木々を揺らす。そのざわめきだけが世界を包み込む。誰一人言葉を発する事はしなかった長い間が終わりを告げる。口を開いたのはダニエルだった。

「……まさか。司教様だということか。あのカスパル司教様は聖都教の司教様だぞ」

空気の変化を敏感に感じ取るのはヴァルトとヴォルフだった。

「領主が病気で伏せっちゃった。そんな噂で持ち切りだったじゃねえか」

「お前さんは見たのか？ 領主様を」

変化に敏感で居られたのは賊徒として生きてきた人生故か。ヴァルトは少しでも不穏な動きをダニエルが見せたら見せしめにヘレナを殺さないまでも傷つける覚悟を決めた。それほどに、違和感が漂い始めた。

「そうですよ。司教が臨時で統治を行うって変じゃないですか？ そこに疑問を持たなかったのですか」

ボーの言葉が宙に浮く。

「……我々には、そのような権限は無い。領主の命により任務を実行するだけだ。たとえ、今回の指令が司教からだとしても、司教様はグーテンベルク家の書状で、我らを動かしている」

苦渋に満ちた表情も浮かんではこない。しかし、ヘレナは心配そうにダニエルを見つめるだけでその名を呟く事しか出来ない。

「信じてもいいのだな。その言葉に二言はないな!？」

突然の問い掛け。逡巡するも、ヴァルトはその問い掛けに答える。それしか、今残されている道はなかった。

「俺らは悪党よ？ 嘘もつけば騙しもする。だがよ」

威勢を張り上げる。堂々と悪党らしく。ヴァルトは口を釣り上げて笑みを作り出す。

「悪党には悪党の矜持があんのよ。この場で嘘なんか吐くかよ」

その言葉に、ヴォルフとボーは微かに笑みを浮かべてしまい、ヘレナとクレアは首を傾げた。先ほど、ヴァルトとヴォルフは嘘を吐いた。大胆不敵な張ったりとでも呼べばいいのか。はたまた賊徒の言葉を信じる人が悪いのか。

「ヘレナ様……信じてもいいのですね？」

「——はい」

ダニエルの問い掛けに、ヘレナははっきりと肯定した。

「構えを解け」とダニエルは言った。

包囲は紐解かれ、それを確認するとヴァルトとヴォルフは双子姫を解放する。だが、ヘレナもクレアも、山賊から離れる事は無かった。その姿に、ダニエルは眉を顰めた。

「お前達も共に来い。証言してもらわねばならない。ヘレナ様の言葉が正しければ、ラインハルト様は……いや、まだ幽閉されているかもしれない」

「急ぎましょう!! ダニエル」とヘレナは言った。

「御意」とダニエルは言った。

「山賊！ 先ほどの仲間の件。本当か？」

その問い掛けに、ヴァルトは初めて聞いた話と言わんばかりに身を竦めて見せた。

「さて、何の事やら」

「くっ……まあ、良い。お前達も馬車に乗れ。今は一刻の猶予も惜しい」とダニエルは言った。

「此方です。ヘレナ様、クレア様」

山賊の前を双子姫が歩き、その後ろからぴったりとくっ付きながら山賊は森を下る。その周りには衛兵が手槍を握りながら歩幅を双子姫に合わせて歩く。先導は騎士団が行い、ダニエルは双子姫の前を歩いていく。

ヴァルト達は従順に従っていくが、それはそうする他に道が残されていないからだった。

やがて、街道まで降り立つと隊列を作った馬車が二台見える。前後には騎士が騎乗した状態で待っていた。

「お前達は後ろだ。犬と同席だが文句は言うな」

嫌味にしか聞こえないダニエルの言葉に、ヴァルトは適当に相槌を打つが、その視線は鋭い。馬車が二台。前車は恐らく、双子姫を乗せる馬車なのが判るほどに高級だったが後車は明らかに草臥れていた。

「待ってくれよ」とヴァルトは声を挙げた。

ヘレナとクレアを誘導しようとしていたダニエルは嫌そうに顔をヴァルトに向けるとヴァルトは双子姫のそばに寄る。

「お姫様のどちらかを俺達の馬車に乗せてくれよ」とヴァルトは言った。

その提案に、ダニエルは怒気を含ませた。

「何を言うかと思えば、そのような危険を冒せるはずもないだろ」

その挙動は、至極自然に見えたはずだがヴォルフは眉を顰める。

「——おかしいな」と小さく呟き、ポーはその呟きをしっかり聞いていた。

ヘレナは戸惑っているようであったが、ダニエルに腕を掴まれて馬車へ乗るように急かされている。

「早く乗れ!!」

ダニエルの怒鳴り声に、思わずヘレナは竦みあがった。

「待ってくれ!」とヴァルトは声を張り上げた。

その一瞬の剣呑に、騎士も衛兵もダニエルとヴァルトに視線が固定される。凶るかのようにヴォルフは後車を覆っている布に触れた。呆気無く触れられて落ちる布切れに、ヴォルフは拍子抜けをするよりも絶望を顔に貼り付けていた。

「馬車に触るな!」

騎士の叫び声と共にポーの表情は一変した。姿を見せたのは木材で作り上げた牢屋で、その馬車は罪人を運ぶ牢屋馬車そのものだった。

「——逃げろ!!」とヴォルフは叫ぶ。

その言葉に、ヴァルトとヴォルフの目が合った。互いに意図する事を悟りあうかのように、一瞬ではあったが確かに二人は意思を共有していた。

「か、頭。ヴォル爺!!」

ポーが焦りの叫び声を挙げる。その視線の先には、手槍を構える衛兵や剣を抜刀した騎士の姿見えている。

「殺せ!」とダニエルは言い放つ。

「一人は絶対に生かせ!!」

ヴァルトは手槍を避けて短剣を投擲し、衛兵を殺す。その隙に、ヴォルフはポーを担ぎ上げる

と馬と車の隙間から反対側を目指して思い切りポーを投げ飛ばした。

「うわあああ!!」

「ヴォルフ……」とヴァルトは呟く。

「死ぬんじゃねえぞ」

襲い掛かる衛兵を蹴り飛ばして馬車の下から反対側に抜けようと動くヴァルトに、荷台から反対側に移動するヴォルフ。

上手く反対に抜けるが、即座に騎士が斬りかかって来る。それを馬車の車輪を盾に避けると短剣を抜き去り襲い掛かる。ヴォルフは荷台で騎士と戦っているが反対側に降り立ち、ヴァルトと背中を合わせた。

その瞬間、ヴォルフに矢が突き刺さった。ヴォルフは痛みに顔を歪めながらも踏みとどまる。

「ヴォル——!!」とヴァルトの叫び声が轟いた。

ヴァルトの視界には弓を構える騎士の姿が見えていた。咄嗟に、身をよじってみたが、自身も肩に矢を貰ってしまった。

痛みを伴っても、ヴァルトは地に蹲るわけには行かなかった。

即座に騎士の刃と衛兵の手槍が襲い掛かってくる。

避ける事は出来なかった。だが、ヴァルトの身体は動いていくのは、自分の意志ではなく、後ろにいるヴォルフによるものだった。

ヴォルフはヴァルトを自分の背中に回りこませるように引っ張った。

歯を食いしばって、必死にヴァルトを守るように立ち回り、自らがその刃の前に立った。

「ヴォル、死ぬな」とヴァルトは言った。

決して取り乱したりはしなかった。正気を保ったまま、激痛に耐え忍びながら、ヴァルトはそう呟いて、刃を全身で受け止めたヴァルトの背中を見つめていた。

「川沿いに一人逃げたぞ！ 追え！」

騎士の叫び声はポーを追う指示だった。

「……ヴォルフ。何で」とヴァルトが呟く。

崩れ落ちるヴォルフを見つめつつも、迫る刃を短剣で防ぎきる。その背後からはさらに騎士が斬りかかって来たが、今のヴァルトは騎士からの剣を受け切るのが精一杯で、動く事が出来ない。ヴァルトも気付いていなかった。

「一人は生かせと言っているだろ!!」

その言葉と共に、ヴァルトは右肩を斬り付けられて地に伏せた。

自分の身体から流れ出る真っ赤な血を見つめながら、ヴァルトは苦悶に顔を歪めた。

「無駄死に、なんかじゃねえぞ」

ヴァルトは薄れいく意識の中でそう呟いた。

そのヴァルトを騎士二人が乱雑に担ぎ上げると、牢屋馬車へ放り込む。

「ダニエル、これは一体!!」と馬車に押し込まれていくヘレナは叫ぶ。

「言葉で説明致しますと、貴女方はこれより傀儡として俺の妻となっていただきます」

「……貴方、まさか」

その言葉で、ヘレナは全てを悟り、クレアを抱き締める。全ては仕組まれていたという絶望に

打ちのめされて顔から血の気が引いていく。

その姿に万遍の笑みを浮かべて、ダニエルはヘレナに向かって口を開いた。

「妻はお嫌でしたか。まあ、奴隷にでもなってもらうのは決まっている事だがな」

ユーリという山賊が居る。ヴァルトが頭をしている山賊団で一番遅く入団——二年前、十四歳だったユーリはなし崩し的にヴァルト達と行動を共にするようになった。

家出してきたと告げて強引についてくるユーリをヴァルトは無視し続けた。けれども、底抜けに明るく馬鹿をする事を本能そのままに行う男はへこたれなかった。

いつしか、会話に混じり、賊の家業を手伝い、いつしか仲間になっていた。

そうヴァルト達に評される一方で、仕事や大事な局面では、冷静さを失う事無く遂行する精神力を持っていた。

始めに討伐隊が編成されている事に気付いたのはそのユーリだった。領主城で行われていた集会の内容に聞き入った彼の顔は引き締められていた。それでも、即座に戻る事が叶わなかったのは、衛兵や騎士がそこら中を跋扈していたからに他ならない。

ユーリは仲間に出会う事も無く、民衆に紛れつつ静かにねぐらを目指した。

彼の目の前で、討伐隊が勢い良く城門から外へ走り去る姿を見せたが、見届ける事しか出来なかった。

「おいおいおい。不味い事になったな」

ユーリはねぐらから離れた森の中で、街道を練り歩く討伐隊を確認しながら声を漏らした。

「そうだな」

討伐隊が出立した後を追うかのように、ユーリは町を抜け出すことに成功していた。

今、ユーリの隣にはダンが静かに息を潜めている。いつもと変わらない空気にユーリは平静を保つ事が出来ていた。

ねぐらへ向かう途中にユーリはダンと合流していた。

「どうするよ。これ、三十人くらいか？ 無理無理、助けられないよ。三人だろ？」

騎馬に跨る騎士に衛兵達が隊列を組み、その後ろからは恐らく馬車が先導される形で二人の目の前を通り過ぎる。

二人は、静かに待ち続けた。助ける機会があり、可能性があるかを見極めるために。

「牢屋馬車なら不可能だぞ」とダンは呟く。

牢屋では、助け出すにしても道具が必要になってくる。鉄材で作られた牢屋では鍵を使うくらいしか助け出す手は残されていない。

「来た」とユーリは言った。

視界に馬車が見てくるのを確認する二人。その視線の先では高級馬車が街道を町に向けて走っていく姿を見る事が出来た。その後ろには牢屋馬車の姿が見えてくるとユーリは舌打ちをして、ダンは僅かに眉間へ皺を作り上げる。

「おっ……って。おいおい！ 頭だけじゃないか。他は何処行ったんだよ」

ユーリの激情が声に含まれる。視線の先に見える牢屋馬車にはヴァルトがうつ伏せに倒れているのが見えるだけだった。出血しているようだが、まだ生きている事を二人は願うかのように見入る。

そして、あるものを見つけたのはダンだった。

「——ヴォルフ」とダンは無言で呟いた。

目は見開かれ、顔が強張っていた。

「何処よ」とユーリが探す。

「おい、何の、何の冗談だよ」

ユーリの視線は長槍の穂先に向けられた。

「野郎——!!」

「落ち着け」とダンはユーリを押さえつける。

そこに、ヴォルフは居た。瞼を閉じて、口から血を滴らせて、首に布が巻かれ血が零れ落ちないように縄で巻き付けられて——ヴォルフの頭部は括りつけられていた。

「出て行ってどうなる。考える。どうやれば、その激情を殺した奴らにぶつけられるかを」

低かった。それでいてか細く搾り出したダンの懇願にも取れる声に、ユーリは自分の激情を治めたようだった。

握り締めるダンの手を振り解く事もせず、ユーリは身を再び屈めた。身体の震えが収まりはしていないが、一先ず落ち着いたように見えた。

「——ごめん」とユーリは呟き、唇を噛み締めて血を流した。

「同じだからな」

ダンはその行為を咎めることはせずに、じっと前を見つめ続ける。

ダンのその言葉に、ユーリは大きくも静かに頷いた。

ユーリは赤く燃え盛るよりも熱く、身を焦がしかねない炎を内に秘めたダンという男を見つめていた。

気付けば鳥肌が立っていた。それが何を意味するのかユーリには判らないが、内からやる気が漲ってくるのを感じられていた。

「ディックか」とダンは後ろを見る事もせずに呟いた。

「うん」

ディックの声は暗い。

「ダニエルっていう騎士団長が仕組んだ」

「そうか」

「ありがとよ。ディック」とダンとユーリは言った。

「後、ポーは生きてるよ」

その言葉に、ユーリは安堵のため息を漏らした。やはり、生きてると死んでいるのでは前者の報告を聞くのは嬉しいものだった。

「そうか。良かった」

ダンは本当に嬉しそうに、どもりながらも声を漏らした。その姿をユーリは珍しく呆れながらも視線を戻す。既に隊列は右から左へ過ぎ去った後だった。

「ポー。良く生きてたな……」

「二人が逃がしたんだよ」

ユーリの呟きに、ディックは堅い声で言い放つとユーリは振り返ってディックの傍に寄った。

「そっか。お前、見てたのか」

「出て行ったら怒られるし、悲しい顔するから」

「——良くやった。褒めてやるよ」とディックの身体を叩きながら、ユーリは優しく微笑んだ。

「うん、ありがとう」

その言葉に、ディックも落ち着いたように声を出した。

「で、ポーは何処に？」

「食糧積んで走らせた馬車で寝てる」

その言葉を聞くとユーリはダンの背中を見つめる。ダンもその視線に気付いて後ろを振り向き、互いに視線を交じり合わせる。

「ダン。今からアンタが一時的に頭だぜ？」

ユーリの言葉に、ディックは何も言わずダンも暫くの間、思案するかのように動く事は無い。だが、ダンの頭の中で今後の計画が組みあがったようで口を開き始める。

「……俺は、今からあの集団に張り付く。ディックはポーに説明して町に変装させて潜入させる。合流場所はいつもの場所」

矢継ぎ早に繰り出される言葉の数々をユーリとディックは黙って聞いた。

「判った。僕は町の近くで隠れてる。いつでも呼んで」

「ああ」とディックの言葉にダンは静かに頷いた。

ディックはその指示を聞くと森の中へ消えていった。

「ユーリ。お前は町の地形を把握しろ。特に、俺達が今まで寄り付かなかった領主城近くだ」

「判った……やっぱ処刑だよな」

ユーリの顔が渋る。

領主城区内への侵入は一度成功してはいるが、それは警戒される前で民衆へ向けての集会が催されていたから簡単に入れただけだった。

今度はそう上手く行くとは考えられないユーリだった。ならば、町の中で領主城の地形を把握しなければならない。ユーリはせめて広場の簡単な見取りだけでも判れば好転すると考えていた。

「だからこそ、助けられる機会がある。娘二人を誘拐したのは町の権力を牛耳るためと考える。そしてその罪を俺達に全て被せた」

だからこそヴァルトは殺されなかったとダンは考えた。つまり処刑して見せしめにするという事。ヴァルトが叫ぼうがそれは賊の戯言でしかない。所詮、山賊は悪党で民衆は悪党の言葉を簡単に信用するかもしれないという思いをダンが持つ事は無かった。

騎士団長の言葉から領主の娘を攫ったと煽られてしまえば、民衆は容易に信用する事だろう。

「でも、何で双子姫を生かしたの？ あそこで皆殺した方が上手く収まりそうなのに」

「今回の首謀者は、仮にも騎士団長だ。町の象徴でもあった領主、延いてはその血筋を絶やすとは考えにくい」

その言葉にユーリは納得が言ったかのように右手をきつく握り締めた。

「賊捕まえて、お姫様を助け出した英雄の凱旋ってか？」とユーリが感情を消し切れずに言い

放つ。

「沸く民衆を目の前に、司教の悪行をさらけ出し処断」とダンは話を続けていく。

「さらに人気と信頼は挙がり、最後には双子のどちらかを——いや、喋れない妹を妻にでも迎えれば？」

「全ては自分の物となるってか」ダンの言葉にユーリはそう言葉を吐き捨てた。

騎士団長とは言えば町の警備を司る権力を持つ立場で、独断で捜査も行える権限を持っている。そのような立場の人間が賊を捕まえ、双子姫を助けて凱旋し声高々に司教が山賊と結託し全てを仕組んだと叫ぶ。

民衆はそれを信じる。英雄に酔いしれ、凱旋に沸く。

「騎士団長といえば、長年ニールの町を護ってきた野郎って話だろ。疑う奴なんか絶対居ないよな」

ダニエルは二十年間、領主であるラインハルト・グーテンベルクに仕えてきた重鎮と呼べるほどの人物だった。

「何にしても、頭が処刑されれば次は俺達だ。領主の娘を攫い、下手をすれば領主殺しの罪まで着せられる事になりかねない」

「うっへ。それは勘弁だ」

ダンの言葉に、ユーリは心底勘弁願いたいとばかりに顔を顰めて喋った。

「だからこそ、ヴァルトを助ける。そして姫のどちらかも」

「証言させようってか？ そう上手くいく？」

ユーリの言葉に、ダンはため息を一つ吐き出した。

「行かせるさ。ポーを傷つけた罪は重い。勿論、ヴォルフを殺した事もな」とダンと言った。

ユーリはその言葉に、頼もしさと可笑しさ、そしてダンらしさを感じて苦笑いを浮かべる。

「普通、死んだ人の名前を先に出さない？ まあ、ダンらしいけど優先順位が」

「な、何を言っている。俺はポーの事など」とダンは焦りながらも反論した。

それを適当に「はいはい」と、あしらいつつもユーリは持ち前の明るい声を出した。空気を変えて、色々な思いを切り替えるように。

「よし。取り合えず動く！ 万事上手くいけば、敵討ちもいけるから、張り切っちゃおうぞ！」

「ユーリ」ダンも動くユーリを呼び止める。

「お、何よ？」

ダンの言葉に、ユーリは振り返って聞き返す。

「死ぬなよ」

「……心配されるならやっぱ美女が良いわ。男は駄目」

そこにはいつものユーリといつものダンが居た。ユーリは口を釣り上げて万遍の笑みを浮かべ、ダンは控えめながら鼻で笑い、互いに行動を始めた。

ポーは両親の顔すらも知らない。ただ、浮浪者として収監された聖都教が主導する矯正院で暮

らしていたという思い出したくもない記憶だけが残っていた。孤児院とは違うその施設では、怠惰であるとされる職の無い若者や子供を集めて労働を教え、働く喜びを覚えさせるという建前で運営されていた。

蓋を開ければ、そこは地獄。

ボーは一日中、滑車を回した。そうしなければ、四方を壁に囲まれた部屋の中に水が溜まり、溺れ死んでしまう。だから、ボーはずっと労働という名目上、滑車を動かして排水作業をし続けた。何の意味もないその作業を延々と毎日繰り返し、食事と寝床を与えられた。

矯正院は、働く事を強制する場所で、教育する場所ではなかった。

日々、人の往来はあるものの、子供を見ては奴隷商人が買っていく。ボーは連れて行かれた子供達はどうなったかを知らない。ただ、教師と自らを自称する大人達からは貴族の使用人として召抱えられていった。仕事が見つかった。と言って残った者を鼓舞し続けた。

ボーはそんな事を一切信じはしなかった。

「ボー」

ディックの声に、ボーは身じろぎ一つしなかった。膝を抱えて、ロバと一緒に荷台に乗せられて、ただ座っていた。

「ボー、ヴァルトを助け出すよ」

「ダンが指揮を執ってる」とディックは立て続けに言葉を並べていく。

ボーは膝に顔をうずめるようにしていた。

「ヴォルフが殺された」

ボーは何故、自分が外に出られたのかを良く覚えていない。だが、気付けば外にいて、矯正院にいた子供達と路上生活を始めざるをえなかった。

「うん」

ボーという名は本名ではない。だが、誰に付けられたかもボーは覚えていなかった。ただ、ボーという名を嫌っている訳ではなく、初めての名前だから大切にしていた。

いつもボーっとしている。だから、ボーと呼ばれるようになっていた。矯正院では二百五十六番だったボーは、初めて名前を貰い、盗人や物乞いをしながら生きるようになった。

「見てた？」

それは、ある日の事だった。ボーは短剣を盗んだが、短剣を持っていた男の仲間に捕まえられてしまう。それが十年前の出会い。

「うん」

「どうして、助けてくれなかったの？」

ボーは顔を挙げて、ディックを見つめた。真っ赤な瞳はまだ揺らめいている。怒り、悲しみ、動揺。様々な思いを混ぜ込んでいる言葉だった。

「ヴァルトもヴォルフも出て来て助ける。なんて思ってなかった」

「——そうだね」とボーは呟いて前を見据えた。布の壁が視界一杯に広がっている。

「ディックにとって、ヴァルトや僕達はどんな存在？」

ボーは先ほどより落ち着いたようで、ディックに語りかけた。

「家族だよ。大切な」

「同じだね」

ポーは笑った。

「でも、僕にとってヴォルフが全てだったんだよ」

涙が零れ落ちる。拭う事もせず、ただ流れる。

「十年前に出会ってから、ヴォルフは僕の父さんだった」

ポーは思い出す。あの時のやり取りを——あの時のヴォルフの姿を。

「うん」

「許せない」

「許せないよ」

二度、呟かれたポーの言葉には悲しみ以上に憤怒が込められている。語尾が荒々しい。

ポーは顔を挙げる。ディックを改めて見つめるその表情に、先ほどの弱々しい姿は消えていた

。

「ダンは何んて？」

「変装して情報を探る。いつもの場所で」

「きっと、町は厳戒態勢だね」

「うん」

ディックは頷いて、荷台から離れようとする。いつでも、言われた指示通りに動けるように、それでいて町に近く、町人には見つからない場所で息を潜める。ディックにもやるべき事はあった。

「ありがとう、ディック」

ポーはディックの後ろ姿にそう声を掛けて腰を挙げた。そして、荷台に積まれている荷物を漁り出す。

「お兄ちゃんだから」

ディックは振り向いてそう言った。

「ポーは僕のお兄ちゃんだから」

ポーは大きく頷いた。もう、誰も死なせたくは無いと心の底から思い、そうさせないように動く覚悟を決めていた。

「絶対、死にはしません」

ポーは思い出す。

ヴァルトから短剣を盗み、ヴォルフに捕まった十年前の出来事を。あの時、死に物狂いでヴォルフにしがみ付いて離れなかった当時の自分を、ポーは心の中で褒め称えた。

あの時、ヴォルフみたいな人を父親だと奇妙に確信めて感じた自分は間違っていなかったと

。

だから、今のポーは与えられた役割をこなすために動く。

それが、敵討ちへの近道であると考えられるほどに、ポーは落ち着きを取り戻していた。

ポーは荷物の中から年季の入った木の櫛(くし)と女性用の衣類を探し出し、纏めていた髪の毛を解いて、身なりを整え始めていった。

教会に踏み込んできた騎士団に信者は慄き、助司祭などは訳も判らずに拘束されていく。喧騒が混乱を呼び込むも、ダニエル騎士団長を筆頭に整然と教会関係者を拘束していく騎士達の動きは、無駄がなかった。

やがて、奥の居館は包囲され、教会の周りは怒りをぶつける民衆が押し寄せると、待っていた衛兵が肉の壁となって暴動を抑え込んでいく。

「こ、これは何の真似だ、ダニエル！」

自室に籠っていたカスパルは、丸々と太った身体を揺らしながら席から立ち上がると、ダニエルを指差して大声を挙げた。

ダニエルは心底、呆れたように小さくため息を吐き出す。

「何の真似？ 貴様が双子姫を攫った事は既に知られているぞ！」

「う、裏切ったな!!」

カスパルはそう捲くし立てたが、カスパルは笑みを滲ませる。

「何を言う。まだ、その狡猾な頭を使うか」

「な、何を——!!」

「拘束しろ！」

声を挙げ、首を動かし騎士をカスパルに向かわせる。抵抗らしい抵抗も出来ずに、カスパルは拘束され、床に倒されて手枷を掛けられる。

「や、やめろ。私に触れるな！ 私は司教だぞ、聖都教の司教様であるこの私に容易く触れるでない!!」

今になってようやく暴れ始めるも、屈強な騎士二人に連行されていく。ダニエルは尚も叫び続けるカスパルの口を塞げと残っていた騎士の一人に命令する。

「金に溺れた亡者め」

侮蔑の混じる言葉と苦々しい顔であった。

「証拠品を応酬しろ」

命令された騎士達は司教だった男の室内を物色し物品を木製の箱に詰めていく。高級そうな調度品や置物から、書状や本に至るまでを運び出される。

その行為は、居館内全てに等しく行われ、押収が終わった夜は更けて月が大きくもはっきり見えていた。

グーテンベルク家はニール城という領主の城に住んでいる。古くからグーテンベルク家はこのニールの町を治め、ゆったりとした発展を行い、堅実な統治運営を行っていた。

ニール城は川の畔に城壁の一角が迫るので、渓谷城塞とも言われ、自然城塞の一面も見せている作りとなっていた。

城内は決して広くはない。跳ね橋と城門を渡れば、そこは広場となっているが、ここが一番

広く、騎士が鍛錬する場所で、馬屋でもあり、処刑場でもあった。その奥には階段があり、城壁の上にもう一つが広場に出る事が出来る。その正面にはグーテンベルク家の居館と主塔と呼ばれる最も頑丈に作られた見張り塔が併設されていた。

「悪魔！ 貴方が仕組んでいた事なのですね！」

その居館にある一室からヘレナの大声が響き渡ってくる。室内は見事な調度品が所狭しと置かれ、大きなベッドに小さい長方にくり抜かれた穴に五つ、硝子が嵌め込まれ室内に光を取り込むように作られているが、室内は蠟燭の光に照らされ、月明かりは薄く差し込んでいるだけであった。

「どうして、どうして貴方がこんな事を。お父様は何処です！ このような馬鹿げた事は早く——!!」

「黙れ！」

ダニエルの一声に、ヘレナは竦みあがって口を噤む。ヘレナの目の前に立っていた男は眉間に皺を寄せて、奥歯を噛み締めていた。

「貴様らグーテンベルク家をもっとしっかり統治をすれば、この町は豊かになるんだぞ！ それを、グズグズと……！」

「な、何を言っているの？」

ヘレナはダニエルの変わり様が恐ろしかった。彼女の知っている騎士団長は正義感に溢れ、町の人や使用人にも優しく誰にでも平等に接していたという印象しかなかった。怒る事はあったし、それを怖いとは思ったが総じて怖い人だとは微塵も感じていなかった。

「貴様は何も判っていない。この町の有益さを」

ダニエルの表情は失望だった。その事が理不尽でヘレナは声を荒げたが、今の彼女はダニエルの空気に吞まれ、目の前に居る男が心底怖い存在となっていた。だから、声を出そうとしても身体がいう事を聞かず、ダニエルの話を聞くしかなかった。

ただ、同じように怯えるクレアを抱き寄せながら、互いに恐怖に支配されないようにするだけで精一杯だった。

「温泉なんてものは即刻潰すか税収を上げればいいのだ。安く使わせすぎるから財政が潤わない！」

ダニエルはほとんど、ラインハルトの統治が気に食わなかった。そして、その男に仕える自分を惨めにすら感じるようになっていた。

「塩を大量に生産し、商人どもに売りつけ資金を得ればさらに町は大きくなるではないか！」

「そ、そんな事をすれば、民衆が付いてきません！ 温泉は心と身体を癒す大事な——!!」

「その軟弱な考えが、世界を墮落させたのだ！」

小さく、悲鳴を挙げてヘレナは思わず目を瞑る。クレアを抱き締める手に力が入るも、今では、ヘレナをクレアがぎゅっと抱き締め包むようになっていた。

「この俺が町を統治すれば、すぐにそんな軟弱な思想は消し飛ぶ！ 俺がやれば、町は変えられるのだ。あの豚では無理だが、俺になら出来る！」

肩で息をするようになっていたダニエルに、ヘレナは思う。まるで何かに取り憑かれていると

。それほどに、ダニエルは変わり果てていた。

まるで、今喋っている言葉に酔っているように恍惚とした笑みを浮かべて天を仰ぎ、右腕を伸ばした。

「俺は選ばれたのだ」

伸ばした手は開かれていたが、何かを掴んだかのように握り締めると顔の前に持ってくる。顔は笑みを浮かべているままで、その表情は狂喜に溢れている。

「だから！俺は行動を起こす。この町を豊かにし、俺はこの国を豊かにするのだ！」

恐怖しつつも呆気に取られるヘレナに、そのヘレナを抱き締める形になった不機嫌そうに顔を歪めるクレア。

「そのために、ラインハルトが邪魔だった。思えば、奴に仕えて二十年。苦節にしてようやく祈願成就だ」

「大義によって俺はこの町の支配者となる願いが叶うのだ!!」

「.....狂ってる」

呟かれた言葉に、ダニエルは嘲笑を向けてヘレナを眺めた。

「歴史が教えてきている！常に狂人と言われた強き者が世界を動かしているという事を！」

確かにそうであったと思える部分があった。間違っていると言われ続けた事がいつまにか普通になり、それまで普通だった事が異端になる。狂人と言われた者がいつのまにか英雄になり御伽噺となって語り継がれ、賢人と言われた者がいつまにか民衆を惑わした魔女となっている。

数多くあった宗教はいつのまにか聖都教という一つの宗教に纏まり、土地信仰や獣人は異端とされ排斥されていく。

「俺は、その一人として選ばれたのだ！だかこそ豚司教などではなく、聖都に住まう神々は俺に加護を与えてくださっているのだ！」

「司教が、私達を攫ったのですね.....！」

信じられない真実を聞かされても、ヘレナは憤るだけの余裕を持てるようになっていた。それほどに、ダニエルの口から吐き出される言葉は狂っていた。狂いすぎるものを見続け、聞き続けたヘレナは逆に真実を知って声を荒げるだけの平静を取り戻せる事が出来ていた。

「安心しろ。司教は明後日には処刑する。本当ならば直ぐにでもしたいところだが、俺も仕事が詰まっただけ」

「そして、その次はあの山賊だ。腐った豚司教と腐った賊徒を断罪してこそ、俺は初めて神に選ばれた英雄となる」

粘つくようにゆったりとした笑みをヘレナに向ける。

クレアの表情が変わり、ヘレナを抱き締めていた腕に力が入る。その力にヘレナは横にあるクレアの顔を見つめて、息を呑んだ。

「司教が山賊と手を組んで調略を張り巡らせた。だが、神に選ばれた俺が神の代理人となって悪を暴き、ニールの町を救うのだ!!」

彼女は怒っていた。ヘレナにそう思わせるほどに顔を怒りに歪ませていた。だが、ダニエルは気付かず言葉が続けるのだから、クレアの表情を読み取れたのはいつも共にいたヘレナゆえだった。

「本来ならば、貴様ら双子は殺してやっても良かったが、それではいかん。民衆に受け入れてもらうには英雄になる必要がある」

悪を裁き、美しいお姫様を助け出した騎士。民衆はその話題だけで酔いしれ、心酔する。彼らは知っている。ダニエルは長年領主に仕えてきた忠臣だという事を。

ヘレナは悔しかった。ダニエルの持つ野心に気付けなかった事。そして、嘘が真実に摩り替わり、英雄として迎えられ、悪として処断されてしまう山賊への罪悪感に襲われる。

「正義と大義の元で!! 俺は行動している事を知らしめるために、生かしておいてやる」

「暫くの間になるか。老いるまで生きるかは、お前の判断次第だ」

近づくダニエルに嫌悪感を隠さずにヘレナとクレアは睨みつけた。

「尤も、妹を思えば——選ぶ事など出来はしないだろうがな」

その言葉に、ヘレナは血の気が引いていく。その表情に、優越を漂わせる笑みを貼り付けたダニエルが顔を寄せてヘレナを舐めるように眺めていく。

その視線にヘレナは眉を顰めて、睨みつける。

「気に入らん」

ヘレナの顎を掴むと押し上げて視線を向ける。

「辞めなさい!!」

「貴様、知っているか？」

真顔で迫るダニエルの顔に瞳を逸らそうにも屈強な男の力に顔を逸らす事も出来ない。

「十年前の事を思い出してみるのだな」

「十年……前」

突然の言葉に、苦しそうな顔ながら思案する。

十年前は色々な事が起こっていた。

「何故だろうな。たかだか司祭だった男が、突然司教になってこの町に居座った。その十年前に何が起こったのだろうか。真実を知れば、貴様達は俺に感謝するだろう。断罪する事が叶わないと思っていた事が叶うのだからな」

クレアのヘレナを握る指先に力が籠る。今のクレアには確かに、怒りという激情が感じられる。クレアを纏っている冷たい空気を内から壊そうともがいているように瞳が揺らめく。

ダニエルはヘレナの訝しがる顔を一頻り眺めてから乱暴に掴んでいた手を離す。

「俺は、選ばれた男だからこそ、神の使者たる者すら断罪する権限を持たされたのだから!!」

大声で笑いながら、ヘレナから手を離すとダニエルはその部屋を出て行く。閉まる扉の後はしっかりと施錠される音が気味良く響いた。

「十年前」

ヘレナはクレアを抱き締めた。

「大丈夫」

そう呟かれたのはクレアの握る指先に力が入ったからだった。

「——許せない」

それでも、今のヘレナにはどうする事も出来なかった。

助け出したいと思える人が処刑を待つばかり。これから裁判が行われようとも、ヘレナはヴァ

ルトの無実を証言する事は出来ない。

証言台に立っている間、クレアに何が起こるかを想像するだけでヘレナは泣きそうになった。これ以上、クレアに辛い思いをさせたくはない。

そう思って過ごしてきたのに。

「クレア、ごめんなさい」

「ディック、ヴァルト——ごめんなさい。ごめんなさい」

声を殺し泣くヘレナを今だけは、妹のクレアが母のように、ヘレナの頭を撫できつく抱き締めていた。

ヴァルトは手枷足枷を嵌め込まれて、ダニエルの前に差し出された。

進んでいく形式上の裁判に、ヴァルトは川の流りに翻弄される木の葉のようになす術も無かった。発言権があるわけではない。喋ったところで嘘だと断言されて、証拠や証言として認められる事は無かった。

ただ、ヴァルトは力無く笑みを貼り付けて、当事者を抜かした茶番劇を見続ける観客となって成り行きを興味なさそうに眺めていた。

ヴァルトにはヘレナが自分の無実を証明してくれるとは思えなかった。案の定、ヘレナのそばにいつも寄り添っていたクレアの姿が無い。

ヘレナは苦しうに顔を歪め、涙を溜めながらも目だけは絶対に反らさなかった。ヴァルトにはそれが何よりも嬉しいと感じていた。

ヘレナの姿と居ないクレア。人質として取られていることを察する事が出来ないほどヴァルトは馬鹿ではなかった。

粛々と形だけ進んで行く裁判は予定通り、公開処刑に落ち着き、閉廷する事になった。ヴァルトは騎士二人に連行されて居館の外にある牢獄へと入っていく。地下へ伸びる階段をしっかりとした足取りで歩くが、ヴァルトの表情は暗くまた痛々しかった。

鉄格子で作られた檻の中に入れられ、施錠される甲高い音が地下に響き渡ると騎士二人の軽やかな足取りは遠くに解けて行く。

残ったのは、何も無い静寂だけだった。

目を瞑り事もせず、あぐらを掻いて座り込むヴァルトにはどうする事も出来ない。鉄格子を破る化け物じみた力を持っているわけでも、即座に助けて出してくれる凄腕の仲間がいるわけでもなければ、内通者がいるわけでもない。

ただ、処刑される日を待つだけの時が、ヴァルトに訪れただけだった。

それでも、ヴァルトは何かを考える。無気力で、生きる事に絶望して諦めたわけではないが、どうにもその思いは走馬灯のように、儚くも彩り鮮やかに過ぎ去っていく。

その時、ヴァルトはただ声を殺して全てが過ぎ去るのを待っていた。クローゼットの隙間から両親が目の前で殺される様を見せ付けられ、住んでいた村は蹂躪される中で、ただひたすらに両親から言われた「絶対に声を出さず、物音も立ててはいけない」。その約束を守り通し息を潜めていた。

蹂躪の余韻が残る村で、両親に隠されていたヴァルトは無常にも残党に見つかり、引きずり出された。

奴隷商人に売り込むか。いやいやここで殺そうか。

そんな話を喜々とした表情で交し合う賊徒の姿は、ヴァルトが聖都教から教えられた悪魔そのものだった。

悪魔と叫び、立ち向かいボロボロになった。死の恐怖よりも悔しさが勝り、ヴァルトは立ち

向かった。その姿に、賊は面白おかしく相手をしていたが、やがては殺そうと刃を向ける。

だが、その悪魔は突然血を噴出すと死に絶え、残っていた残党も皆殺しにされた。

生存者はヴァルトただ一人。

夕暮れに沈み行く死んだ村の中で、生き残った少年は一人の旅人と出会う。

「俺の勝手でお前を助けた。お前は どうする？ 俺を憎むか？」

旅人の姿はヴァルトにとって英雄だった。

「そうか。俺が助けたから俺が育てる必要もあると考えたのか」

必死に縋るヴァルトを男は鬱陶しいとばかりに蹴りつけ、ヴァルトは腹を抱えて蹲った。

「殺すぞ。餓鬼」

そう吐き捨てると英雄は村の中を物色し始めた。食糧から金品の残り物を探す。ヴァルトは動けず、蹲ったまま英雄の背中を見ている事しか出来なかった。

「クソが……」

粗方、探し終えた時。英雄はまだ息があるヴァルトに気付いて近寄った。

「名前は、お前の名はなんと言う」

ヴァルト。掠れた小さい声でそう言った。

「——そうか。俺はヴォルフだ」

ヴォルフ。ヴァルトはそう呟いて上体を起こした。彼こそ自分を救ってくれた英雄。そして、全てを失った自分を助け出してくれる神様だった。

「お前の両親を殺したのは悪党だ。何でも奪い取っていく。必要なものも不必要なものも」

「だがな。悪党はあんな奴らだけじゃない」

「俺も、悪党だ」

射殺すように立ち上がろうとするヴァルトを見つめるヴォルフの声は低かった。

「餓鬼が夢見る英雄様じゃない」

「それでも、お前は俺に縋りつくのか？」

ヴァルトは、ヴォルフの袖を掴み込んだ。絶対に離さない。ヴァルトはそう決めて、ぎゅっと。唇を結び、布を右手で握り続けた。

「お前は、悪党に泣きつくのか」

何も喋らなかつた。何も、何かを言えば何かが終わってしまう。それは、自分の命が終わるといふ事に他ならない。

「——生きるためか」

「いいさ。教えてやるよ」

ヴォルフはそう呟いて握られている袖を引っ張る。ヴァルトはその勢いで前に転ぶも、ヴォルフは省みずに歩き始める。

「悪党にも悪党の矜持ってものがあるんだ。覚えておけ。これからお前にそれを叩き込んでやる」

ヴァルトは、震えながらも立ち上がってヴォルフの背中を追った。

「教えとかじゃない。お前自身がいずれ持つべき心構えみたいなものだ」

大人の歩幅と子供の歩幅。どどんと引き離されるも、ヴァルトは必死に追いかけた。ヴォルフの声だけが薄暗い世界になっていく中の指針だった。

「誇りを失えば悪党だろうと貴族だろうと王様だろうと、墮落した存在に成り下がる」

ヴォルフは立ち止まって、振り向いた。

「だから、お前も持て。悪党になると覚悟を決めたのなら。俺に縋ると覚悟を決めたのなら」

ヴァルトはヴォルフの衣類を掴もうとした。

「悪党であり続け、矜持を持て」

その時、ヴァルトの頭にゴツゴツして堅いのにとても暖かい——ヴォルフの右手が乗せられた。

ヴァルトはその日、英雄に出会った。

以後三十年間、彼らはずっと一緒、何をするにも一緒だった。人を多く殺した、女子供関係無しに殺した。生きるためだけに。自分が生きるためだけに他者を殺し、他者から物を奪った。それでも、二人は一緒だった。互いに矜持を持って、悪党らしく生きてきた。

今では、仲間を引き連れ徒党を組むまでになり、今まで以上に悪党らしく仕事に精を出すようになった。

これからだった。ヴァルトにとって、ヴォルフとまだまだ一緒にやりたい事が沢山あった。仲間の事を、ディックの事も。いっぱいいっぱいあった。

「ヴォルフ……アンタは悪党だったよ。数え切れない人を殺してきたかもしれねえ」

何もかもが暗く冷たい世界にヴァルトは居た。

石造りの壁と床。鉄格子の先には同じような牢獄だけが見えてくる。手枷も鉄製で、足には鎖が巻かれ鉄球が取り付けられている。

顔は腫れ上がり、拷問されたように手の指先、爪の中は真っ赤に染まっている。

それでも、ヴァルトは生きている。それでも、ヴァルトの目に生気はあった。処刑を待つ男の顔ではない。獣のように、猛々しい顔に見えていた。

「出会う前に、仲間を失った事も話してくれたよな」

独白。

「俺らを定住させようとしていたのも気付いてた」

これは、ヴァルトの独白。

「前も何度か、それでぶつかり合ったな。覚えているかヴォルフ」

小さく響き渡る事もしないほど、か細くも吐き出されていく吐露。

「爺臭くなりやがって。何度もそう吐き捨てたがよ。本当だぜ？」

誰へ向けたものでもない。

「俺らには、まだアンタが必要だったんだよ」

ヴォルフにすら向けてはいない。

「定住するにしても、流浪を続けるにしても」

ただ、己がためにヴァルトは吐き出し続ける。

「なのによ。アンタはアンタの矜持を貫き通しやがって」

瞳は水面のように揺らめき始めては涙を零す。

「かっこいいじゃねえか」

止め処ない。

「クソつまんねえよ」

その涙が顔の傷を熱くする。その熱に構う素振りも見せない。ただ、焼かれていく。

そして、おもむろに顔を挙げた。天井も変わらず石造りで代わり映えはしない。だが、ヴァルトの声は方向を変えた。

乗り越えられたのか？

その言葉がヴァルトの胸をきつく締め上げていく。本当に、自分は何をやっているのだろうか。ヴァルトの心は冷え切っていく。何故、こうなってしまったかを考え出すと全身の力が抜けてしまい、石壁の冷たい感触を背に感じながら、だらしなく口を開けてしまう。

「くそったれ」

爺臭い説教だな。

ヴァルトはそう言って、ヴォルフとの会話を拒んでいた。逃げ出していた。ヴォルフの言葉から、ヴォルフの思いから。

年上の有り難い説法さ。心に刻んで置けよ。

ヴォルフはそんなヴァルトに優しく声を掛けていた。子供をあやすかのように。焦る必要は無いと。そう言い聞かせるように言っていた。

「逃げてただけじゃねえか俺はよ」

自ら進む道の選択肢を限定させていた事を今、初めてヴァルトは肯定した。

あの時、確かに生き残る可能性が最も高かったのはヴォルフに縋ることだった。その選択に後悔など有りはしない。

「ちゃんとさ、言ってくれくれねえと。俺は馬鹿だからわかんねえよ」

ヴォルフは何故、ヴァルト達に定住を勧め続けたのか。それでいて強制する事は無かったのか。

ヴァルトは大声を挙げる。

「クソったれが!! 今更じゃねえかよ。ヴォルフはもう、いねえんだぞ!」

手を額に打ちつける。何度も、打ち付けると皮膚は真っ赤に染まっていくがヴァルトは続けた。

「何で、気付いてやんなかったんだよ俺は……ヴォルフが俺に可能性を見せていたのによ」

ヴォルフが全てだと錯覚していた。山賊という道こそが全てだと思いこんでいた。だから、他の選択肢が鉛色の雲に隠れてしまい、ヴォルフの言葉にも耳を傾けなかった。

「何が、仲間のためにだ。俺は、俺だけのために、賊やってたじゃねえか」

気付いてしまう。ヴァルトはヴァルト自身のためだけに人を殺し、物を奪っていた。仲間のためでもない。ディックの仲間を見つけてやる事も、人に化けさせる事も結局は口先ばかりだったと思いついた。

「怖いんだよな。嗚呼、怖いよ。死ぬのも、怖い。でもよ、復讐されるのが怖い。恨まれるのが怖いんだよな」

「どうすりゃ良いんだよ。ヴォルフ——俺は、どうすれば良いんだよ」

「——なあ、ヴォルフ」

語りかける。

「なさけねえかもしれないけどよ」

弱い自分を隠そうとはせずに、ぽつりぽつりと喋っていく。

「今回だけは仲間を頼らせてくれよ」

痛々しい微笑でも構わず続ける。

「まだ死にたくはねえ」

醜くとも、喋り続ける。

「やりたい事が残ってる」

もう居ない大切な相棒で、父のような男に。

「勝手だよな。でもよ、ヴォルフ」

自分の心ではいつだって英雄だった。

「なんとかして、くれよ」

ヴォルフに縋りつくヴァルトは出会った時と同じように、ただの子供に見えるほど、小さかった。

「生きて、アンタのために」

「仲間のために生きてえんだよ——」

ニールの町は歓喜に沸いていた。人々の混乱はあったものの、双子姫は無事帰還し、諸悪の根源である司教は逮捕。共犯だった山賊の頭も捕らえられ、明日には処刑されるという知らせが町を駆け巡り、皆は安堵のため息を漏らした。

ダニエル騎士団長は名実ともに英雄となり、暫定領主という立場ながらニールの町を統治する権利を握るようになったが、その事に誰一人文句を言う事は無かった。

「ヘレナ様とクレア様をダニエル騎士団長たちが救ったそうだな」

「流石は騎士団長だ」

「まったくだ」

「それにしても、司教様が山賊と手を組んでいたとは」

そのような話で町はとにかく盛り上がり、酒屋などは日が出ていようがそれなりに人が入り、英雄の話題に花を咲かせていた。

商人の中でも同じ話を聞く。ザックスはそのような場から離れ一人、宿に向かい歩を進めていた。商談とは名ばかりの世間話の帰り道だったが、ザックスの表情は沈んでいる。

町行く人々が英雄の話に盛り上がり喜々としているだけにザックスだけ取り残されているように存在とその顔は浮いていた。

「ザックスさん」

その時、ザックスを呼び止める声が背中から聞こえてきた。宿屋はもう目と鼻の先だった。

「おや、貴女は？」

振り返ると見た事無い美少女が佇んでいた。町娘の服装だったが、肩まで伸びる赤茶の髪の毛と揃えているように、真紅のローブを着込み、袖を切り揃えた薄い緑の衣類を纏っている。頭には純白の布をカチューシャで止め、胸元に光る少々大きめのネックレスが無地の衣類に彩を加えるかのように自己主張を欠かしてはいない。

思わず、ザックスは目を奪われる。十六、七くらいだろうか。ニールの商家にこれほどの美女が居たのかとザックスは思った。

「少々お話でも宜しいですか？」

「ええ、構いませんよ。何用で？」

思わぬ、お誘いにザックスは胸が躍ると共に、彼女の瞳に宿る何かを感じ取ったのように、物腰柔らかくも警戒心を持ちながら対応して見せた。

「協力して欲しいのです」

「協力？」

「町では今、凄い騒ぎになっておりますでしょうか？」

目の前の彼女が何者なのかを瞬時に理解したザックスは逡巡する。

「そう、ですな」

これは、犯罪の片棒を担ぐ悪魔との契約に等しい岐路であるとザックスは感じていた。

「……立ち話も何ですから、私が止まっている宿へ行きませんか？」

それでも、ザックスは悪魔を誘う事にした。

少女はその誘いに多少、面を食らったようではあったが大人しく従い、宿屋を目指す。

ザックスの住まう宿屋は奥の間が存在し、商人や金持ちは皆広い離れの個室を利用し、ニールの町でも一番に高い宿屋だという認識を持たれる場所だった。

少女を椅子に座らせると、ザックスは店の主に飲み物と軽食を頼み、個室へ入る前に貰い受けて、持ってきていた。それを、テーブルの上に置くと自身も椅子に腰を落ち着ける。

「貴女は、彼の仲間です」

開口一番。ザックスの先制に少女は柔和な笑みを浮かべるとザックスは妙な違和感に苛まれたが、考え込む前に少女が口を開く。

「以前、ザックスさんは言いました。人脈は財産だと。その言葉に感銘を受けまして、今回は頼らせていただきます」

ある夜の出来事が蘇る。ザックスの記憶にはあの夜、少女が同伴していた記憶は無かった。

ザックスは腕を組んで、背もたれに体重を預けると思案顔をするかのように、眉間に皺を寄せる。

例え、自分の中で答えが出ているとしても易々と声に出す事が出来ずにいた。

「どうですか？」

少女の急かしつける声に、ザックスは深いため息を吐き出すと微笑んで見せた。

「拒否は出来ないのでしょうか。いえ、元より協力しますよ」

「意外に早かったですね」

「そうですか？」

陶器のカップに入った紅茶を口に運んだ。

「理由はそれなりにありますよ」

一回り以上も歳が違うであるはずのザックスは気恥ずかしさを隠す事もしなかった。その空気に、少女に張り詰めた糸を緩める。

「聞かせていただけますか？」

少女の言葉は穏やかだった。それでもいて、何処か曖昧な声。ザックスはサーカスで綱渡りをするサーカス団員の姿を漠然と頭に思い描いた。

「私は、こう見てもそれなりの財を築いた商人です。それをカスパル司教様は知っておられて——」

「擦り寄ってきた？」

ザックスは苦笑いを浮かべた。

「ええ、まあ。塩や近く開山される予定と言われる鉱山をちらつかせて」

「それは、それは。良い話ですね」

「そうですね。だから、それなりのお金は流しましたし、今後の繋がりも匂わせました」

「それで？」

別に急かすつもりは少女にはなかった。別にザックスももったいぶる気はなかった。ただ、間

が開いたのは事実だった。

「だから、騎士団長が言っていた事は半分真実。いえ、八割は真実でしょう」

ザックスの言葉を実に意外かつ興味深そうに口を僅かに動かしてみた少女は、次に出される言葉を待った。

「残り二割の虚偽。それは、一割が山賊の加担。そして騎士団長の英雄」

何処から、その自信が溢れてくるのか判らないが、とにかくザックスの言葉はしっかりと揺らぎがない。面白そうに、首を少し右に倒しながら少女は問い掛けた。

「商人は損得で動くのでは？」

「あ、あの場に居ましたか」

やはり、記憶に無いな。

言葉とは裏腹に、ザックスはそう思いつつも、首を傾げた少女を微笑ましいと感じていた。

「そうです。損得で動きます。だからこそ、あの山賊を助きたい」

商人は損得で世界を見つめる。自分が儲かるかどうかで人との付き合いを見定める。打算的でないながら、小利口さを隠す術を知っている。そういう一握りの商人が何の変哲も無い商売ですら、金のなる木へと変身させてしまう。

ザックスは商人を錬金術師と思っている節があった。無価値を金に換える。人に価値があると思わせる。匠の業は錬金術に通ずるはずだと。

「信じるか信じないかは貴女に任せますが、喋って宜しいですか？」

「ええ、興味があります」少女は、朗らかに答えた。

紅茶を再び、口に運ぶザックスは少女が一口——カップに手すらもつけない姿に油断ならぬこういった場に慣れている人だと思いを巡らせた。ザックスはしないが、他の商人はするかもしれない。元より、少女は山賊で悪党だ。悪徳商人や同じ悪党との交渉ごとも日常茶飯事だったと思いなおすと少女を見据える。

「ラインハルト・グーテンベルクはやり手ですよ。保守的ではあるのは事実ですがね。私も綺麗さっぱり、騙されました。最初はね」

少女の視線は揺るがない。

「聖都教の腐敗は今回の一件でも明らかですが、私は昔から目の当たりにしてきました。その経験則から言うと、ニールの町での腐敗は軽微です」

聖職者が私腹を肥やし、絹の衣服を纏い、宝石を身に付けて民衆に働く事の素晴らしさと清貧を説くという矛盾を見てきた。教会の周りは貧困に喘ぐ人々に溢れ、教会に慈悲を求め押し寄せ衛兵に突き倒されては、教えを聞かされ飢えに罪を犯し、捕まっては処刑されて死んでいく。

商人に擦り寄り、金を貰う代わりにその町での優先的な商いや貴族への口利き。町のギルドですら立ち入れない絶対不可侵を教会は作りなし、そこへ金を溜め込み日々を謳歌する。

まるで、そこそが聖都であるかのように振舞う様をザックスは目の当たりにしてきた。

「ラインハルトは、ゆっくりとした発展と細々とした統治経営を徹底して聖都教からこの町を護ってきていたんです」

この町はカスパルに目を付けられてからまだ日が浅いとザックスは思っていた。だが、話を聞く上では十年ほど前に、カスパルが司祭としてこの町に来たと言うのだから、その頃に知られて

はいたはずだった。けれども、カスパル以外に金の亡者が群れてくる事は無かった。

出会ってみればその事にも納得がいていた。カスパル司教の野心と欲望の深さは底が見えない。

「豊かな森林に、放牧できる土地。そして農耕も出来る高原を有する」

少女の言葉に、ザックスは頷く。

「はい、加えて司教が言ったように、温泉もあれば塩も取れて鉱山も見つかった。これほどの資源を持つ土地は早々ありません」

「世に知れば、群がる金の亡者によって容易く侵略されてしまう、と」

聡い。山賊など辞めて職を探せば簡単に見つかるだろうに。

そんなザックスの哀れみにも似た思考を読まれたかのように、少女の視線が鋭くなる。

「だからこそ、やり手。代々グーテンベルク家がここを統治しているようですが、家訓でもあったのでしょうかね」

「それでも、露見してしまったと？」

長年、護ってきた伝統を打ち砕いた何かがあったのは明白。

「ええ、何故でしょう。グーテンベルク家は代々隠してきた事を聖都教に知られてしまった。十年前、唐突にカスパルは司祭。そして一年もたたずに司教の座に就いたそうですよ？」

少女の瞳が怪しく揺らめく。

「領主の身近——確か二十年。でしたっけ？」

「はい。ダニエル騎士団長は二十年間、グーテンベルク家に仕えてきました。元々は浮浪者だったそうですけど、衛兵の応募から申し上がったそうです」

凄いですよね。成り上がりの体現ですよ。

ザックスは軽口のように、賛辞を送って見せた。

方法を知る術は無い。もしかしたら、カスパルもダニエルも本当に自分の力で申し上がったのかもしれない。

「何故、私がここまでの情報を得る事が出来たのでしょうか。貴女の顔はますます疑問に思われているように見えますね」

はい。

少女は素直に頷き、ザックスは微笑む余裕を見せる。

「答えは簡単です。私が商人で金を持っている。そして情報を持っていた人々は金を欲していた。それだけの事です」

「本当に、簡単でしたね」

前かがみになってテーブルに両肘を打ち立て両指を絡める。一拍、息を吸って吐くとザックスはテーブルに置かれている自分の紅茶を見つめる。

「君達、山賊は確かに悪党だ。だが、今でも覚えているのです」

清々しい笑みだったと今でも思っていた。どうして、あそこで笑う事が出来たのか。正直、ザックスには恥ずかしい台詞にしか聞こえなかった。まるで子供達の観劇で初々しい男の子の勇者が恥ずかしそうに、助け出したお姫様へ正義を説き聞かせている。そんな、陳腐で気恥ずかしい。けれども、微笑ましい思いがあった。

「悪党には悪党の矜持がある」とザックスは覚えたての言葉を並べる。

少女の顔が驚きに変わり、してやったりと思ったようなザックスの悪戯小僧のような顔が出来上がっている。

「今なら、言えますよ。商人には商人の矜持——そういうものもあるのですよ」

損得で動く商人にも矜持が存在する。ザックスにとって長期的に目を向けてみると、今の選択は博打だった。だが、それでも分の悪い賭けとは微塵も思っていない。不思議と山賊なんていう悪党を信用出来てしまう自分が居る。その事に、心底呆れているのにも拘らず、ザックスは楽しいとさえ感じていた。

「ありがとうございます」

少女はそう言って立ち上がると部屋を後にしようと歩き始める。

「待ってください」

ザックスは少女の背中に問い掛けてその歩みを止めさせる。

「何でしょうか？」

「私も、混ぜていただけませんかね？」

「面白半分では死にますよ」

振り向かずに、冷たく突き放す。

「いえいえ。損得で言うならば、恩を尤も高い価値の時に売っておく。ただそれだけです」

ザックスの声はあくまで飄々としていた。商人臭い。煽てるのが上手く、いつのまにか他者は勝手に納得して商品を買っていく。その商人の声だった。

「判りました。信用しましょう。仲間をここへ連れてきますが、バッカスの欠伸に居てください」

少女はそう言って、扉を開ける。

「それと」

「はい？」

「僕は男ですよ。これは女装です」

残されたザックスは暫くの間、石像のように動く事は無かった。

その日の夜、ニールの町は何処もお祭り騒ぎとなっていた。それこそ酒屋から宿屋に至るまで、町全体は明日行われる処刑に沸いた。

ある者は怒りを持って、ある者は人の死を楽しみにし、ある者は怖いもの見たさに処刑場へ行くつもりでいた。

「いやあ、君達の芸は面白いね。さあ、入ってくれ」

ニールの町で随一と言われる高級宿には、その騒ぎに負けないほどの喧騒を引き連れてザックスが宿に入っていった。その姿に亭主は苦笑いを浮かべて対応する。なんとと言っても、奥の間を三つも買った金持ちだったので、粗相の無いように対応するのは当然だった。

「失礼します！」

後ろからぞろぞろと入ってくるのは如何にも芸人のような者達だった。色彩豊かな衣服を纏い、道化のような格好に、亭主もザックスの気分が良い理由をしっかりと理解した。

「亭主、私の客人だ。部屋を借りさせてあげてくれ、金は私が払うよ」

「ザックスさん。今日はえらく上機嫌だね」

「ええ、久しぶりに楽しい思いが出来ましてね。これからさらにと言う所ですよ」

「騒ぎすぎないで下さいよ？ 奥間と言っても、一般のお客様も居られますので」

「判っているさ！ さあどうぞ」

そのやり取りを行うとザックスを先頭に奥の間へ進んでいく。受け付けの横を通れば、中庭に出る。ここから奥に行った別館が奥の間と言われる高い宿となっていた。

「ザックスも案外と役者だな」

中庭に造られた屋根付きの廊下を歩きながら、ダンは小さく呟いた。真っ青なローブと白い肌色が妙に似合っている。

「商人はいくつもの役を演じきるものですよ」

「勉強になります」

ポーは髪を降ろして女性物の衣類を着こなしている。昼間にザックスと出会った時の服装であった。

「相変わらず、可愛いなあ。ポーは」

「気持ち悪い声を出さないで下さい」

ユーリの言葉に、ポーは顔を顰める。

「ユーリ」

「はいはい。そう睨まないでくださいな」

ダンの鋭い視線にユーリは身を竦ませながら、廊下を渡り、別館へ入室していく。

既に、ランプの蝋燭には火が灯り、暖かい光で室内を照らし出している。ザックスはしっかりと鍵を閉めて皆を適当な席へ誘う。

一息つき始めると、ザックスはおもむろに大きめな紙をテーブルの上に伸ばして置く。

しっかりとした作りで羊皮紙(ようひし)には、線が張り巡らされているかのように書き込まれている。

「ザックスと言ったな。情報は確かが良いのか」

「ダンさん。ですよ。ええ、商人は信用が一番ですから」

ダンが腕を組みながら、広げられた紙を眺めた後に、対面に座ったザックスを見つめ、ザックスもその視線を真正面から受け止めて頷いた。

ポーとユーリは残りの席に座り、四角いテーブルに四人が向かい合う。

「ならば、決行までまだ時間はある」

「明日までか」

「十分だろ？」

ユーリの軽口にダンが珍しく不敵な笑みを浮かべると、ユーリは少し驚いたが同じように、口の端を上げて笑ってみせる。

「そうですよ。十分です」

「でも、どうすんのよ」

ポーの静かな決意を滲ませる言葉を耳に入れると、ユーリは気を取り直して言葉を並べる。その視線は自然とザックスへ向けられ、ザックスも皆の視線が自分に集まるのを確認すると口を開けた。

「簡易裁判は早々に終わったようです。司教もヴァルトさんも死刑。共に絞首刑のようです」

「運が向いてきたな」とダンは言った。

「この地図を見る限りだと、やっぱり広場だよな」

視線が広げられた地図に向けられ、その中で一番広く線で囲まれた場所に集中する。

「ですね。防衛の観点からも城壁の上に弓兵を置き、城門と民衆の警備に衛兵。処刑台に残りの騎士ですか」

広場は、城門を抜けて直ぐ広がっている。その周りを高い石造りの城壁が囲み、その奥には上段に上がる階段と第二の城門が記載されていた。その先には、領主が住まう居館があるはずだったが、生憎と詳細な見取り図ではなく、あくまで城の外観を簡易的に書き表した代物だったので確認はできない。元々、第一の曲輪（くるわ）だけが書き込まれているようなものだ。

「妥当だ。定石ならば、弓兵の駆除と混乱を同時に起こす」とダンは言った。

「夜に忍び込んで救い出すと言った事は出来ないのですか？」

ダンは鼻でその言葉を笑ったが、ザックスは特に気にはしなかった。所詮、商人には賊の事など判りはしない。だからこそ、稚拙な質問を投げ掛けて見たとも言える。

「俺達は山賊で暗殺者ではない。技術も無ければ装備と準備期間も無い」

ダンは腕組みをして、一息つくように背もたれに身体を預ける。

「地図が合っても、兵員などの構成や警備配置と交代時間。また領主城内の地図はありませんからね」

ポーは眉間に皺を寄せて地図を睨みつけながらもザックスに向けて喋った。

「高望みしたって、始まらんね」

なるほど。

ザックスは山賊達の言葉に納得のため息を吐き出した。

「進めるぞ」

「お願いします」

ダンの言葉に大人しく、ザックスは山賊の作戦に耳を貸す。

「ディックを陽動に使う。司教と頭は同時に処刑するわけではないな？」

「はい。これは確かな情報ですから」

「幸いですね。騎士団長が英雄志向で助かりました」とポーは言った。

「普通なら、横並びで仲良く宙ぶらりんだろうからな」

ユーリがポーの言葉を受けてそう言った。

「演説でもして優越に浸るのだろう。俺達はその時を十二分に活かす。司教処刑前に潜入し、準備を整える。司教処刑後、頭が処刑台に上がる時に、ディックを町の城門付近で暴れさせる」

ダンが地図の外に、人差し指を置く。

「ザックス。お前はとにかく、大熊が出たと叫べば良い」

「熊、ですか」

興味深そうにそう聞き返すと山賊は苦笑いを浮かべる。

「ディックって奴が事前に捕獲しといた奴を離すってところかな」

「準備がいいですね」

特に突っ込む事はせずに話を続けていく。

「本当は喰う予定だったんだが、事情が変わったのさ」

「とにかく、ザックスは馬車に家畜でも乗せてくれれば良い。後は勝手に熊が襲う」

「そして、私は大声で町中に叫ぶと」

「それで良い」

ダンは頷いた。

何か含みを持ったザックスの顔にユーリとポーも悪い顔で笑顔を作っている。

「町の危機だ。衛兵も当然、暫定当主であるダニエルに報告を入れる」

ダンの人差し指が城門に入っていく。

「目的は民衆の混乱と処刑場内の兵員削減ってところか」

「指示はどう出すんだ？」とユーリは言った。

「司教の処刑で沸く歓声を聞き取ってもらうか……とにかく、俺が後で打ち合わせしておく」

ダンは一先ず話を進めることを優先させた。

「次に脱出地点だ。ユーリ」

「おう。地図もあるから良く判るだろうけど、正面の鉄扉とは別に鉄の牢屋みたいな門がある。これは、多分戦争の時とかに使う奴だろうけど、扉にくっ付いて破ろうとしている兵を一網打尽に捕まえるように扉よりも町側にあるんだ」

ユーリはポケットから石ころを取り出すと門の左隣に置く。

「これを、落とす。広場の左手に釣り上げている鎖があるって話よ。加えて、左右の城壁を上がる階段も近くにある」

「混乱に乗じ、騎士、衛兵がある程度外に出てから、門を降ろし、上に駆け上がる」

ユーリも置かれた石から城壁を撫でるように指を這わせた。

「俺とボーがやる。ユーリは頭を助ける」

「判りました」

ダンの言葉に、ボーが頷く。だが、ユーリは真剣な面持ちで顔を上げて大きくため息をついた。そのユーリにダンとボーも静かに視線を向ける。

「いや——ダン。俺がボーと城壁に上がる」

重い、言葉だった。

「頭を、頼む」

ユーリの決意が瞳を揺らし、ダンを射抜く。

「判った。必ず助けてやる」

前かがみになりながら、ダンは顎に右手を押し当てながら断言した。

強い何か。それこそ、絆と言うべき繋がりを見た。とザックスは神妙な面持ちでそのやり取りを黙ってみていた。そして、妙に清々しい気持ちに陥る自分に戸惑っても居た。

悪党であるはずの彼らにも、友情や仲間意識がきちんとあることを目の当たりにしからかもしれない。ザックスは表情を変える事もせず、胸の内に思った事を仕舞い込んだ。

「救出後、左手の城壁外に藁を敷き詰めた荷車に飛び込み、そのまま町に消える」

「藁が私に任せてください」

ザックスは、口を開いていた。

「門が閉じられれば情報はある程度遮断できるでしょうから、逃げる事は出来ると思いますよ」と三人の視線を一身に浴びながらもザックスは言った。

「露見したら、お前も死ぬぞ？」

「いえいえ、私は商人ですから。脅されていた。仕方なく。他にも色々と逃げ道はありますよ？」

その言葉に、笑顔を作るザックスに、ユーリが声を挙げて笑った。

「言うねえ」

「そうですね。商人の方がよっぽど悪党ですよ」

ボーが笑顔のまま頷いて見せた。

「とにかく、頭を助ける計画はこれで良いな」

ダンも気を抜くようにため息をつくそう言葉を漏らした。

「ええ！ こんな簡単なので良いのかよ、敵のアジトに乗り込むんだぜ？」

ユーリが驚いて声を挙げるとボーがユーリの声に驚いて面を食らったような惚けた顔をする。

「珍しい、ユーリが文句を言うなんて」

その抗議に、ボーはそんな声を挙げ、ダンは笑ってみせるとユーリはふて腐れたように口を尖らせた。

「ユーリ、難しく考える必要は無い。いつも通りに奪う。それだけだ」

「僕達は賊で山賊。いつものようにするだけでいいんです」

「それも、そうか……でもよ。双子姫はどうするのよ」

唐突に話題を切り替えるユーリにダンは顔を顰める。

「頭のみだ」

ダンが静かにそう呟いた。その言葉にポーも続く。

「難しいですよ……処刑の場に果たしてダニエルはお姫様を出しますかね？」

「出すとは思いますが？」

ポーの疑問にザックスは答えた。

「暫定領主と言ってもご息女が居ますから、形式的に出さざるを得ない状況ではあります」
なるほど。

ポーとユーリがそう呟いて頷いた。そんな二人にザックスは言葉を続けた。

「ですが、人数が足りません」

「ああ、そうだった……三人だもんな。三人で三人助けるって無謀すぎるわ」

ユーリは忘れていたと言わんばかりに頭を掻いて困ったように顔を歪ませる。

「だが、頭の事を考えると」

ダンが天井を仰ぐように背もたれに体重を預けた。

「忘れてました」

「頭は頑固だからな」

ポーは失念していたと言わんばかりに苦笑いを浮かべて、ダンは目を瞑ったままだった。

「助けようとするのですか？」

山賊の反応に、ザックスは疑問を投げ掛ける。

「絶対」

「厄介ですね」

ポーの言葉に、ザックスも呆れたように苦笑いを作った。どうにも、ヴァルトという男が山賊に向いていないように思えてくるザックスだった。

「最優先は頭だ。双子姫は頭を助けてから考えれば良い。生かしているのだから、すぐに殺される心配はない」

「やっぱそうなるか」

「ですね」

「あの、宜しいですか？」

申し訳ないように控えめ拳手をするザックスに、ダンは視線を這わせる。

「なんだ」

「ヴァルトさんは、どうして双子姫を助けようとするのですか？」

三人の山賊は小さく鼻で息を吐き出すと互いの顔を見合わせあった。

「お人よしだって事よ」

「同族嫌悪だな」

「子供好きなんです」

綺麗に分かれた意見にザックスは苦笑いを浮かべる。

「見事に分かれましたね」

ザックスにはどうにも、三人の山賊が何かを呑み込んでいるように思えていた。それを悟ったのかポーが口を開く。

「本当はね」

けれども、ザックスはポーに向けて右手を挙げる。無理して聞く必要は無かった。

「言えないのでしたら、私は賊ではありませんし。深いところまでは——」

「貴族だった男だ。頭は」

ダンは構わずに言い切った。

「——意外です」

「正確に言いますと、没落貴族のご子息だったんですよ。頭の家は戦争で負けた国に属していました。負けた国では土地の没収やら、爵位返上やお家の取り潰しなんて普通でしょ？」

ポーの言葉に、ザックスは頷いた。

戦勝国で活躍した家などへの土地分配は必然的に行われ、降伏しなかった敗戦国貴族は当主が処刑されて家を潰される事も普通に行われる。

何も、没落貴族が珍しくて驚いていたわけではない。

ヴァルトという男からは貴族の品格がこれぼっちも感じられなかった。ザックスからすれば本当に驚いていたが、顔は妙に引き締まっていた。

「恐らく、生まれてすぐに頭の家は取り潰され、別の土地で暮らし始めた」

「判りました。ありがとうございます」

貴重と言うべきか、知られざる没落貴族の末路を聞いてしまったザックスは謝辞を述べてお辞儀をする。

「俺、初めて知った」

そんなザックスを他所に、ユーリはふて腐れていた。

「あれ？ そうでしたっけ」

ポーが苦笑いを浮かべながらそう答える。

「てっきり聞かされていると思っていたが」

ダンも、ユーリは既に知っているものと思っていたようだ。

「良いつて……どうせ、俺はそこまで信頼されていないですよ」

「ふて腐れるな」

面倒そうに顔を顰めてダンが呟く。

「そりゃ、ふて腐れるわ！ 俺だけ仲間はずれかよ！」

声を荒げるユーリをポーが宥めつつも、ダンも身体力を抜いて大きくため息を打つ。作戦会議も終わりを迎える。

「とにかく、話は決まった。朝一で外に出て俺はディックと合流する。武器は良いか？」

「持ち合わせで十分だと思います。皆殺しが目的ではありませんし、身軽に動けるくらいです」

ダンの問い掛けにポーが答える。

「絶対、助けてやる……助けて、根掘り葉掘り聞いてやる」

ユーリは変な決意を胸に秘めて瞳を輝かせている。

「あの、宜しいでしょうか？」

「なんだ」

ザックスがまた、手を挙げるのでダンが訝しがるものの問い掛けた。

発言機会を得たザックスは不敵に笑みを浮かべてみせると三人を見回して口を開いた。
「私が暫定領主様、延いては双子姫に会いましょう。双子姫にだけ、計画を教える。どう
です？」

軟禁というには相応しい環境の中で、双子姫は生活していた。外へ出る事は許されず、暫定領主の思惑のみで、外出が許可される。そこには自由は無く、要求される事を拒めば最愛の親族が死ぬ事になる。暗黙の了解にならざるを得ない現実を突きつけられながら、双子姫は憔悴していきながらも、まだ生きる事を諦めては居なかった。それでも、自らの意志では決して開く事の無い扉が開かれる時、二人は恐怖を覚え、震えずには居られない。どちらかが部屋を出て、どちらかが残される。

開錠の音と共に騎士が二人、双子姫が軟禁されている部屋に入ってくると、赤いドレスを着込むクレアの腕を掴むと外へ連れ出そうとする。

「出る」

「ク、クレアを何処へ連れて行く気ですか!!」

ヘレナの声は響き渡るだけで、屈強な男の羽交い絞めを脱する術は無く、ただ連れて行かれるクレアを眺めるだけだった。

「クレア！」

再び、施錠の音が響き渡ると途端に静寂が舞い降りる室内だったが、声を殺しきれない嗚咽を漏らすヘレナの姿が小さく残された。

残された者は連れ出された者が生きて帰ってくる事を願うしかない。

ザックスが招かれた室内は大きくは無かった。けれども、控えめな色合いに統一された調度品に、白いソファは目立っていた事だけが目に付いた。合っていないというわけではなく、ザックスにはその白に、趣味が良いと思った。

ただ、目の前に立つダニエル騎士団長は、とてもではないが統治に向いている人には見えなかった。

鎖帷子を纏っていた凜々しい姿こそ、似合っている。今の彼は、貴族に憧れている浮浪者が、盗んだ衣類で無理をして着飾っていると思えるほどに不釣り合いな格好をしていた。

裾の無駄に長い上着は真っ赤に染まり、その裾や袖には白い毛皮が取り付けられており、白いストッキングに先が尖って上を向く靴。仰々しい羽帽子に、金のネックスレスに指先には指輪が散りばめられている。

質素な室内でありながらも落ち着いた重厚感を醸し出している中で、その豪勢な姿はなんとも滑稽に見えていた。

「お話は伺っております。ヘレナ様とクレア様が無事で何よりでした」

その滑稽な姿を見せるダニエルに顔色一つ変化させずに朗らかに口を開くザックスと、白いソファで満足そうにふんぞり返っているダニエルは相容れぬ存在だった。

「不幸中の幸いだったよ。ラインハルト様はさぞ、ご無念だっただろうが」

「いえいえ、ダニエル様とご息女様のご存命ならば、この町はさらに発展致しましょう」

ニヤらしいまるで遊女を値踏みしている男のような笑みを浮かべる。その顔を真正面から受け

止める事が出来るザックスはやはり場慣れている事が良く判った。

「ザックス殿のお目に適いますかな？」

「ええ、ダニエル様が統治を為されればさらに宜しくなるのではないでしょうかね」

「世辞が上手いですな」

豪快に笑みを浮かべるダニエルに愛想笑いを丁寧に返していると、扉を叩く音が二度響く。

「クレア様が参られたようだ」

開かれ入ってきたのは、赤いドレスを綺麗に着こなす一人の少女であった。普通ならばその美しい姿に見惚れてしまうほどだろうが、今だけではその無表情——というよりは不機嫌そうな顔をしているので、普通の人ならば眉の一つでも顰めそうではあったがダニエルはさして気にする素振りも見せないでザックスも対して反応する事は無かった。

下手に動いて心象を悪くされてはいけなかった。

「さあ、クレア様」

ダニエルの言葉に、従順に従うクレアはダニエルの横に立つと優雅な礼を見せる。その礼にザックスも起立すると挨拶を述べる。

「お初にお目に掛かります。私はニールの町へ商いと観光に訪れさせていただきました。ザックスと申します」

「申し訳ない。クレア様は少々事情があって喋ることができないのだ。ヘレナ様は心労から体調を崩されていてな」

「いえいえ、双子姫と言われるお人に目通り叶っただけでも幸運です」

「では、商談の話を致しましょうか」

「頼むよ」

ダニエルは意気揚々とザックスとの商談に加わり、クレアはその横でじっとザックスを見つめ続ける。

少々やりにくいと感じつつも、ザックスは話を進めていった。

話は何の衝突も無く、消化されていった。特に、目新しいものがザックスには無かったというものもある。それほど、カスパルがザックスに擦り寄ってきた話と同じだった。これには、流石のザックスも興ざめに失笑を禁じえなかったようだったが、そこは役者を演じきる。

ただ、気になったのは先ほどからずっとこちらを見つめてくるクレアの視線だった。

相変わらず、ダニエルの気分の良さそうな自慢話に適当な相槌を打ちつつも、視線はクレアに時折流す。

彼女は一体何を望んでいるのでしょうか。

そのような事を考えつつも、言葉によって意思疎通の出来ない人の心などザックスには読めるはずは無かった。まして今は形上、正式な商談中なのでこちらからおいそれと話しかけて良いものではなかった。

そうこうしている内に、ダニエルがはしゃぐ子供のような笑顔を浮かべながら商談は大団円を迎える。

「では、鉱山の件はよろしくお願い致します」

「うむ。君のような商人に任せるのが最良だと改めて判ったよ」

「いえいえ、ダニエル様も騎士とは思えないほどの商才をお持ちのようで。多才というお噂は本当のようですね」

その言葉に、照れ笑いを浮かべるダニエルにザックスは既に何処か楽しんでいる節があった。それほど、目の前にいる暫定領主は煽てれば煽てるほど、馬鹿になっていった。

「まったく、誰がそのような事を」

「民衆は、噂が好物ですから」

ダニエルの姿は、相手の言う事が全て正しいと信じて疑っていないと言わんばかりだった。

「ザックス殿、どうですか？ これより、共に食事でも」

「これは、有り難いと思いますが先客がおりまして」

「ふむ」

やんわりと断りを入れたが、ダニエルの顔に曇る。

面倒な性格をしている胸の奥底でため息を吐き出すと心底申し訳なさそうに先客の説明を行う

。

「共通の趣味。とでも言いましょうか。恥らうものを見せ合える人と会う予定でして」

男同士ならば、判ってくれるでしょう？

露骨な視線を飛ばすザックスにダニエルも何度か大げさに頷いてねっとりとした笑みを浮かべて理解を示した。

「それならば、仕方が無いな。楽しんでもらったほうが良い」

「ありがとうございます。その代わりと言っては何ですが今日はダニエル様と双子姫様に、差し上げたい物が」

持参してきた木箱をテーブルの上に乗せ、蓋を開ける。

「これは、なんと立派な剣か。これをくれるというのか？」

「はい。始めは骨董かと思いましたが詳しく調べるとかつての聖戦に使われた剣だとか」

確かに良質な剣ではあったが、聖戦で使われたかどうかをザックスは知らない。

「おお！ そのようなものがまだこの世に現存していたのか」

喜々とした表情を浮かべながら、抜刀し剣身に見惚れる。

「はい。骨董商の話によると儀礼剣であるようですが、指揮官が前線で振るい、味方を鼓舞する際に使うもののようです」

「良いものを貰った！」

機嫌を直してくれたようでほっと胸を撫で下ろす。そして、視線を移動させてクレアを見つめると彼女と目が合う。

その瞳にザックスは光を見た。

「クレア様とヘレナ様には、ドレスを持参致しました。これに」

「うむ。部屋へ運ばせよう」

クレアの事などどうでもいいと言わんばかりに貰った剣を眺めるダニエルに、本当に子供だ。とザックスは思った。

「では、私はこれにして」

「感謝するぞ。ザックスよ」とダニエルは言った。

「滅相もございません。商人は損得で動きますが、矜持を持ってお客様とお話させていただいておりますので」

「クレア!!」

ヘレナは開錠されて入ってきたクレアを見ると駆け出して抱き締めた。クレアが何か酷い事をされなかったか心配で身体の至るところを調べた。クレアは嫌がることもせずされるがままだったが、唐突にヘレナの頭を撫でた。

「クレア——ありがとう」

優しく撫でるその指先に涙を零しながらも笑みを浮かべて暫く、撫でられ続けていた。

暫くの間、続けていたクレアは静かに撫でるのを辞め、ある箱の元へ向かうと蓋を開ける。入室して来た時に側近の騎士が乱雑に置いて行ったザックスからの贈り物で中身はドレスであった。

「これは？」

そっと中身を取り出しながらクレアに問い掛けるとクレアは薄い赤に染まるドレスを手に持った。

「商人が下さったものでしょうか」

身体に合わせて見ると少々大きかったが、それでもそのドレスの美しさに変わりはない。

「綺麗」

思わず、そう呟くヘレナはクレアに向き直って互いにプレゼントされたであろう青と赤のドレスを見せ合いっこするかのよう、微笑んで見せた。

「クレア？」

クレアはそんなヘレナを他所に、ドレスの袖口を見つめている。不審に思い、ヘレナも覗くと一枚の書状が縫い付けられている。

「手紙？」

おもむろにクレアがその書状を引きちぎるように手に取った。ヘレナは少々、その行動に驚いたが、クレアは構わずに封を切る。その動作に、ヘレナも気を取り直してクレアに近寄り、内容を読み始める。

ヘレナの瞳が見開き、口元へ右手を翳(かざ)す。

「助け出す計画——」

書かれていた内容は山賊が頭を助けるという趣旨だった。そして、ヘレナ達には民衆を説得してほしいと言う依頼が書き込まれていた。

「私は、どうすれば」

願ってもない申し入れではあったが、ヘレナは逡巡する。だが、クレアはヘレナを見つめて小さく頷いて見せた事によって、ヘレナの決意は決まる。

妹が決意を胸に秘めているのに、姉の私が動かないなんてありえません。

「そうですね。私もグーテンベルクの名に恥じぬように動かねばなりません。共に、ヴァルトさ

んを助け出しましょう」

互いに手を取り合って見つめ合って微笑みあった。

——貴女がこうもはっきり微笑んだのはいつ以来でしょうか。

その思いに人知れず、ヘレナは感慨深さを隠すように唇を噛み締め、そっとクレアに身を寄せる。クレアもドレスを持ったまま、ヘレナの胸元に額を当てる。

「そして、真実を皆に伝えます。本当ならば、クレアには危険な目にあって欲しくはありません」

クレアは顔を挙げた。不安げに見えるその表情に心配はないと言わんばかりにヘレナは微笑みかけた。

大丈夫。

それは、自分自身にも言い聞かせるようにそう呟いた。

「ですが、私は。私自身を許せないのです。あの時、私はヴァルトさんを助ける事が出来なかった」

ダニエルに追い詰められた森の中。

「あの裁判では、無関係だった人達も居たはずです」

簡易裁判の中では、ヴァルトの無実を証言する事は出来なかった。その場に、クレアの姿はなく、ただヘレナの視線の先にはヴァルトの力ない微笑が張り付いた顔が見えていた。

そして、ダニエルの底冷えするような笑みを見ただけで、ヘレナを口を嚙むしかなかった。

「私は声を挙げる事が出来なかった」

その言葉はクレアに向けたものではない。けれども、自然と口から零れ落ちてしまった言葉だった。ヘレナの陰鬱な顔に、クレアがヘレナの右腕を掴んだ。

気にする必要は無い。

ヘレナにはそう言われている気がした。

「クレア……」

「ありがとう」

まだ自分達には利用価値がある。ヘレナはそう思うようになった。

公開処刑には領主の立会いが行われる。それが重犯罪者や重要な意味を持つ処刑だった場合は尚更立ち会い、演説を行う。そうする事によって、権力を誇示し、模倣や反意を削ぐ思惑が絡んでくる。

今回は、城の敷地内で行われる上に、教会関係者、それも司教を一人処刑する事を考えるならば、必ず暫定領主と、いまだ、領主の地位継承権を持っているグーテンベルク家の血縁者も出る必要が出てくる。

大丈夫。機会は巡ってくる。上手く行きます。絶対に。

ヘレナはそう自分自身に言い聞かせ、決意を胸に秘めてドレスを着合わせる事にした。

ダンの臭いをディックはきちんと嗅ぎ分けていた。だが、容易に姿を見せる事はしない。十二分に城門と距離を置き、違和感無く、まるで尿意が急に襲ってきた旅人を演じるダンが林の中へ隠れるまでじっと息を潜めていた。

「外部の手を借りる。ザックスという商人の馬車を故意に襲え、司教の処刑が始まった頃合いに町を立つ。城門を出たら即座に襲え」

ダンは口早に言った。

「大丈夫？」

「商人だ。約束を疎かには出来んはずだ。それに、信用はできる」

「解った」

ダンは布切れを落とした。

「判るな？」

「うん」

それは、ザックスの身に付けていた衣服の切れ端だった。

クレアが作り出すその空気と突き刺さった瞳。

宿屋に戻り、山賊達と向かい合ってもザックスの胸の中にはあの時の茶番劇よりもクレアの存在が目には焼きついていてた。

三人の山賊は、ザックスの報告を待っている。口火を切るザックスの表情は柔らかい。

「首尾は上手くいきました」

「そうか」とダンは言った。

「こっちも大丈夫だぜ？」とユーリは軽口を言うかのようにあっさりと言った。

「処刑はいよいよ明日ですね」

ポーは神妙な面持ちで処刑と言う単語を述べた。

「運命の日ってか。冗談きついよ」

「やるしかないです」

「そうだけどさ」

ユーリは嫌そうに顔を歪める。本来ならば、絶対に請け負う事の無い仕事という事になる。だが、彼らはそれを行う。

「怖気づこうが、計画は実行に移す」

ダンの言葉に、ユーリは手をひらひらと上下に振りながら、椅子に座りテーブルに右肘を置いて頬杖を作る。その表情には嫌々というものは消し去り、あるのはゆるやかな時の流れを待ち望む、まるで少年のような生き生きとした興奮が漲っていた。

「ザックスさん。大丈夫なんですか？」

ポーの問い掛けに、ザックスは気難しげに腕を組んだ。

「双子姫ですか。そこは、難しいかもしれませんね」

「やっぱりね。清純で、か弱いお姫様を血生臭い争いに巻き込むなんて男のする事じゃない」
うんうん。

そう何度も頷くユーリにポーは呆れたようにため息を漏らした。

「ユーリらしいね」

「女には優しくが、当たり前だろ？」

「言葉の裏がこれほど透けて見えるのも珍しいですよ」

「ひでえ。善意だって」

「でも、やりたいんでしょ？」

「うん」

そのやり取りを余所目に、ダンの視線が対面に座るザックスを捉える。

「ザックス、本音はどうなんだ」

意外にその言葉を聞き入れると、ザックスは神妙そうな面持ちでダンを静かに見つめて、呟いた。

「ダンさんは、案外と商人に向いていそうですね」

予想しなかった言葉に、ダンも表情を変えて驚き、ユーリとポーに至っては呆気にとられ、突然何を言い出したのかと訝しがる。

「思いもしないわ。そんな考え」

「そこは、同意できますよ。とにかく、ザックスさん、どういう意味ですか？」

二人の反応に、苦笑いを貼り付けたザックスは気を取り直して口を開く。

「ダニエルは今、自分に酔いしれています。これは、ヴァルトさんに仲間が居た事すら頭の片隅に追いやられていると思いますよ？」

「討伐隊編成がまだされていない」とダンが言った。

確かに、今だダニエルは逃げているダン達に向けて討伐隊を編成してはいない。

「そうです。付け入る所は存外が多い」

「で？ どうしてダンが商人に向いてるなんて言ったのよ」とユーリが先を急かす。

「それは、私が可能性を言わなかったからですよ」

「可能性、ですか」とポーは眉を顰める。

「その可能性を私から嗅ぎ取った。もしかしたら、顔に出ていたのかもしれませんが。それを、あざとく見つける鋭さに、元々感じ入る何かを握っていた観察する視野の広さ」

ザックスは、ダンを見つめた。ダンはザックスに目を合わせようとしていない。まるで、心外だとでも思っているかのようだった。

「商人に、必要な要素です。特に、交渉ごとにおいては。ですから、お付の交渉人なんて、良さそうかな。と思ひましてね」

ザックスの話にポーとユーリは感心したようにダンを眺めた。

「ある意味、護衛にももってこいだよな」

「山賊業を辞めても職の当てがあるのは羨ましいです」

「話を進めろ。ザックス」

ダン是不機嫌そうに言った。

その言葉に、三人は小さく苦笑いを浮かべて、ザックスは口を開いていく。

「ダニエルと会ったとき、案の定喋れないクレア様を招いていました。こちらの読み通り、喋る事が出来ないから何かを口走る危険はないと踏んでいたのでしょう。彼女は一言も喋る事はしませんでしたしね」

嘲笑う。ザックスはその時を思い出したかのように笑みを作り出していた。

「ですが、ダニエルは一つ勘違いしていました。本当にクレア様は、喋れなく引っ込み思案で従順だと、信じて疑っていなかった」

訝しがっても三人の山賊はその場に居なかったのも、ザックスの笑みが何を意味するのかを知る術を持ちはしない。

「俺は、合ってると思うけど」

「僕もそう思いましたけど」

ダンは無言のままだった。ただ、ザックスの言葉を急かすようにも思えるほどに、小さく瞼を閉じて視線を鋭く、細くした。

「恐らく、何か喋れなくなる怖い出来事、あるいはもっと別の何かがあったのでしょうか。だから喋れず、感情の起伏も乏しくなってしまった」

声を失うほどの恐ろしい体験を経験していない山賊達からすれば想像も付かない事だろうが、ザックスはヴァルト達山賊に襲撃された時に、上手く喋る事が出来なかったのもなんとなく理解する事だけは出来ていた。

「ですが、彼女は決して理性を失ってはいない。考えて、行動できる人間。考え、行動出来るならば、抵抗する事も出来る」

三人の山賊は真剣に聞き入っていく。

「ええ。クレア様の瞳には意志がはっきりと宿っていました。私の熱い視線に応えるように」

緩い緊張を纏うクレアの姿に理性的な瞳の揺らめき、そしてそれを知り得た時——ザックスには彼女の持つ冷たい空気が作られた物だと悟ったのだった。

「厭らしい」とユーリが酷く恨めしそうにザックスを睨みつけた。

「ちょっと、ユーリ」とポーが言った。

その言葉に、苦笑いを浮かべるしかないがユーリもポーも即座にやり取りを治めて、ザックスの言葉を待つ辺り空気を読んでいた。

「もしかするならば、クレア様は自らを罰し続けているのかもしれない」

ダンは静かに話しに聞き入っている。だが、その視線はどこかを見つめているように固定されていた。

「——敢えて、声を」とポーは言った。

「可能性です」

ポーは小さく唸った。お姫様がそれほどの覚悟を決めた深い理由が思いつかないようだった。ポーからすれば、身分も生活観もまったく判らないので、さらに混乱しているのかもしれない。

衣食住が揃い、家族が居る。多くの人に囲まれて、慕われて、何故そこまでの覚悟をしたのか

「判るかもね」とユーリは何処か虚空を見つめるように呟いた。

「判りますか」

ザックスが目を細めた。

「俺だって、そうしたいと思った時があったんだよね」

「初耳ですよ？」とポーが言った。

ダンが静かに腕を組んで目を閉じている。

「言っていないからね」

ユーリは何処か、思案顔に顔を歪め、ゆっくりと口を開いていく。

「あのお姫様はきっとお姉さんにもぶつける事が出来なかったんだよ。色々と。だから、どうにも後に戻れなくなったんじゃないかな。滅茶苦茶なんだけど、喚き散らしたいけど、それを全て受け入れてくれる人が近くに居なかった。きっと、お姉さんにも自分の両親にも言えないくらいのことだったんだと思うな」

言葉を選び直すかのように、ユーリは一旦間を置く。

「俺はさ。ぶつける相手、居たんだ。それが両親でさ。だから色々滅茶苦茶になってたけど、全てぶつけた。悪いとは思ったけど、どうする事も出来なかったし、ぶつけることに後悔なんてしていない。だからかも、やっぱ似ていると思ったからなのかなってね」

ユーリはそう言ってから笑った。全て済んだ事だと言わんばかりに清々しい笑顔だった。

「クレアは妹で、ヘレナってお姉さんを大切に思うから、溜め込んで溜め込んで今の自分を創ったのでしょうか」

ポーは人差し指を唇に当てつつも呟いた。その仕草が妙に色っぽく、ポーを除く三人の視線が集まる。

「でも、そうだとするならば可能性はあるかもしれませんね」

視線に気付く事も無く出てきた言葉に、ダンは難しい問題に直面している学者のようだった。眉間に皺が寄り、険しい山脈を作りなす。

「五分五分か」

短くも重く吐き出された言葉に、ザックスは答える。

「そうですね。ただ、ダニエルがどう動くかによりますよ」

「だが、恐らくは」とダンは続けた。

「そう願いたいという思いもありますが、私からすると分は決して悪くはありません」

ザックスはそう受け答える。

そのやり取りにユーリとポーは取り残されていく。

「ついていけないんだけど」

「僕に聞かないで下さい」

悲しそうな顔をポーに向けるユーリに、ポーは呆れながら声を出していた。その二人に気付き、ダンは言葉をそちらに向ける。

「問題は無い」

「ええ、二人は計画通りに動けば良いのですよ」とザックスも言った。

なんとも言えない連携を見せ付けられて少々面を食らったユーリとポーだったが、諦めたよう

に肩を落として息を吐き出す。

「おう」

「そう、ですかね」

「明日に備える。各自散開して集合だ」とダンは言った。

「ご武運を、お祈りします」

ザックスは立ち上がる三人に向けて真剣な面持ちでそう投げ掛けた。

「本当、今は聖都教にすら縋りたい気分だしな」とユーリが言った。

「神様にでしょ？」

「まあ、そうだな。教えというよりは——神様助けて!!」

ユーリが指を組んで天を仰ぎ、大声を挙げた。

「煩い」

ダンの不機嫌な声に、ユーリは「はいはい」と言い、ポーは笑顔を作った。

夜は更けていく。

俄かにニールの町は興奮をひた隠すかのような騒々しさを漂わせつつも、日が昇るのを待ちわびているかのようであった。

人々の口から、振り動かす身体から沸き起こる喧騒が町全体を包み込んだ。

領主城の広場は、すっかりとその姿を処刑場へと変えている。急造された木造の高台に釣り下がる二本の縄が弧を作り垂れている。

処刑場の門前には数十を越える人々が集まり、衛兵が作り出す壁ごしから処刑を心待ちにしていた。

誰もが願っていた。ある者は、好奇心に目を輝かせながらその処刑を今か今かと待ちわびる。ある者は、眉間に皺を寄せ拳げながら、何やら呟きながらも処刑台を見つめている。

処刑の時が来た事を告げるような大きな歓声が拳がり、ダニエルが高台に昇った。後ろからカスパルが昇ってくるが、必死に抵抗しているようで身をよじっている。

「観念しろ!!」

野次が飛ぶとそれに呼応するかのようになり、カスパルに向けて罵詈雑言が投げ掛けられる。

よくも今まで騙してきたな!

お前が俺の娘を攫ったんだろう!!

カスパルが奴隷商人とも関わりがあった事まで露見していたので、民衆からの辛辣な声が押し寄せてくる。それはまるで大雨によって作り出された土砂を含む濁流の唸り声のような低く、それでいて地鳴りのような音となっていた。

「静まれ!」

その喧騒を、ダニエルが治めていく。すると、その濁流は途端に姿を消していく。民衆はダニエルの言葉に、徐々に口を噤み始め、処刑の始まりを待ち始める。

まだ小さなざわめきこそあれど、自分の声が届くと判断したであろうダニエルは大声を張り上げた。

「これより、カスパル・セレストン・グラネストの処刑を執行する!!」

鎖帷子の鎧にその堂々とした佇まいに民衆は魅入っているように、誰もがダニエルを見つめていた。

書状を開き、ダニエルは罪状を読み上げ始める。

「罪状、卑劣にも司教という聖職の立場ながら金に溺れ、賄賂を受け取り奴隷商人と結託し、人身売買を不当に行った!!」

カスパルは読み上げられる最中にも暴れているが猿轡(さるぐつわ)を咥えているので、喋る事は出来なかった。それでも、縄の元で騎士二人に抑え付けられながらも逃げ出そうと足掻いている。

「さらに、邪悪なる野心を持ちニールの町を支配しようと画策! 聖都教の教えに反し賊徒を金で釣り上げ引き込み、グーテンベルク家ご息女を誘拐し、領主で在られたラインハルト様を殺害!」

誰かの嗚咽が聞こえ、誰かが崩れ落ちる。多くの者が領主であるラインハルトの理不尽なる死を悼み、カスパルを恨むように視線を突き刺していく。

「この大罪には死を持って罰する必要があることは明白!」

その言葉に、民衆の割れんばかりの喝采が沸き起こる。

暫くの間、続く地鳴りのような声にダニエルは口を挟む事もせず、待っていた。やがて、民衆が自発的に大人しくなっていくと静かに、だがはっきりとした声を挙げる。

「絞首を持って、処刑する。カスパルよ何か良い残した事はあるか」

そう言って、猿轡を外されたカスパルは大声を張り上げる。

「わ、私は無実だ!! 全て、ダニエルが謀った事だ！」

失笑がダニエルから漏れる。

「見苦しい姿を」とダニエルは言った。

「見よ!! これが、聖都教で私腹を肥やし続け着け、墮落した聖職者の姿だ! なんと哀れな存在だろうか！」

民衆は憎悪を隠す事せずにカスパルを罵倒する。

「さらにもう一つ。この男は罪を犯している!!」

ダニエルはその中で、大声を挙げて民衆の視線を一身に浴びる。

「十年前、一人の女性が殺された! 犯人は直ぐに逮捕され処刑された事を覚えている者も居るだろう」

真剣に民衆は聞き入っていく。十年前の事を覚えている者達は頷いているようだった。

「あの時、ネーナ様は賊徒に辱められ、殺された。その現場に現れクレア様を救い出したのは誰だ!!」

そんな。

誰かの声が零れ落ちる。明かされた真実に誰もが声を失う。

「ネーナ・グーテンベルクの殺害を指示したのは、この男である事が判った!!」

ダニエルの言葉に、堰き止めていた何かが弾け飛ぶ。

悪魔!

領主様とネーナ様を返せ!

聖都教を穢した豚には純然たる死を!

神を裏切り悪魔に魂を売った男め!

その怒号に始まり、カスパルへ向けて誰かが石を投げつけた。それは、高台に届きはしなかったが、民衆は誰もが目撃した。やがて、民衆は身近にあった石や枝——とにかく、投げられるようなものを投げ始めた。

これには、衛兵はは慌てて止めに入る。ダニエルも、少々面を食らったようだったが、その喧騒の中で声を荒げる。

「このような男は、死を持ってしても罪を償う事は出来ない!! しかし、我々は死を持ってほかに、償わせる方法を知らぬ! ならば、我々は神に最後の審判を委ねようではないか! ここで死刑を執行し、その後は身を焼く! 我々人が責任を持って神の元へ送り、最後の審判を!」

裁きを!!

悪魔に罰を!!

民衆の大号令に後押しされるように、カスパルの首に縄が掛けられる。乗っているのは小さい

台座だった。小さい子供が座るような、小さな小さな台。だが、これが消えればカスパルは自分の重さを首だけで受け止める事になる。

「暴れるな！」

自ら、暴れて台を蹴落としたいかと思えるほど、必死に抵抗するカスパルにダニエルは滑稽だと嘲笑う顔を必死に隠した。

民衆から見えないように。

民衆は、罵詈雑言を投げ掛け続ける。今まで、教会に尽くしてきた全てを裏切られた。そう思っているように、民衆の怒りは凄まじかった。

「刑を執行する！」

乱暴に台を蹴られ、カスパルは宙に浮いた。

そして始めるお祭り騒ぎの喧騒に、拍手喝采。皆が歓喜する。

苦しみぬいて死ね！

誰かが叫ぶ。

死ね、と誰かが叫ぶ。

留まる事の知らない罵詈雑言の中で、カスパルは人とも思えぬほどにほどに醜い顔になっていたが、やがて白目を剥いて意識を手放した。カスパルにとって、絞首は幸いだったのかもしれない。

僅かな痛みと苦しみで気絶し、そのまま死んでゆける。何よりも、耳を劈く（つんざ）ような声が、憎悪を持って向けられ続けていたのだ。

すでに動かなくなったカスパルは吊られた反動で暫くぶらぶらと身体を揺らした後、落ち着いた。

ダニエルは笑みを必死に隠した。その顔は、傍から見れば苦しんでいるようにも見えたのだろうか。民衆からダニエル様は悪くない。当然の事をした。などの歓声も拳がったほどだった。

暫くして、カスパルは肩を震わせてから、痙攣を始めていた。

口笛が吹かれる。

歓声が拳がる。それは、まさに祭りだった。

*

喧騒を遠くに感じつつ、ヘレナとクレアは困っていた。ダニエルは当然、グーテンベルク家の息女である自分達を処刑場の立会いさせると思いこんでいた。だが、二人は喧騒を軟禁されている部屋の中から聞いているだけだった。

「どうして、私達は刑に立ち会う事が出来ないのですか!!」

ヘレナの叫び声が響く。クレアはじっとベッドを見つめていた。

「助けられない……これでは」

涙目になりつつもクレアへ視線を向かわせる。

「クレア、どうしましょう」

「助けてあげなければ。民衆はただ悪魔の甘言に惑わされているのに」

ヘレナは力無く言った。

「クレア？」

おもむろにクレアがベッドのシーツを手に握り、丸めていく。

「何を——！」

クレアは貰ったドレスをも丸めてシーツと結ばせ始める。

ヘレナは窓を見た。鍵は掛かっていないがここは二階だった。だが、ヘレナの顔をきつく引き締められている。クレアはヘレナを見つめ、二人は顔き合った。

「やりましょう。クレア」

クローゼットからあるだけの衣類を取り出して結び付けていく。しっかりときつく、ディックに習った縄の縛り方を実践しながら長く太い縄を作る。

「しっかり結んでくださいね」

ベッドの足に縄を巻きつける。まだまだ長さが足りないが、目算で足りそうだとヘレナは思った。

「急がないと……」

ヘレナはクレアを見つめる。

「クレア。ごめんなさい」とヘレナは言った。

クレアは縛り付けながらも不思議そうに視線をヘレナに向ける。

「知っていたの。クレアはどうして、喋らなくなったかを。お母様が殺された日から、クレアは変わったわ。でも、もう——」

クレアは手を止めていた。

「クレアだけの責任ではないの。私も、きっとお父様も。クレアだけではないわ。皆、一緒になって同じくらい苦しんだはずよ。それでも、皆。前を向いて行ったの」

既に、クレアの纏っていた冷たい空気は消えていた。口を噤んで視線を手元に落としている。

「だから——」

「違う」

クレアは口を開いていた。その瞳は揺れているが真っ直ぐとヘレナを見つめ返していた。

「忘れない。絶対に」

「もう、良いのですよ」

「お母様は言ったの。絶対に喋ってはいけないって。だから、ずっと喋らなかった。ずっと。だって、喋ってしまえば全てを失うと言われたの。お父様も、お姉様も、私も。だから、だからずっと——忘れない。忘れたくないよ。私が約束を守らないと、皆、皆居なくなってしまうの!!」

ヘレナはクレアを抱き締めた。クレアが泣いていたわけではない。ヘレナが泣いていた。クレアは泣く事すら忘れてしまったかのように、苦しそうな顔をしていた。

「ありがとう」

ヘレナは言った。

「良いのです。クレアは約束を守っていた。だから、大丈夫。もう喋っても良いのです。大丈夫

ですから」

ヘレナは自分の愛していた妹は、ニールの町とグーテンベルク家をずっと背負い続けてきた事を知った。

母が殺された時、クレアは半狂乱だったのにも関わらず、一言も声を挙げなかった。その時から、クレアの声無き約束が始まっていた事を知った。

「大丈夫。もう、あの悪魔は居なくなります」

ヘレナは今回の一件でクレアの約束が消える事だけを幸運だと信じて疑わなかった。クレアを苦しめ続けた十年前の悪魔は今日、まさに今処刑されているのだから。

けれども、ヘレナは止まらない。

「お姉様。助けたい。助けたいよ」

搾り出された言葉に、ヘレナは大きく頷いて見せる。

「絶対に助けましょう。あの人はこんな所で死なせてはいけない人なんですから」

賊徒であったとしても、彼らは人だった。ディックは獣人だったが悪い人ではなかった。可笑しいとヘレナは微笑みながら作業を続ける。

善い人なのに、悪党だった。そんな不思議な人達をヘレナは心の底から助けたいと願っていた。

一夜。たった、一夜だけを共に過ごしただけの悪党を助けたいと思う自分は変なのだろうか。そんな自問自答に今更、答えなど出はしない。ヘレナは薄く笑い、クレアも同じように笑顔を作る。

窓から垂れる色とりどりの縄は二階下の地面まで伸びていた。

「クレア。私が先に行きます」

華奢な身体を必死に行使して、お姫様は降りていく。

「絶対に、助けましょう」

悪党には悪党の矜持がある。

何とも、おかしい話だった。けれども、ヘレナにはその思いがおぼろげながら感じ合う事が出来ていた。良く判っていない。けれども、判る気がする。突飛もない自信があった。

今の自分がその言葉と同じように、行動していると感じていた。

無事に降りると二人は駆け出す。

「広場へ——待ってください。絶対に、助け出しますから」

クレアが安らぎを感じ、自分に縋ってくれるようになってくれた。それに応える必要がある。だけれど、その後押しをしてくれたのは彼らに他ならない。どんな事情であったとしても、ヘレナはあの悪党を助けなければならないと思っていた。

それはクレアも同じで、彼女の眼には今までのような何に関しても無関心だったものではない。ディックと関わった時のような、意思を窺い知れた。

二人は助けたいと思った。今の二人にはそれだけで。行動するにはそれだけで十分だった。

誰もが喜び、誰もが声を挙げた。それは、今まで溜まっていた様々なものが形を変えて吐露された結果だった。人々の鬱憤が、正当化された悪へと向けられた時、人々は新しく誕生した英雄に酔いしれ、悪が滅んだ歴史的な瞬間に立ち会えたという悦喜（えつき）に身を震わせた。

今だけは、ダニエルでさえ、この世界が自分自身を受け入れた事を疑いはしなかった。いや、確信を得た。それほど、彼の顔は狂喜していた。その顔を醜く歪ませている様は、英雄に似つかわしくないほどに獣のような貪欲さを兼ね備えていた。

処刑場の歓声は鳴り止まず、誰もがこの処刑という祭りを楽しんでいた。その狂喜が渦巻く処刑場内で、ただ処刑を待つだけとなったヴァルトは、虚ろな瞳で目の前に広がる眩しい処刑場を眺めながら、不思議がっていた。

てっきり、豚と一緒に宙に浮かぶとばかりに思っていたが、豚が前座扱いにされて、ヴァルトが見上げる先で今、宙にぶら下がっていたからだった。

面倒そうに眺め続けるヴァルトには猿轡が啜えられていない。彼は非常に従順だったので、騎士も大して緊張せずにヴァルトの後ろに立ち、高台に向かわせる順番を待っていた。

うるせえな。

ヴァルトはそんな独り言を呟いた。それほど、耳に堪えるほど、民衆の馬鹿騒ぎが凄かった。

その様子を、次は高台から拝む側になるというのに、ヴァルトは妙な平静感に襲われている。それもそうだ。民衆の隙間から見知った男をヴァルトは見つけ出していた。

本当に助け出そうとしている事に、嬉しさ半分、馬鹿な真似をと怒る気持ちが半分。ただ、感情を面に出す事はしない。

裁判が終わった後、牢獄へ放り込まれた時に粗方、全ての思いでもぶちまけたからなのかもしれないが、ヴァルトは落ち着いていた。あっけらかんとしていてまるで、抜け殻のようでもあった。

周りの騎士から見ると、ヴァルトは世捨て人に思えるほどに達観している姿に見えたようで、拷問は裁判の前の一回だけに留まっていた。それでも、ヴァルトの手の甲には烙印が刻まれている。罪を犯した者に烙印は押されるが、ヴァルトには右手以外にも、背中や腹に烙印を刻まれている。でっち上げの余罪を含めて、ヴァルトには今五つほどの罪があり、当然ながら処刑になったのだ。

ダニエルはヴァルトの様子を伺い、観念したと思ひ込んだようで、特に気にもしていなかった。尤も、今のダニエルは町の支配者になった事と、ザックスとの交渉から鉾山の存在を知り、ヴァルトどころではなかった。

やがて、歓声が一際大きくなると、カスパルが死んだという事をダニエルが大声で宣言した。その宣言に反応して、騎士がヴァルトの腕を掴むと無理やり立たせ、歩かせる。

「さっさと歩け！」

曇り空から零れ落ちてくる太陽の日に目を細めた。

「——眩しい」

階段をゆったりと昇っていく。十段ほど上がれば、顔を下に向けるほどのところに民衆が蠢い

ている。その視線は恨み、汚物の見るように侮蔑に塗れていた。

ヴァルトはそんな視線を一身に浴びながらも、上の空だった。いや、視線をしきりに動かしているのは確かだったが纏う空気はすでに死人のように止まっていた。

「これより、賊徒の処刑を執り行う」とダニエルは言った。

ヴァルトは膝を付き、静かに座っている。

「罪状!! 司教と共謀し領主様のご息女の誘拐を企て実行！」

民衆の騒ぎなどヴァルトの耳には入ってこない。ただ、蠢く姿を漫然と眺めているだけだった。

ダニエルはその姿を見る事も無く、大声を張り上げていく。

「さらに、ご息女に危害を加えるその粗暴はまさに極悪の一言!! これにより、絞首の刑を持って断罪する!!」

侮蔑が混じる。危害。その言葉には様々な意味が内包されていた。あえて、大きな括りを民衆に提示し、彼らの妄想を掻き立てた。

浴びせられる言葉は辛辣で刺々しい。獣を見るような瞳がヴァルトに突き刺さっていく。

罵詈雑言が轟くその真っ只中で、三人の山賊は時を待っていた。だが、一向にその時は来ない。ダンは珍しく焦るかのように、だらりと伸ばした指先で太腿を小突く。

「まだか。ディック、ザックス……」

その喧きの頃合い、城門の左側近くの民衆に紛れ込む二人の若い男女は不安げに高台を眺めている。

「頭」

「かしらぁ」

目の前で、ダニエルがヴァルトに何やら喋っているところが民衆の頭と頭の間から見えてくる。その喧きは酷く小さい。それでも、焦る気持ちを行動に結び付けないのは、最善な行動とは何かを理解しているのだろう。

ただ、彼らはひたすらに待つ。機先となるべく一報を待ちわびる。

三人が、悪意ある民衆の中で異質。だが、誰もが処刑台の悪党を眺めていた。

処刑台に上がっているダニエルはヴァルトに嘲笑を見せ付けながら、ゆっくりと口を開いていく。

「言い残した事はあるか？ 賊徒であろうと最後の言葉くらいは喋らせてやるぞ」

上に立つ者としての慈悲。なんて生易しいものではなかった。ダニエルの顔と態度には恍惚としながら、全てを見下ろす権威を持った事による驕りが隠れる事無く露になっている。

ヴァルトはダニエルを見上げる。まじまじとダニエルの顔を見たわけではない。ただ、その言葉に、ヴァルトは笑った。その顔を見て、笑って見せた。その顔は、悪い事を思いついた子供のような含み笑いに似ていた。

不意の笑みに、ダニエルは不機嫌そうに顔を顰める。

ヴァルトの顔はこれから死ぬような人の顔に見えないほど生き生きとして、先ほどのような虚ろさなどどこかへ消え失せていた。

「俺はよ、悪党なんよ。それが全てじゃねえのかい？」とヴァルト言った。

「ふん。殊勝な事だな」とダニエルは吐き捨てた。

騎士に指示を出して、ヴァルトを起立させると、台座に乗せて縄をヴァルトの首に掛ける。

民衆の騒ぎがまた一層大きくなっていく。その民衆の群れは人の死を求め彷徨う悪鬼のような禍々しさすら感じ得るほどの熱気。死の臭いを嗅ぎ分けて、その死に群がる。

狂喜に冒された民衆に、理性の色は薄れていた。

その狂喜に急かされている気分には陥っていたのは、理性を宿す三人の悪党だった。

ダンには必死に考える。計画の初手が失敗に終わった場合。ヴァルトが宙に浮いてからが最後の勝負になる。自分が先行し、なんとか縄だけでも落とす事が出来るならば、ヴァルトも戦力になる。そんな思いを胸に秘めていた。だが、それでも、この状況で肝を冷やし続けているダンからすれば限界に近い。

それは、ユーリとポーも同じであった。二人も、ダンと同じ結論に到達していた。遇にポーが城壁を牽制しつつ、ユーリがダンの援護へ回る。二人は静かに視線で会話をしていく。揺らめく互いの瞳に、同じ覚悟を持っている事に対しての安堵の微笑みと、仲間として頼りになれるという信頼感がそこにはあった。

処刑が実行される。その気配が高まる中で、ダニエルは声を張り上げるために、一歩前に入る。

。

その光景に、強引に駆け抜けるかどうかダンが逡巡し、ユーリとポーが強引に動こうとした時——

「大熊が出たぞ!!」

三人が待っていた合図が伝わってきた。誰かの声、聞いた事の無い声。それでも確かにそれは合図だった。

その言葉に、民衆は一度気付きはしなかった。それほど熱狂の渦に冒されていた。けれども、ダニエルは違っていた。高台に駆け上がってくる騎士に耳打ちを要件を聞き始める。その姿を見て、民衆もようやく何事だというざわめきを起こし始める。

「なんだと……」

ダニエルは血相を変えた。

「商人が襲われている!!」

「ザックスという商人が襲われているぞ！」

ポーとユーリが民衆の中で声を張り上げた。その言葉に、民衆は混乱する。

まさか、町に熊が。

そんな馬鹿な。

見張りは何をやってるんだ。

ザックスと言えば、領主様とも面識がある大商人じゃないか？

興が殺がれる。まさに今がそうであった。民衆は一様に動揺を始め、衛兵は浮き足始める。中でも顕著だったのはダニエルだった。

「騎士と衛兵を向かわせろ！」とダニエルは慌てて指示を飛ばす。

ザックスが襲われている。これほど、ダニエルに打撃を与えるものはなかった。大事な商談相手、そして豪商という商人でも階級があれば上位に食い込む男。ダニエルとて、ザックスという商人の価値が判らないほど馬鹿ではなかった。だが、ダニエルには上に立つ者としての素質が無かった。

民衆もダニエルのうろたえぶりに不安げな喧騒を撒き散らし、少数の人は処刑場を後にして町の中へ駆けて行った。英雄の焦りが、民衆や付き従う衛兵に不安を与えた。慌てて、その後を追うように、処刑場に残っていた騎士十名ほどが、同じく残っていた衛兵を引き連れて町へ消えていく。

こんな事をしている場合ではないかもしれない。そのような風潮にダニエルは、慌てて大声を張り上げた。

「落ち着くのだ!! 今、我ら騎士団の精鋭を向かわせた！」

処刑場には城壁の上に四人の騎士が巡回し、下には衛兵が六人ほどで槍を握り、壁となっている。そして高台の周りに騎士が四人とダニエル。

「刑は執行する！」

その言葉がユーリにとっての合図だった。騎士と衛兵は確実に減った。そして、民衆の混乱に残った衛兵も浮き足立っている。

城門近くに居たユーリが城門を見張っている衛兵に近寄った。

「なんだ貴様は」

「アンタに用は無い」

ニヤリと笑い、ユーリは手に隠し持っていた短剣を勢い良く衛兵の足の甲に投げつける。

「あ、足が!!」

いきなりの激痛に大声を張り上げる衛兵を尻目に、ユーリは鎖を縛っている縄を切り、鉄格子を落とした。

「な、なんだ。鉄格子が落ちたぞ！」と誰かが叫ぶ。

その言葉に、ボーは纏っていたローブを脱ぎ去ると隠し持っていた弓を構えた。すると、ユーリが城壁へ続く階段を駆け登る。

ボーは狙いを定めると相手が此方を見つけた時に、矢を手放した。その矢は騎士の喉元へ吸い込まれるように命中した。騎士は射抜かれた衝撃で城壁から落下すると、鈍い音を響かせて地面に伏せた。

その騒ぎに民衆が悲鳴を挙げる。ユーリが残りの騎士に襲い掛かり、騎士も応戦して抜刀。切り結ぶ。

「今度は、一体何だと言うのだ!!」とダニエルは大声で叫んで状況を知ろうとした。

その間に、ボーが反対側の城壁に居る騎士目掛けて矢を射って、見事に命中させるが、狙いがずれていたのか騎士の右肩を貫くに終わった。

その喧騒の中で、ダンは一たすらに民衆の間を縫って駆けた。誰にも止められず、衛兵の前に躍り出る。

「と、止まれ!!」と衛兵が叫ぶ。

既に、ダンの手にはナイフが握られ鈍く光っていた。

「無理な相談だ」

その先に、ダンはあるで獣のように低い態勢になってその衛兵の胸元にナイフを差し込ませた。

相手が死んだかどうかをダンを確認する事もせず、そのまま走り続けて衛兵の壁を突破し、高台の脚に飛び移ると器用に足場を確保しながら高台に登っていった。

「賊か！」とダニエルは叫ぶ。

ヴァルトを縄に掛けていた騎士二人が抜刀し、上がって来たダンに襲いかかる。二対一だが、ダンはその両手に握る短剣を巧み操り応戦する。

「させません！」

ポーは高台を視界に入れる。

反対側の城壁から、騎士が放った矢がポー目掛け飛んでくるが、ポーは何の迷いもなく民衆を盾にして避ける。身代わりになった男の叫び声が響き渡るがポーは構わず、盾から身を出し、射構えると狙い放つ。狙ったのは高台のダンを狙っている騎士だ。

「賊徒が出たぞ!!」と民衆の誰かが叫び、場が混乱にうねって行く。

その光景に、ヴァルトは不敵な笑みを浮かべていた。

「三人で、喧嘩売るなんてよ。俺は、そんな無茶、教えてないんだがなあ」

その顔は何処か嬉しそうでもあり、悲しそうでもあった。

「悪しき悪魔どもが仲間を取り戻しに来たか!!」

ダニエルは剣を抜き去るも、ダンに襲い掛かる事はしなかった。既に、高台には四人の騎士がダンを囲んでいる。

「一同、聞け!! 賊徒は、双子姫を辱め、恥辱の限りを尽くした極悪人である!! 決して、許してならない！」

その状況にダニエルは嘲笑を浮かべた後に、そう大声を張り上げ、民衆に向けて喋る。

「ニールの町に住まう民達よ！ 今こそ、立ち上がりこの町を救うのだ!!」

「ちい、邪魔だ!!」とダンが忌々しく呟く。

彼の目の前には三人の騎士が剣を握り、立っている。一人は喉を掻き切ったが、如何せん人数差によって分が悪かった。

殺せ！ 悪魔を殺せ！

石を投げろ！

悪魔め、地獄に堕ちろ！

民衆の怒りが行動を呼び、ダンの背中に石を投げ、ポーに襲い掛かる。

「ダン!!」とユーリが叫んだ。

騎士を城壁の下になんとか叩き落すと、自分もダンの元へ向かうために階段を駆け下りようとするが、衛兵が道を塞ぐ。

「援護に——」とポーが矢を放った。

その矢は反対側の騎士の胸に命中して射殺したが、それを目視する事もせずポーは走り出す。

だが、民衆の石がポーの頭に当たり、ポーは思わず膝を折った。頭から、血が滴り落ちるが、ポーは立ち上がって走り出そうとするが足元は覚束ない。その先では民衆の男達が壁を作り、行く手を塞ぐ。

「ポー！ てめえら!!」とユーリが叫ぶ。

しかし、ユーリも同じく道ふさがれているので容易に動く事は出来なかった。

「刑を執行するぞ。一人、手伝え」とダニエルは不敵に笑みを零して騎士の一人に指示を飛ばす。

ダンが騎士に飛び掛るも、横から迫る剣を避けると間合いを開ける暇を与えず、残りの騎士が斬り掛かって来る。

「早く、縄を掛ける」とダニエルが騎士を急かす。

ダニエルの足先は台に乗せられている。すぐに蹴れるようにしていた。

「かしらあ!!」

三人の叫びが轟き、ダニエルが狂喜を浮かべて台を蹴った。

ヴァルトの身体が宙に浮かぶ。

「うわあああ！ 頭!!」

ポーの叫び声と共に、目の前を塞いでいる男を刺し殺した。その行動に民衆は絶叫し道を開けるも、直ぐに衛兵がポーに襲い掛かって来る。

「どけえ！」

ユーリが衛兵を階段から蹴り落として駆け下りると、ポーの元へ駆けて行く。

「一步も通すな!!」と衛兵が叫ぶ。

ダンが投げナイフを投げるも、騎士にそれを弾かれてしまう。今だ、ヴァルトはぶら下がっている。

「クソが！」

ダンは肩を斬られ、脇下の皮を裂かれ血まみれになり、肩で息をしつつも吐き捨てる。四人の鎖帷子を纏う騎士相手に、ダンは衣類だけで武装は短剣とナイフだけだった。

「殺せ、殺せ!!」

ダニエルは醜態を隠そうともせずにそう叫んだ。尤も、今、この場にいる誰がダニエルのその姿に目を留めるはずは無く、皆が山賊の出現に驚き、または熱狂し歓声や悲鳴を挙げている。

熱気に溢れたその処刑場はまさに祭りの渦中といっても過言ではなかった。人々は即席の闘技場で騎士と賊徒の殺し合いに熱狂している。血が滾り、血が飛べば喜び、誰かが死ねば健闘でも讃えるかのような拍手が鳴り響く。

少女達は絶句した。この凄惨な現場はどういうことなのか。頭で上手く考える事が出来ない。ただ口元を手で覆い隠し、眼を見開いて狂喜の祭りに、恐怖を覚え身体が震えを始める。それでも、ヘレナは叫んだ。ヴァルトの姿を見て、彼女は泣きながら叫んだ。

「辞めて!!」

熱狂の中でその叫び声はあまりにも無力だった。

目の前で行われている狂乱に、ヘレナは声を荒げ続ける。

「辞めてください!!」とクレアも同じく叫ぶ。

その顔は必死だった。狂う全ての人に投げ掛けるその大声は悲痛な叫びでしかない。まるで、十年分溜めてきたものを吐き出すかのように大声で叫ぶ。

ユーリとポーがその声に気付き、その周りにいた衛兵が気付いていく。

「お願い、聞いて!!」

そして、民衆の多くが気付いた。汗だくになり、髪を顔に貼り付けながらも、必死に叫び続けるヘレナの姿に。

ヘレナ様。

ヘレナ様とクレア様だ。

民衆がざわめき始める。

ヘレナ様は体調を崩され静養中のはず。クレア様は、そのヘレナ様に付き添っているはず。民衆は皆、ダニエルから聞かされていた。

誰もがその姿と声に驚き、視線を向ける。

「山賊は、確かに悪党です！ ですが、彼らは私を助けてくださいました!! 真なる敵は、この男！ ダニエル騎士団長です!!」

ヘレナの叫び声が場に響き渡る。衛兵は戸惑い、生き残っている騎士はダンと今だ切り結んでいる。だが、ダンの士気は一気に拳がっていた。

「偽者だ!! これは、山賊が用意していた偽者である！ ヘレナ様は体調を崩されて部屋でお休みになられている！」

ダニエルは大声を張り上げる。その言葉に、民衆も動揺するかのようになり、喧騒が沸き起こり始めた。その喧騒は明らかな混乱と動揺。先ほど、カスパルを処刑した時のような熱気に満ちたものではなかった。

その煮え切らない喧騒にダニエルは不快感を露にする。

「捕らえろ!!」とダニエルは勢いをつけるかのようになり叫んだ。

「ヴァルトさんを助けて挙げて下さい！」とヘレナは心から叫ぶ。

「辞めて——助けてあげてください!!」

声を枯らし叫ぶ。

「山賊は悪くない!! 皆、悪いのはダニエルなんだよ!!」

クレアが叫んだ。ヘレナが叫び疲れる横に堂々と立ち、そう叫んだ。

クレア様が……。

誰かの震える声がそう呟いた。

喋った。

その言葉に、民衆は色々な意味で呆気にとられていた。

「お願いします!! 助けてください!」とクレアは頭を下げる。

一人の少女が頭を下げた。その後ろにある高台では一人の悪党たる山賊が絞首の刑に服している。その光景はあまりにも似合っていなかった。

ダンはヴァルトを見つめる。既に意識が飛び掛っている事が顔付きから判った。急ぐ必要があるとダンも動く。この隙に全てを賭けた。計画の成功も、ヴァルトの命も、自分達の命も。全部を賭けた。

「当たれ!」

ダンが投げナイフを投擲した。

騎士は双子姫に気にとられていた。今度こそ、妨害されずに飛んでいく。真っ直ぐに向かい、命中した先はヴァルトを吊るす縄だった。

縄を掠り虚空へと消える投げナイフだったが、ヴァルトにはそれで十分過ぎた。

僅かな切れ目が付いた瞬間、ヴァルトは渾身の力を振り絞って身を振った。既に、意識が遠のき始めていたので、文字通り死に物狂いで暴れた。そして――

「良し!」

ダンの言葉と共に、ヴァルトは高台に打ち付けられるように落ちた。

「頭――!!」

ユーリとポーが叫んだ。

「頭、大丈夫ですか」とダンが言った。

「おのれ!!」

ダニエルが咳き込んでいるヴァルトに斬りかかる。

「くそ、ヴォルフがあこの世の手前で、俺の顔を思い切り殴りやがった」

ヴァルトは手枷でダニエルの一撃を受け止めると、そう吐き捨てて笑った。

「まだ来るには早い」とダンも同じように笑った。

「そういうことらしいぜ」

ヴァルトはダニエルの剣筋をズラして体勢を崩させると跳躍し、両足でダニエルの腹を蹴りつけた。足枷で満足に動かさないのだから、そのまま高台に落ちるヴァルトは器用に受身を取る。だが、足元は覚束ない。息を十二分に出来なかったのだから、今は視界が揺らぎ、身体が空気を欲しているのだろう。

ヴァルトがふらついているその間に、ユーリがポーと合流する。

「よっしゃ! ポー大丈夫か!」とユーリが叫ぶ。

「痛いんですけど、動けます!!」

ポーはそう言いながら、弓を構えて高台でダンに襲い掛かる騎士目掛け矢を放つ。その時には

既に、衛兵は双子姫の言葉と姿に混乱してしまい、山賊を捕まえるか迷っている。どうやら、衛兵はダニエルの野望を知らないようであった。

この間も、ヘレナとクレアは大声を張り上げて民衆を説得している。そのため、事情を知らなかった多くの人々が民衆、衛兵問わず困惑していた。

「逃げるぞ、頭」

ダンはボアの矢が命中して苦悶に顔を顰める騎士目掛け投げナイフを飛ばす。その投擲に避ける動作も出来ず、騎士の喉元に突き刺さった。崩れ落ちる騎士の間を縫ってヴァルトの元へ向かい、手枷を外して、その手に短剣を握らせる。

「逃がすか!!」

襲い掛かってくる騎士にダンは気力を振り絞って応戦すると、ヴァルトも足枷を外し共闘を始めた。

「世界が、回る」

「大丈夫か」

そんなやり取りをしながら、ダンはヴァルトを援護しながら、ヴァルトは徐々に元の動きを取り戻して来る。二人の顔は悪党らしい良い顔だった。キラキラと眼は殺気立ちながらも、その顔は狂喜すら滲ませるほどの笑顔であった。

「くそっ!! こやつらは偽者だという事が判らぬのか!!」

ダニエルは逃げるようにヴァルトに蹴飛ばされた後、高台から降りながら声を荒げていた。それも、民衆に真実を伝え続ける双子姫を止めるためだった。

「皆さん。私を攫い、司教と共謀し権力を握ろうとしていた真犯人はあの男、ダニエル騎士団長です」

ヘレナは大声を挙げすぎて、いつものような声ではなかった。その声は掠れたが、民衆の耳に心地よく入り込んでいく。

「この男は、二十年前から仕えてきた恩を忘れ、野心と権力に溺れました。その結果、このような凶行に及びました」

クレアがヘレナと顔を見合わせてから言葉を続ける。その姿を見つめる民衆から言葉が消えていた。誰もが固唾を呑んでいたのだ。民衆の中では、一部の人が涙すら流していた。それほど、十年前を知る者達からすれば、今のクレアは気丈に見えていた。

「真に罰する必要があるのはこの男なのです!!」とヘレナ叫ぶ。

「私達は、悪党である山賊に命を救われました!!」とクレアが追随する。

「どうか、信じてください」

二人はそう締めくくり頭を下げた。

処刑場で騒いでいる民衆は居なくなった。時が止まったかのように静まり返る民衆の耳と目にはヴァルトとダンが騎士と戦う姿と、頭を下げ続ける双子姫を見比べているだけだった。

「偽者を捕らえろ——いや、殺せ!! 流言による扇動を領主たる俺の門前で行うとは言語道断!!」

その静寂をダニエルの大声が切り裂いた。ダニエルも大声を挙げ続けたからかガラガラに枯れた声だった。

「し、しかし——」

衛兵は戸惑いながらもダニエルに意見しようとする。

「貴様！ 俺の命令が聞けないのか。衛兵の分際で!!」

その言葉と態度に気圧されながらも衛兵は今の言葉で双子姫に従う道を選んだようだ。

「貴方は間違っている」

槍を構えようとする衛兵の態度に、ダニエルは機敏に反応した。

「衛兵が領主に楯突くなど、あってはならん!!」

ダニエルは、衛兵の腹を剣で突き刺した。あまりに突然の行動で、誰もが目を疑うように、その光景を見つめていた。

驚愕と痛み歪む衛兵は剣を抜き取られて地に伏せた。

「騎士達よ！ 双子姫を殺せ！」とダニエルは叫ぶ。

だが、騎士はヴァルトとダンを相手にしている二人だけで、その二人もそれに答える余裕はなかった。その様子を一瞥とダニエルは顔を顰めた。

「使えぬ者どもが、俺が直々に殺してやる!!」

ダニエルは双子姫に襲い掛かるべく走り出した。その様子を見て、民衆の誰かが言った。

ヘレナ様とクレア様の事は本当なんだ。と誰かが言えば、違う誰かがそうだと答える。

助けなければ。と誰かが先ほどよりも大きな声で言えば、姫様を助ける！ と、また誰かが大声を張り上げた。

民衆から沸き起こるそれらの言葉に、再び処刑場は熱気に包まれていく。

「どけ、邪魔だ！」とダニエルは叫ぶ。

双子姫の前に、一人の衛兵が立ち塞がった。

「と、通すわけにはいきません！」と衛兵の一人が叫んだ。

衛兵の構える槍は小刻みに震えていた。

「抵抗する者は皆殺しにしてやる！ 俺は神に選ばれた男だぞ!!」

その言葉に、衛兵の顔は絶望に塗りたくられた。彼は知っている。ダニエル騎士団長は剣の腕で上り詰めてきたほどの人物。そうして、自分の持った槍の柄を斬られ、肉薄した自分は助からない。衛兵がそう思った瞬間には、既にダニエルの剣が衛兵の首元を綺麗に貫通していた。

狂っている。

誰かが呟いた。今更ながら、多くの民衆が目の前で剣を使い衛兵を刺し殺したダニエルという男が狂っている事を理解した。

その中で、山賊は動く。

「行くぜ、ダン」とヴァルトが言った。

「おう」とダンも頷いて返答する。

斬り掛かって来る騎士を避けると反撃せずに高台から勢い良く飛び降りて、双子姫の元へ走り出した。

「ユーリ、ポー!! 助けるぞ、動け!!」とヴァルトが大声を挙げる。

だが、騎士も逃しはしない。ヴァルト達を追いかけていく。

その声と、切り結びながらも向かって来るヴァルトの姿を見つめるとユーリは額に右手を置いた。

「かぁ、やっぱりな！」とユーリは何処か嬉しそうに言った。

「案の定ですか。まったく世話を掛けるのが本当に好きですよ」

ボーも同じように、愚痴を零すがその顔は笑顔だった。

「けど、悪い気はしないよな？」

「当たり前ですよ」

ユーリとボーが真っ先にダニエルに襲い掛かる。民衆を殺す必要も無くなり、ボーも短剣を握り締めながら、ダニエルと対峙する事もせず、そのまま襲い掛かる。だが、その素早さを活かした速攻はダニエルの多才な剣裁きに阻まれて失敗に終わった。

ユーリは舌打ちを盛大に打ち鳴らしながら、地を這うように駆け抜けてダニエルの手を狙う。剣の握りから利き腕を右手だと判断したのだが、その攻撃もダニエルの握る両刃の剣によって受け止められてしまう。

さらにボーが側面から襲い掛かるも、ダニエルはユーリに怪力と思わせるほどの力で強引に、ユーリの体勢を崩し、ボーの一撃すらも防いで見せた。

「殺してやるぞ！ 餓鬼どもが」

ダニエルは二人の攻撃を受け止め、または避けながら笑みを浮かべた。その笑みに、ユーリは露骨に顔を顰める。

「くそ、良い悪党面しやがって」

「お株を奪われていますね」

二人の軽妙なやり取りに水を差し、ダニエルが襲い掛かってくるとユーリがその一撃を受け止めた。重い一撃に思わず、ユーリは膝を折る。だが、咄嗟にボーが横からダニエルを突き刺しに突進した。

「餓鬼が！」

ダニエルはそう叫び、膝を折っていたユーリを突き飛ばし、突進してきたボーの一撃切り払うとボーの開いた腹に向けて蹴りを入れた。

「ボー！」

ボーは苦しみながらも上体を起こす。

「う、動けます」

だが、咳き込みながら膝を付いているボーはどう見てもすぐには動けそうも無かった。それを一瞥するとダニエルは山賊を無視して、双子姫に襲い掛かる。

「クレア」

「お姉様」

二人は手を取り合って、迫り来るダニエルを睨みつけていた。二人を嘲笑うかのように万遍の笑顔を作りながら剣を振り上げるダニエル——だったが、何を思ったか咄嗟に身を引き、顔を横に向ける。

「小癪な真似を」とダニエルは呟いた。

その顔には綺麗に切り傷が通り、血が流れ落ちる。その隙に、短剣を投擲したボーは苦しみなながらも立ち上がり、ユーリはダニエルの足止めに身体を張る。

ダンが騎士の喉元へ短剣を突き刺してそう言った。全身血に染まっている。一番無理をしたのは騎士を複数人相手にしたダンであろう。肩から息をして、我慢して立っている。そんな印象を持たせた。

「任された」とヴァルトは応えた。

「死に損ないが!!」

ダニエルと交錯し、今日、何度目かの甲高い音を響かせる。

「よう、知ってるかい」

ヴァルトは呟いた。

「頭、これも使ってくれよ！」

ユーリが地面に座り込みながら、ヴァルトの足元に短剣を突き刺した。

「賊が、俺は神より選ばれた男だ。この世界を救う救世主となる存在!!」とダニエルは叫んだ。

ヴァルトは身を屈め、ユーリの短剣を握る。

「悪党にはよ、悪党の矜持ってえもんがあんのよ」

左手に握る短剣で、ダニエルの剣を左に受け流す。

「てめえにはあるのかい？」

ダニエルはヴァルトの右手に握る短剣の攻撃を身を屈めて避けると、そのまま剣を水平にして撫でるようにヴァルトを襲わせる。

「貴様ら賊が俺に楯突いて良い存在だと思っているのか!!」

ダニエルのがらがら声がヴァルトの耳を劈く。それでも、ヴァルトの顔は笑みを絶やさず、その口を動かし続ける。

「守ったり、貫き通したいもんがよ」

ヴァルトは左手の短剣を寝かせて、腕に密着させるとその一撃を受けきった。

「俺は、神によって選抜された、英雄たる素質を持ちえる男なんだぞ!!」

その言葉と共に、ダニエルの目は見開かれていた。

驚き、そして絶望がダニエルの顔を一瞬にして染め上げた。

「悪党にだってあるんだぜ？」

刹那に駆け巡る痛みは右腕から始まっていた。ダニエルの身体に刺し込まれた異物は、ヴァルトが右手で握っていた短剣。そこから生み出される激痛に堪らず、ダニエルは悲鳴を挙げた。

その悲鳴に合わせるように、ヴァルトも声を張り上げる。

「ちっぽけでも、確かにそんなもんがよ」

右口の端を釣り上げながらも、何処か妙に清々しさを与える——良い笑顔だった。

寝かしていた左手の短剣を握り直し、ダニエルの背中に流れるように回り込むとそこには露になっているダニエルの首。

ヴァルトは迷わず、その一点に向かって握る短剣を突き立てた。

山賊達がまず行った行動は、ニールの町から姿を消す事だった。ヘレナとクレアの静止も聞かず、山賊達は城壁に上り、そこから飛び降り消えて行った。

追う者は居らず、誰もが呆気にとられた逃走劇だった。今後、誰もが山賊に賛辞を言う機会は訪れる事が無く、町人の中からも、彼らが町を救ったという事に対する素直な気持ちは薄れていた。

ヘレナとクレアの初仕事は、ダニエルが山賊に殺されてから、二日後。

ニールの領主城では盛大な葬儀が行われた。謀殺されたラインハルト・グーテンベルク、そしてネーナ・グーテンベルクの葬儀は、喪主を双子姫の長女、ヘレナ・グーテンベルクが粛々と執り行われていった。

涙を見せまいと顔を強張らせる双子姫に、民衆は新たな統治者への期待と、支えていく決意を胸に、墓標の前で膝を折り、頭を垂れて行った。

墓標には、聖都教で用いられる形式を取った。不満はある。だが、聖都教という教えに罪は無い。ヘレナの言葉に、クレアは頷いた。それを民衆が文句を垂れる事などありはしなかった。

葬儀が終われば、次はヘレナが正式にグーテンベルク家の当主になり、領主となった。王都へは書状が届けられ、後日。任命官が叙任式を行うためにニールの町へとやってくる。

人々は気持ちを新たに、先に起こった事件を忘れる事無く、この町の緩やかなる発展を目指し今日もまた、働き。仕事が終われば酒を飲み、眠くなれば家に帰り、ベッドの中で、眠りに就く。そして、また朝を拝み、一日を謳歌していく。

処刑場は綺麗に掃除が成され、カスパル、ダニエル両遺体は火葬という形を取られた。神々の元へは骨のみで行き、滑稽な姿で審判を受けよ。それが火葬させた意図であり、誰一人として文句を言うものは居なかった。

「ヘレナ姉様。大丈夫ですか？」

クレアがため息を漏らすヘレナに声を掛けた。

今はヘレナの物となった執務室の椅子に腰掛けるヘレナは机に置かれている書状に眼を落としている。

「本当に、これで良かったのでしょうか」とヘレナは言った。

その顔は憂いに陰っている。まるで、悪い事を仕出かして、それが露見してしまわないかと、不安げになっている子供のようだった。

「町と、教会を考えると……」

クレアもまた苦々しい顔つきだった。

「町を救ってくださったのに、私は何も出来なかったのですね」とヘレナは言った。

父と母を弔う事も出来た。町も元に戻りつつある。

教会とは険悪になってしまったが、司教の悪行を公表されたくなければ——そう脅す事で、表面では良好な関係を築いている。それは、教会をこのままのさばらせてはおけないというある種の決意表明でもあった。

ヘレナとクレアの意志を汲み取った民衆も、双子姫の味方となっている事が大きかった。元々、一番の被害者は搾取されてきた民衆である事に変わりはない。だからこそ、民衆を味方につけておきながら、教会から攻撃を受ける恰好の餌を町に留めておく。まして召抱える事など、出来はしなかった。

感情論ではどうしようもできない。山賊は悪党でしかないのだ。民衆にとっても、教会にとっても。

町を救おうが、双子姫を救おうが、民衆は一時の感情で喜びを爆発させ、感謝を述べた。姿も見えない英雄像が、過剰なまでの崇拜を見せた。しかし、熱も醒めれば残るのは疑念と恐怖だけだった。

曰く。町の中核取り入り、今回のような事件をまた起こすのではないか。

曰く。山賊の仲間が他に沢山居て、この町を乗っ取る気ではないか。

曰く。本当は、自分達がこの町を支配するために仕組んだ芝居だったのではないか。

疑い出せば無尽蔵かと思えるほど湧き出てくる要らぬ考えの数々。その疑惑に民衆は踊らされる。

既に、山賊はニールの町に姿を現しては居ない。けれども、町人にとって悪党の認識なんてものは、恐怖し疑うべき存在に他ならない。

「だけれど、もっと、他に何かお礼が出来たのかもしれない」

ヘレナにとって、山賊が町に姿を見せなくなったのは自分がそう仕向けたように思えてならなかった。だが、そうしなければ、民衆が暴動を起こしたかもしれない。教会が強請ってくるかもしれない。考えれば考えるほど、山賊を召抱える利が薄れ、実害ばかりが積み上がっていく。

「ヘレナ姉様」

クレアは唇と静かに噛み締めた。

「何を、やっているのでしょうか。私は」

ヘレナの小さな声は、薄れて行く。

「山賊は悪党だから」とクレアは言った。

「悪党は悪党。町の人々が恐れるのは当然の事」

クレアの言葉に、ヘレナは顔を挙げた。その顔には怒気が含まれていた。

「けれども、彼らはこの町を救った英雄なのですよ」

クレアはその怒気を真正面から受け止める。

「山賊は、悪党は——望んでいない」

クレアの言葉に、ヘレナは面を食らった。

「あの人達は、見返りを求めなかった。私達が出来る事は何も無い。あの人達は自分達のやりたい事をやっただけだったの」

クレアの顔に迷いは無い。この前まで、感情を押し殺していた少女ではなかった。ヘレナはそ

の表情を見て、言葉を詰まらせた。

「クレア……」

ヘレナにとって、クレアがこれほどまでに強い意志を揺らめかせる瞳を持っていた事に気付かなかった事を何よりも今、驚いていた。

「約束事をずっと守ってる。あの人も、ずっと。だから、私達が無理して厚意を押し付けるのはダメ、だと思う」

その言葉に、ヘレナは救われていた。そして、クレアの表情から、約束事の重さを理解できた。彼らとて、赤子のときから悪党ではなかったはずだ。

「復讐したかった。その結果、私達は助かって、町も救われた」とクレアは言った。

ヘレナは気付く。彼らには彼らの理由があり、ヘレナ自身も悪党になるという選択肢があることを知った。

「追い詰めていたのは、自分だったのですね」

一人、そう呟いたヘレナは静かに目を閉じた。

自分がどうしてここまで山賊に拘ったのか。

ヘレナは心の中で呟いていく。

自分自身の体裁を保とうとしていた。もし、山賊がまたこの町に姿を見せた時、どうすれば良いか。歯切れ良くこの町から出て行ってもらうにはどうすれば良いか。

そんな事を心のどこかで思っていたのだ。

ヘレナは笑った。自分も町の人々と何ら変わりはない。その事に気付いたのだが、ヘレナは落胆の様子を見せはしない。それが、当たり前な感情だということを知ったからだ。

「私は、自分自身が領主という立場だという事で、知らず知らずの内に色々と考え過ぎていたのですね」

嘘をつく必要なんてなかった。山賊達は始めから町を救う予定なんてものは無い。私達を救うつもりはなかった。彼らは、悪党でいて、人間はそれほど高潔ではない。今回の事件が何よりもその証拠だった事をヘレナは忘れていた。

そう考えれば、ヘレナの顔は晴れ晴れとした表情に戻っていく。

「山賊は悪党で、私達は領主の娘で」とヘレナは言った。

それぞれの生き方がある。ヘレナには領主として町を運営していく生き方。山賊達は悪党としての生き方。決して相容れないものだった。

「私が心配するほど、あの人たちは愚かでも落ちぶれてもいなかった。それだけの事ですよね」

ヘレナは笑い、クレアも微笑んだ。

むしろ、私が縋りたがっていた。逃げ道として残しておきたいと考えていたのかもしれませんが

胸の奥深くで小さく吐き出されたその言葉は、すぐに溶けては形を消していく。

ヘレナは一つ大きな深呼吸を行うと顔を引き締めた。

「ニールの町は私達で、発展させましょう。お父様とお母様の意志を継ぎます」

「はい」

二人の顔に迷いは無い。

やる事はそれこそ、山のようにある。教会との戦いに始まり、衛兵や騎士団の再編成に加えて、経済状況の確認から商人との顔合わせ。

迷っている暇もなければ、悪党の心配をしている暇なんてものは無い。

「クレア」とヘレナは言った。

それでも、一番最初にするべき事がヘレナにはあった。

「ありがとう」

様々な想いが、その言葉に詰め込まれながらクレアへと真っ直ぐに向かっていった。その言葉に、クレアは目じりに涙を溜めながらもゆったりと笑みを作った。

「ヘレナ姉様。それは、私の言葉でもあります。だから、私はこの言葉を」

クレアは、ヘレナに近寄って、手を取った。

「宜しく願います」

クレアにとって、救われたのは命ではなかった。

多くの意味を持たせながらヘレナに向けられる。けれども、ヘレナは優しく笑い、手を握り合った。

「はい」

ヘレナとクレアは手を取り合って、涙を流した。ようやく、本当の姉妹に戻る事ができた事を喜ぶ。そんな涙だった。失いながらも、何かを得る事が出来た。それだけが救いとなって、双子姫は領主としての責務を果たす。

まずは、この書類を整理する事から。

ヘレナがそんな事を考えていた矢先、扉が二度ほど気味良く鳴らされて、出鼻を挫かれる。それでも気を取り直して、

「何用ですか」とヘレナは答えた。

「ザックス様からお手紙がヘレナ様に届いております」

衛兵の声に、ヘレナは首を傾げる。

「どうぞ」

クレアは一先ず、入ってきた衛兵から手紙を受け取った。

「失礼致します」

「ご苦労様です」

扉が閉められると、クレアはヘレナの元へ。

「何でしょうか」

「一度、本拠としている町に戻るはずですから、何か忘れ物ですか？」

二人は、手紙を開く。まずは、ヘレナがゆっくりと読み始める。文はそれほど長くは無かった。ヘレナはその文章を二度ほど読むと、クレアへ手渡す。クレアはその手紙を見て、僅かに眼を細めた。それは、睨むといよりは安らぐ。そんな言葉が似合っていた。

「これは、やりがいがありますね」とクレアは言った。

「ええ。でも、きっと町の人でも理解はしてくれるはずですよ」

ヘレナは表情を引き締めた。書かれていた内容は、お願い。

どんな形でも良いので、遺して欲しい。

「ヘレナ姉様」

クレアは思案顔をさせながら言った。

「新しく開く山はありますか？」

「——やりましょう。時間は掛かるとはありますが、丈夫な物を」

双子姫によって緩やかなる発展は、徐々に変化していく。観光誘致を人の噂話で行い、商人の流動を商人同士での繋がりですくすくさせつつ、以前から調査されていた鉱山を開く事に成功していく。その恩恵の一つが鉱石や石材の確保。少ないながらも資源を持ち、未だ輸出には弱すぎる代物ではあった。

それでも、教会の力を封じ込めながらも、しっかりと作られていく町は、やがて多くの人々が往来する町へと発展していく。

ゆっくりと、急ぎ過ぎず、町の人々と双子姫との成長を共にしていくかのように。

町と町を結ぶ街道には様々な種類がある。平原を真っ直ぐ通る街道もあれば、曲がりくねった丘陵地を駆け抜ける街道。その中には勿論、山道だって存在する。山間にある大きな炭鉱の町を繋ぐ山道に、山脈を抜けるための山道と、色々だ。

「よう、ちょっと止まってくれ。死にたくなかったらな」

「はいはい。止まりますよ」

ニールの町は他の町から遠く、山道と平原を貫く街道を往来する必要があった。その道中は、出発する町付近には賊の脅威が今だ消えておらず、平原や山道に入れば腹を空かせた獣が襲い掛かってくる心配もあった。

「聞き分けの良い奴は大好きだぜ？ まあ、安心しろよ殺しはしない」

そうした街道は、町々を治める領主である貴族や国を治める王が管理しているもので、町から近ければ騎士団や衛兵が巡回し、警備をしている。

商人は町に金と物をもたらし、国や領主に利益を与える。その商人は街道を通して町を行き来する大事なお客様だった。そんな商人達を護るために、領主や国も手を回している。

それでも、長い長い街道全てを護りきれぬわけでもなければ、町によっては街道に手を回せるほどの兵員すらままならない。そういう事態に陥っている領主の方が圧倒的に多い。

「商人様よ。貴方様は、何処まで行くのでしょうかね？」

だからこそ、賊徒と呼ばれる無法者がのさばり、いくら国や領主が討伐隊を出して討伐しようと消える事は無く、居るところには居て、居ないところには居なかった。

「キリバスの町ですよ。あそこは交易が盛んでしてね、何でも西から良質な毛織物が入って来ているそうで。一度本拠に戻ってから妻と従者でも連れて向かおうかと思ひまして、こうして馬車に揺られているわけです」

その言葉は、目の前で陽気に笑みを浮かべて、肩に手を乗せてくる一人の男に向けられていた。

商人は鹿のなめした皮の衣服を纏い、その上から麻のローブを纏っていた。それなのに、ゴツゴツとした手の感触が伝わってくる。掴み握る指先に至るまで、堅くまるで自分の身に付けているなめし皮か、それ以上の物に万力で肩を抑えられているように感じられたほどだ。

「前々から思っていましたけど、ヴァルトさんの手は堅いですよね。なめし皮よりよほど堅いと思います」

ザックスはそう言って笑った。

「おいおい。もう少し、雰囲気作れないのかねえ？」

ヴァルトは呆れた声を挙げた。

「頭の負けだよ」

ユーリが可笑しそうに笑い声を挙げて言った。

「そうですよ。乗せていってもらえないとこっちだって困るんですから」

ポーが苦笑いを浮かべている。

ダンはいつも通り無言で馬車の横で馬に乗っている。

「それで、その熊がディックさんですか？ 本当に熊なんですね」

ザックスは興味深そうに眺める。

「初めまして？ それとも久しぶり？」

ディックは顔を傾けながらそう言って、ザックスはその仕草と声に笑顔を作り出した。

「獣人は本当だったんですね。お久しぶりですよ。ディックさん」

ザックスは浅く頭を下げた。ディックも大きく頭を下げた。

「それで、どうするんですか？」

ザックスは陽気に笑みを浮かべながらそう言った。

「なあに。いっちょ俺達がお前さんの道中を護衛してあげようかと思ってね」

逞（たくま）しい。

ザックスは素直にそんな想いを持った。

目の前に居る五人の山賊は確かに賊徒で悪党だった。だが、それでも彼らは悪党の矜持を持って、ニールの町を救った。その事実は変わらない。双子姫はディックを抜かず四人を自警団として召抱えようとしたほどだった。

「俺らは五人でお前さんを護衛する。無事町近くまでついたら報酬を払う。問題は何かないぜ？ 勿論、払わねえと死ぬしかないがな」

ヴァルトの陽気な笑顔を見ていると、ザックスは胸が痛む。

ニールの町を救った英雄。しかし、彼らは悪党だった。ニールの町に、悪党の英雄は要らなかつた。それだけだ。

「はいはい。判りました。今度もよろしくお願いします」

ザックスは笑いながら素っ気無く返す。

山賊にとって、自分が投げ掛ける同情なんてものに価値を見出す人ではない。それを思うからこそ、ザックスは何食わぬ顔で彼らに接した。彼らには彼らの生き方がある。それも、殺されようと文句の言えない道を歩いているのだから尚の事。

「しまらねえな。本当」

ヴァルトは苦笑いを浮かべながらも、動き出す馬車に付き添うように馬を動かしていった。

山賊という賊徒が存在している。

賊徒の中でも主に山を根城にして、山道や山沿いの街道を歩く旅人や商人を襲い、物資や金銭を強奪する。時に、身代金目的に人を攫う事もあり、人も容赦無く殺す。

強請り集りに窃盗強盗——人殺し。何でもやる悪党。それが世間からの認識で、それは何も間違っていなかった。

ニールの町へ続く街道の隅にひっそりと佇む一つの石碑がある。まるで、往来する人々を見守るように作られたその石碑には、何かの指標なのか。はたまた何かの記念碑なのか。ただ、この

石碑には何一つ刻まれてはいない。

白を基調した石質で出来たその縦長い石碑は、ひっそりと雑木に隠れるようにしていながらも、その白さゆえに、太陽の光を良く輝かせる。その姿がまるで自己主張をしっかりとしているように見え、街道を往来する人々の視線を集めた。

建てられた意味を知らない旅人や商人は、街道に立てられた旅の安全を願う石碑だと勝手に解釈して花を手向けたり、お供え物をしたりする。

珍しい石ですな。

商人からそんな言葉が聞かれる。直に、あの白い石も少しずつ市場に出回る事になっていく。ニールの町の特産物として。

塩と同じく産出量は低い石材らしく、これだけ綺麗な色を持つ物は滅多には市場に出ない。そのため、わざわざ遠出をして、このニールの町まで仕入れに来るほど、石を求めて酔狂な商人が来る事もあった。

そんな商人達は、街道の石碑の意味を知る事になるだろう。

ニールの町で、あの石碑はなんだと問い掛ければ、誰でも答えてくれる。気兼ねなく答えてくれる人もいれば、眉間に皺を寄せて迷惑そうにしながらも答えてくれるだろう。

そうして、問い掛けた側があの白い石碑の意味を知らされたら、どうなるだろうか。

恐らく、そんな事のためにあんな珍しい石を使ったのか。

そう怒るかもしれないし、呆れるかもしれない。

たった一人の山賊のために、何故あんな石碑を建てた。

ニールの町に住まう多くの民衆もその事には大方同意するだろう。酒屋などでその話をすれば、多くの人が共感するはずだ。

「山賊は悪党だぜ？　なんだってあんなものを」と旅人が赤い顔をしながら呟いた。

「確かに悪党だったんだよ」

石碑の意味を教えた町人が苦笑いを浮かべる。

「そうそう」

隣で飲んでいた若い男が、如何にも酔っている顔でテーブルに顎を寄せながら相槌を打った。

「だけだよ。やっぱ、悪党にも種類があるんだって思い知ってたんだよな」

「そりゃ、アンタ。山賊、盗賊、馬賊に、夜盗、スリ。一杯居るわな」

「違う、違う。それは言わば職種ってもんよ？」

町人は、勢い良くコップをテーブルに打ちつけた。若い男は気持ち悪そうにしている。

「俺らが言っているのはその職種に就いている人自身の事さ」

「悪党にそこまで肩入れするのも気味悪いもんだぜ」

旅人は訝しがりながらビールを飲み込む。

「肩入れしている、かもしれねえが。まあ、悪党にも色んな悪党が居るって知ってたんだよ」

その言葉と、語った町人の顔はどこか、苦しそうにも見えた。

「何かあったのか？」

興味を惹かれたのか。旅人は問い掛けた。

「馬鹿な山賊の話だぜ？」

「面白そうだな」

旅人が肘をテーブルにおいて、町人を見る。その顔を眺めながら、きっとこの話は町人にとって辛いけれど語り継ぐものなんだという、妙な責務みたいな重さを感じていた。

「山賊が、この町を救って俺達が追い出した——そんなお話さ」

今日も、「バッカスの欠伸」は繁盛しているようで、旅人や商人も店に繰り出し、町人と一緒になって酒を飲みあい、噂話から降って沸いた英雄話に花を咲かせる。

悪党だった山賊が、領主のお姫様と町を救った。そんなお話。

山賊は悪党で（了）